

アール・ブリュットの(こゝろ)声

ラジオ番組「Glow～生きることが光になる～」ドキュメントブック



声が聞こえる。

障害のある誰かが制作しながら漏らすその声。
そして、知っているはずの日常から立ち上がる、家族の感動の声。
その声は、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAや
各地の美術館で、多くの観客に届けられ、
そこでもまた多様な声が浮かび上がり、
人々の創造（想像）の幅を広げ、心に奥行きを与えてくれる。

声が聞こえる。

一つひとつの作品があげるそのかそけき声。
そして、その声を確かに受け取り、
めいめいの使命を持って新たな価値を紡ぎあげる、
障害福祉現場スタッフや美術関係者の声。
その価値はときに議論の種をまき、
「福祉」とは何か、「アート」とは何かを、
根底から問いかける。

声が聞こえる。

音楽という名の、ダンスという名の声。
声は琵琶湖の畔で学業に励む高校生にも、
老いを緩やかに受け入れる高齢者や
その尊い人生に寄り添う介護職員たちにも、
新しい表現を渴望する美大生にも、
第二の人生をまちづくりに捧げたいと願う地域住民にも、
じわじわと染み渡る。

表紙イラストは、そんなアール・ブリュットが語りかける声と、
それらを受けた一人ひとりの「私たち」が応答せんと紡ぐ、
その声から生まれる「風景」を表現している。
本書は、それらの声たちを4年半の間、
電波に乗せてお茶の間に届け続けた、
ある「ラジオ」の記録である。

目次

[はじめに] アサダワタル（文化活動家・本番組パーソナリティ） 4

ラジオ Glow～生きることが光になる～全番組リスト 7

① 障害福祉・医療現場から立ち上がる表現活動 15

末安民生（日本精神科看護協会会長） 16

米田昌功（NPO法人障害者アート支援工房「ココペリ（COCOPELLI）」理事長・美術家） 28

鈴木励滋（地域作業所カフカブ所長） 30

薬戸さゆみ／横井悠（社会福祉法人グロー法人本部企画事業部学芸員） 32

② アート・文化関係者から見たアール・ブリュット 41

今井祝雄（美術家・成安造形大学名誉教授） 42

呉美保（映画監督） 52

今泉岳大（高浜市やきもの 里かわら 美術館学芸員） 54

中谷満（打楽器奏者・相模大学音楽学部教授・糸賀一雄記念賞音楽祭実行委員会実行委員長） 56

③ 作家インタビュー 67

鮎万里絵 68

西村一幸 76

谷本達哉 77

徳山彰 78

④ 「障害」の見方を変える多様な視点 85

六車由実（デイサービス「すまいるほーむ」管理者・民俗研究者） 86

猪瀬浩平（見沼たんぼ福祉農園事務局長・明治学院大学教員） 96

中川悠（株式会社きびもく・NPO法人チュラキューブ代表） 98

山下耕平（NPO法人フォロ事務局長） 100

⑤ 「滋賀」という地から 109

石川亮（美術家・成安造形大学共通教育センター助教） 110

渡辺亜由美（滋賀県立近代美術館学芸員） 120

中島秀夫（社会福祉法人グロー 理事） 122

小暮宣雄（京都橋大学現代ビジネス学部教授） 124

⑥ アール・ブリュットの切り開く未来 133

田島征三（美術家・絵本作家）× 北岡賢剛（社会福祉法人グロー理事長） 134

きたやまおさむ（精神科医・作詞家） 144

青柳正規（前文化庁長官・山梨県立美術館館長）× 小室等（ミュージシャン）× 北村成美（ダンサー・振付家） 146

小林瑞恵（社会福祉法人愛成会副理事長・アートディレクター）× 渡邊芳樹（元駐スウェーデン特命全権大使・国際医療福祉大学大学院教授） 148

[番外編] 現地レポートなど 153

[寄稿] 声に立ち会った人たち

細馬宏通（人間行動学者・早稲田大学教授・滋賀県立大学名誉教授） 162

鈴村りえ（社会福祉法人グロー法人本部企画事業部学芸員） 164

伊藤健（株式会社京都放送（KBS京都）ラジオ営業局営業部長） 165

[まとめ] 田端一恵（社会福祉法人グロー企画事業部副部長） 166

凡例

出演者の肩書き、プロフィール、所属等は番組放送当時の情報に基づきます。

以下を略称として表記します。

「NO-MA」⇒「ボーダレス・アートミュージアムNO-MA」

「社会福祉法人グロー」⇒「社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～」

その「声」は、私たちの「内側」にある

アサダワタル（文化活動家・本番組パーソナリティ）

番組名に込めた思い

「滋賀県近江八幡市にある、ボーダレス・アートミュージアム N O M A をご存知でしょうか？ 社会福祉法人が運営する美術館として注目される N O M A では、これまで障害のある作り手と現代アーティストの作品を並列に展示し、人の持つ普遍的な表現の力に迫ってきました。この番組は、『障害』というテーマに向き合いながら、アール・ブリュットなど、『福祉』から生まれる様々な表現の可能性について、ゲストを交えて語り合う、新しい切り口のトーク番組です。」

このナレーションから始まるラジオ番組「Glow」生きることが光なる」は、2013年10月にスタートし、毎週金曜晚欠かさず放送し続け、2018年3月に235回の放送をもって終了した。番組最初期2013年10月～2014年3月までの半年間は、近江学園の創立者で日本の障害福祉の父として知られる糸賀一雄氏の功績を称える「糸賀一雄生誕100年記念事業」の一環として放送。糸賀氏が残した最も有名な言葉に「この子らを 世の光に」がある

が、その言葉をうけて、当時の事業実行委員会の中で「生きることが光になる」というコンセプトが浮かび上がる。この「生きることが光になる」という言葉を、「番組名」としてどう表現するか。当時、広報部門のディレクターをしていた僕がその役を担うことになり、「光る」＝「shine / twinkle / flash…」と様々ある中で「内側から光り出す」かつ「幸せを感じて光り出す」というニュアンスを強く持った「Glow」を採用することにした。

糸賀一雄氏の記念事業から始まったこのラジオ番組は、当初半年で終わる予定だったが、アール・ブリュットを紹介する番組としてリニューアルし、滋賀県のバックアップを得て、2014年4月以降も続くことになる。ちょうどその頃、滋賀県社会福祉事業団（当時）と社会福祉法人オーブンスペースがーと（当時）が合併する時期と重なり、あるとき理事長の北岡賢剛氏から僕の携帯に「合併する法人名を、ラジオのタイトルの『Glow』にしたいんだけど良いかな？」と突然伝えられたことを、今でもはっきり覚えている。それはラジオを通じて生まれた「声」がまた「現場」に連綿と受け継

がれてゆくイメージをはっきり持った瞬間でもあり、僕にとっては至極の喜びだった。

結果、4年半もパーソナリティを務めさせてもらい、回を増すごとに「このタイトルにして間違いなかった」と感じてきた。なぜなら、アール・ブリュットの「声」は、私たち一人ひとりの人生と切り離された外側にあるのではなく、私たち一人ひとりの人生と地続きである「内側」にあるのだと確信してきたからだ。

さて、そもその話ではあるが、（造形にしてもパフォーマンスにしても）「目で観る」ことを前提にした類まれな表現の醍醐味を、ラジオという「音で伝える」ことの意味についてはそれなりに悩んできた。しかし、「皆さんこんばんは。アサダワタルです」という「声」を、淡々と4年半発し続けた結果、「声」じゃないとできない「何か」はおぼろげながら確実にあるなあと実感するに至った。ちょっとそのあたりについても考えながら、本書の内容を簡潔に紹介しようと思う。

スタジオからの「声」

スタジオには、アール・ブリュットの作り手もさることながら、障害福祉現場や医療現場に携わるスタッフ、美術や映画、文学や写真、音楽やダンスや演劇など幅広くアートを形にする芸術家や、それらを言葉にするキュレーターや研究者、また、認知症介護や若者

支援など多分野でユニークな実践を行う社会活動家、滋賀という土地に根付いて活動するまちづくりの担い手や、アール・ブリュットのさらなる広がりを応援する行政職員や企業人など、実に幅広いゲストが続々と訪れた。

彼ら彼女らには、「表現」に出会ったときの感動を自らの活動の変遷と絡めて語ってもらい、自分にとって「障害」とは何か、「福祉」とは何かについて、少しずつ「声」にしてもらった。アール・ブリュットについて語ること自体も大切だけど、より意識してきたのは、「福祉現場から生まれる表現について語ること」が、抽象度が高く普段なかなか他者に伝えきれない「障害」や「福祉」にまつわる思いを、自然と「声」に変換してくれる、そういう「装置」としてこのラジオが使えないかと、考えてきたのだ。

しかも「声」であることは、こういったテキストとは違って、意味レベルを超えた「感情」や「空気感」も含めて伝わる「何かの量」（あえて「情報量」とは言いたくない）が半端ない。ひよっとしたら、そもそも言葉にのみ還元できない（あるいは作り手によっては言葉を主なコミュニケーション手段として使わない）「表現」にあえて「言葉」を与える際の態度として、「声」という身体性を添えることは一つの答えになりえるのではないかと。

本書では、彼ら彼女らの「声」の持つ空気感を少しでも残したいと思ひ、各章の冒頭ではその章テーマにとって象徴的な内容となっ

ラジオ Glow ～生きることが光になる～ 全番組リスト

※ 第1回～26回は糸賀一雄生誕100年記念事業の一環として放送
 ※ 出演者の肩書き、団体名、施設名等は放送当時のもの

回数	放送日(毎週金曜日)	放送タイトル	出演
27	2014年4月4日	『アール・ブリュットを訪ね歩く ポーダーを超える実践的取り組み』	はたよしこ [NO-MAアートディレクター]
28	2014年4月11日	『アール・ブリュットを訪ね歩く ポーダーを超える実践的取り組み』	はたよしこ [NO-MAアートディレクター]
29	2014年4月18日	[現地レポート]『展覧会「アール・ブリュット☆アート☆日本」』	齋戸さゆみ [社会福祉法人グロー]、久木茂 [ポランティアスタッフ]
30	2014年4月25日	[現地レポート]『展覧会「アール・ブリュット☆アート☆日本」』	宮村勲 [まちや倶楽部代表]、巽弓枝/巽朱里 [ポランティアスタッフ]
31	2014年5月2日	『発見! コミュニケーションの回路としてのアール・ブリュット』	細馬宏通 [人間行動学者/滋賀県立大学教授]
32	2014年5月9日	『発見! コミュニケーションの回路としてのアール・ブリュット』	細馬宏通 [人間行動学者/滋賀県立大学教授]
33	2014年5月16日	[現地レポート]『細馬宏通と訪ねる アール・ブリュットが生まれる現場 その1 (やまなみ工房編)』	細馬宏通 [人間行動学者/滋賀県立大学教授]、 早川弘志 [やまなみ工房主任支援員] ほか
34	2014年5月23日	[現地レポート]『細馬宏通と訪ねる アール・ブリュットが生まれる現場 その2 (古久保憲満さんアトリエ編)』	細馬宏通 [人間行動学者/滋賀県立大学教授]、 古久保憲満 [アール・ブリュット作家]
35	2014年5月30日	『アール・ブリュットが生まれる瞬間に立ち会う 福祉職員の立場から』	田端一恵 [社会福祉法人グロー]
36	2014年6月6日	『精神医療の現場から生まれるアール・ブリュット』	末安民生 [日本精神科看護協会会長]
37	2014年6月13日	『精神医療の現場から生まれるアール・ブリュット』	末安民生 [日本精神科看護協会会長]
38	2014年6月20日	[現地レポート]『美術家 椎原保と語る、展覧会「Timeless 感覚は時を越えて」の見所』	椎原保 [美術家 (出展者)]
39	2014年6月27日	[現地レポート]『美術家 椎原保と語る、展覧会「Timeless 感覚は時を越えて」の見所』	椎原保 [美術家 (出展者)]
40	2014年7月4日	『滋賀の生活美とアール・ブリュット』	上田洋平 [滋賀県立大学地域共生センター助教]
41	2014年7月11日	『滋賀の生活美とアール・ブリュット』	上田洋平 [滋賀県立大学地域共生センター助教]
42	2014年7月18日	[現地レポート]『特養で双六!? 記憶と語りが繋りなす地域文化の可能性 特別養護老人ホームふくらより』	上田洋平 [滋賀県立大学地域共生センター助教]、 山口美由樹 [特別養護老人ホームふくら所長] ほか
43	2014年7月25日	[現地レポート]『特養で双六!? 記憶と語りが繋りなす地域文化の可能性 特別養護老人ホームふくらより』	上田洋平 [滋賀県立大学地域共生センター助教]、 山口美由樹 [特別養護老人ホームふくら所長] ほか
44	2014年8月1日	[現地レポート]『精神科病院で写真展! 患者、職員、写真家による新たな関係性』	大西暢夫 [写真家]、小川貞子 [浅香山病院副院長/看護部長] ほか
45	2014年8月8日	『日本のアール・ブリュットのこれから NO-MA10年を振り返って』	今井祝雄 [美術家/成安造形大学名誉教授]
46	2014年8月15日	『日本のアール・ブリュットのこれから NO-MA10年を振り返って』	今井祝雄 [美術家/成安造形大学名誉教授]
47	2014年8月22日	『人生の最終カーブをキュンキュンと走る! 「快走老人録II—老ヒテマスマス過激ニナル—」』	はたよしこ [NO-MAアートディレクター]
48	2014年8月29日	[現地レポート]『リアリティーこそアート。 「快走老人録II—老ヒテマスマス過激ニナル—」 折元立身インタビュー』	折元立身 [現代美術家]、はたよしこ [NO-MAアートディレクター]
49	2014年9月5日	『聞き書きを通じて出会いなおす ～高齢者介護の現場から生まれる表現～』	六車由実 [デイサービス「すまいるほーむ」管理者/民俗研究者]
50	2014年9月12日	『聞き書きを通じて出会いなおす ～高齢者介護の現場から生まれる表現～』	六車由実 [デイサービス「すまいるほーむ」管理者/民俗研究者]
51	2014年9月19日	[現地レポート]『すまいるほーむ納涼祭～思い出の味作り、すまいる音頭～』	六車由実 [デイサービス「すまいるほーむ」管理者/民俗研究者]、 村松健 [すまいるほーむスタッフ] ほか
52	2014年9月26日	[現地レポート]『すべてはもったいないから始まった ～「快走老人録II」 出展作家 白井貞夫インタビュー～』	白井貞夫 [出展者]
53	2014年10月3日	[現地レポート]『誰もやっていないような面白いことをやろう! ～「快走老人録II」 出展作家 小西節雄インタビュー～』	小西節雄 [出展者]
54	2014年10月10日	[現地レポート]『大合唱隊も参加した ～「ほほえみちから」レコーディングレポートと小室等さんインタビュー～』	さくらジュニアオーケストラ、小室等 [ミュージシャン] ほか
55	2014年10月17日	『老いと表現について考える』	釈徹宗 [僧侶/宗教学者]
56	2014年10月24日	『老いと表現について考える』	釈徹宗 [僧侶/宗教学者]
57	2014年10月31日	『障害のあることやないことや、音楽表現の可能性。～糸賀一雄記念賞音楽祭の取り組みから～』	中谷満 [打楽器奏者/糸賀一雄記念賞音楽祭実行委員会実行委員長]
58	2014年11月7日	『障害のあることやないことや、音楽表現の可能性。～糸賀一雄記念賞音楽祭の取り組みから～』	中谷満 [打楽器奏者/糸賀一雄記念賞音楽祭実行委員会実行委員長]

た放送回を一つ選び、放送内容をできるだけいじらずインタビュー形式のまま掲載した。またインタビュー形式のあとに、各章で語られた要点を実に興味深く「声」にしてくれた3組のゲストによる放送回を、アサダの視点も含めてコラムという形でまとめてみた。

現場からの「声」

番組では、アール・ブリュットが生まれる様々な現場——作業所、デイサービス、特別支援学校、作家の自宅アトリエなどに、社会福祉法人グロー法人本部企画事業部の田端一恵氏と鈴村りえ氏が現地リポーターとして訪れている。第3章のように直接作家にインタビューをするときもあれば、番外編に掲載したよう展覧会などイベントの雰囲気全体をリポートするなど様々だが、そのどれもが(視覚メディアでない)「ラジオ」ゆえにかえって臨場感を伴う内容となっている。

手前味噌に聞こえるかもだが、作り手の(現場の空気感も含めた)「声」をここまで追い続け、収録し続けたメディアは、おそらくこの番組をのぞいてほかにないのではないかと、自負している。だからこそ、本書において作家のインタビューを「そのまま」テキストとして掲載することは非常に難しく、「意味」レベルだけで読めばともすれば「内容がうすい(あまり何も語っていない)」と受け取られるかもしれない。しかし、それこそ「声」の力がここでも効いてくる。

また、障害のある作り手の中には、カメラ(映像)を撮られることを嫌う人も一定数いて、「ラジオ」ゆえに出演していただき、語ってもらえたという背景も付け加えておこう。

お願いとお礼

本書を読んでいただくにあたって、ぜひともお願いしたいのは、折に触れて「ラジオそのもの」も聞き返してほしいということだ。ポードレス・アートミュージアムNO-MAのホームページの「こちらからラジオの放送を聞くことができます」と書かれたバナメニューをぜひクリックしてほしい(<http://www.no-ma.jp/radio.html>)。全235回、すべてのアーカイブが聴取可能だ。

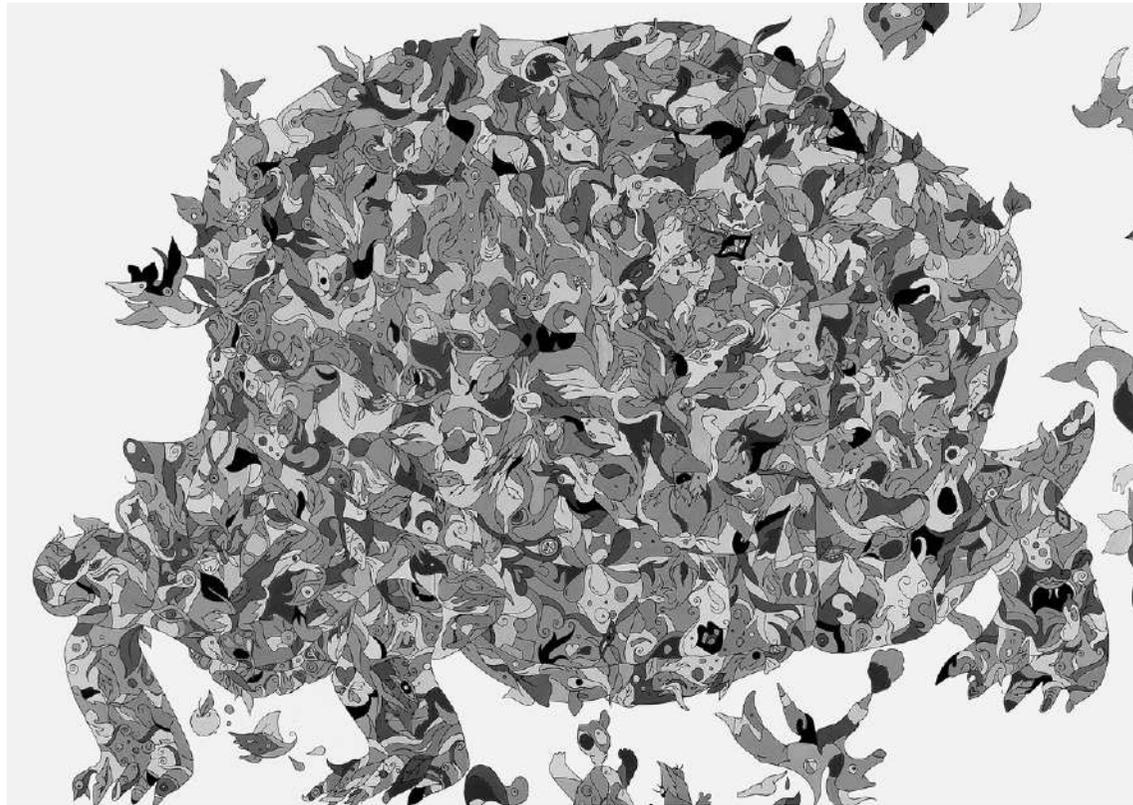
今でもこうしてラジオにアクセスできる状態を保っているのは、ひとえにKBS京都の営業部長伊藤健さんによる「番組が終わっても一人でも多くの人にラジオを聴いてほしい」という思いと努力の賜物であり、伊藤さん、そして同じく営業部の中谷祐実さん、また担当ディレクターとして番組づくりに奔走してくださった永田和美さん、田中雅子さん、その他、関係各位に心よりお礼を申し上げます。最後に、番組に出演いただいた全ゲストの皆様方に、すべての「声」を本書に反映しきれなかったお詫びとともに、心より深く感謝いたします。ありがとうございます。

回数	放送日(毎週金曜日)	放送タイトル	出演
94	2015年7月17日	『アール・ブリュットと地域づくり 湖北アール・ブリュットの取り組みから』	廣部猛司 [湖北アール・ブリュット展推進会議理事長]
95	2015年7月24日	[現地レポート] 『鳥の目から世界を見る』展 出展作家山田美智子の制作現場』	山田美智子 [出展者(やまなみ工房)] ほか
96	2015年7月31日	『Glow 生きることが光になる 振り返り編』	アサダワタル/田端一恵
97	2015年8月7日	『ある現代美術家の創作原点とアール・ブリュット —パラモデル・中野裕介の場合—』	中野裕介 [美術家/パラモデル]
98	2015年8月14日	『ある現代美術家の創作原点とアール・ブリュット —パラモデル・中野裕介の場合—』	中野裕介 [美術家/パラモデル]
99	2015年8月21日	[現地レポート] 『創作ビレッジこるり村 西村一幸の制作現場』	西村一幸 [創作ビレッジこるり村] ほか
100	2015年8月28日	『Glow 生きることが光になる 放送100回&101回記念放送 アール・ブリュットと日本の未来について語り合う』	野澤和弘 [毎日新聞論説委員]、北岡賢剛 [社会福祉法人グロー理事長]
101	2015年9月4日	『Glow 生きることが光になる 放送100回&101回記念放送 アール・ブリュットと日本の未来について語り合う』	野澤和弘 [毎日新聞論説委員]、北岡賢剛 [社会福祉法人グロー理事長]
102	2015年9月11日	『アール・ブリュットとMUSUBU SHIGA』	服部滋樹 [graf代表/クリエイティブディレクター]
103	2015年9月18日	『アール・ブリュットとMUSUBU SHIGA』	服部滋樹 [graf代表/クリエイティブディレクター]
104	2015年9月25日	[現地レポート] 『展覧会「これ、すなわち生きものなり』』	横井悠 [社会福祉法人グロー]
105	2015年10月2日	『地域に関わる・アール・ブリュットに関わる仕掛けづくり』	中脇健児 [「場とコトLAB」代表/公益財団法人伊丹市文化振興財団]
106	2015年10月9日	『地域に関わる・アール・ブリュットに関わる仕掛けづくり』	中脇健児 [「場とコトLAB」代表/公益財団法人伊丹市文化振興財団]
107	2015年10月16日	『アール・ブリュットから垣間みる世界の秘密』	鎌田東二 [京大大学こころの未来研究センター教授]
108	2015年10月23日	『アール・ブリュットから垣間みる世界の秘密』	鎌田東二 [京大大学こころの未来研究センター教授]
109	2015年10月30日	[公開収録] 『「これ、すなわち生きものなり」展 講演「民俗社会のなかの妖怪たち』』	小松和彦 [文化人類学者/民俗学者]
110	2015年11月6日	[公開収録] 『「これ、すなわち生きものなり」展 講演「民俗社会のなかの妖怪たち』』	小松和彦 [文化人類学者/民俗学者]
111	2015年11月13日	『紙の上の私の風景と日常の風景〜アール・ブリュット作家鮎万里絵さんに聞く〜』	鮎万里絵 [アール・ブリュット作家]
112	2015年11月20日	『紙の上の私の風景と日常の風景〜アール・ブリュット作家鮎万里絵さんに聞く〜』	鮎万里絵 [アール・ブリュット作家]
113	2015年11月27日	『表現と居場所の関係 生きづらさを現す別の仕方』	上岡陽江 [ダルク女性ハウス施設長]、坂上香 [映画監督]
114	2015年12月4日	『表現と居場所の関係 生きづらさを現す別の仕方』	上岡陽江 [ダルク女性ハウス施設長]、坂上香 [映画監督]
115	2015年12月11日	『越境する障害福祉 そしてアート活動のゆくえ』	椎名保友 [日常生活支援ネットワーク・コーディネーター]
116	2015年12月18日	『越境する障害福祉 そしてアート活動のゆくえ』	椎名保友 [日常生活支援ネットワーク・コーディネーター]
117	2015年12月25日	[現地レポート] 『「第12回滋賀県施設合同企画展」滋賀県立三雲養護学校』	羽賀詢 [出展者(滋賀県立三雲養護学校)] ほか
118	2016年1月1日	『新春・2015年振り返りトーク』	アサダワタル/田端一恵
119	2016年1月8日	[現地レポート] 『「第12回滋賀県施設合同企画展」滋賀県立信楽学園』	谷本達哉 [出展者(滋賀県立信楽学園)] ほか
120	2016年1月15日	『福井という土地から障害福祉×アートを根づかせてゆくこと』	荒川裕子/濱見彰映 [NPO法人福井芸術・文化フォーラム]
121	2016年1月22日	『福井という土地から障害福祉×アートを根づかせてゆくこと』	荒川裕子/濱見彰映 [NPO法人福井芸術・文化フォーラム]
122	2016年1月29日	[公開収録] 『対談「障害者の作品の魅力と可能性について』』	今井祝雄 [美術家/成安造形大学名誉教授]、中野裕介 [美術家/パラモデル]
123	2016年2月5日	[公開収録] 『対談「障害者の作品の魅力と可能性について』』	今井祝雄 [美術家/成安造形大学名誉教授]、中野裕介 [美術家/パラモデル]
124	2016年2月12日	『梅沢富美男さん、池田明子さんに聞く、アールブリュットの魅力』	梅沢富美男 [梅沢劇団座長/俳優]、池田明子 [一般社団法人日本ハンドケア協会代表理事/フィットセラピスト(植物療法士)]
125	2016年2月19日	『青柳正規文化庁長官に聞く、アールブリュットの魅力と多分野とのつながり』	青柳正規 [文化庁長官]
126	2016年2月26日	[公開収録] 『アメニティーフォーラム20オープニング講演』	呉美保 [映画監督]、山上徹二郎 [映画プロデューサー]
127	2016年3月4日	『呉美保監督に聞く、アール・ブリュットの魅力』	呉美保 [映画監督]
128	2016年3月11日	[現地レポート] 『「アール・ブリュット☆アート☆日本3」～ボランティアスタッフのおすすめ! 展覧会のみどころ～』	木元聖奈 [社会福祉法人グロー]、ボランティアスタッフ
129	2016年3月18日	[公開収録] 『「ingスーパーサイタル」田中佑芽アコースティックライブ』	田中佑芽 (ユメコ・パデセント) [出展者(きりり庵)]
130	2016年3月25日	『2015年度振り返りトーク』	アサダワタル/田端一恵
131	2016年4月1日	『福祉と関わりながらアートを届けること。 —NO-MA、糸賀一雄音楽祭の現場に携わるスタッフの声—』	横井悠/山田創 [社会福祉法人グロー]

回数	放送日(毎週金曜日)	放送タイトル	出演
59	2014年11月14日	『境界(マージナル)を生き抜く表現者たちへのまなざし』	坂上香 [映画監督]
60	2014年11月21日	『境界(マージナル)を生き抜く表現者たちへのまなざし』	坂上香 [映画監督]
61	2014年11月28日	『くちやくちやした他人同士がそのままに居合わせること 音楽的場づくりの可能性』	大友良英 [音楽家]
62	2014年12月5日	[現地レポート] 『糸賀一雄記念賞第十三回音楽祭・湖南ダンスワークショップグループ』	北村成美 [ダンサー/振付家] ほか
63	2014年12月12日	『ほほえむちから。糸賀一雄記念賞音楽祭の取り組みから知ったこと』	谷川賢作 [ピアニスト]
64	2014年12月19日	『ほほえむちから。糸賀一雄記念賞音楽祭の取り組みから知ったこと』	谷川賢作 [ピアニスト]
65	2014年12月26日	[現地レポート] 『第11回滋賀県施設合同企画展 ing…～障害のある人の進行形～』	中川猛義 [出展者(きりり庵)]、山本サユリ [出展者(しあわせ作業所)] ほか
66	2015年1月2日	『目に見えない表現と向き合う近づく。やさしい美術プロジェクトの実践から』	高橋伸行 [アーティスト/名古屋造形大学教授]
67	2015年1月9日	『目に見えない表現と向き合う近づく。やさしい美術プロジェクトの実践から』	高橋伸行 [アーティスト/名古屋造形大学教授]
68	2015年1月16日	『ひとりの医者としてアール・ブリュットを支えること』	笠原吉孝 [医師/滋賀県医師会長]
69	2015年1月23日	[公開収録] 『アール・ブリュットへ その道程と幸福について』	田口ランディ [作家]、嘉田由紀子 [前滋賀県知事]
70	2015年1月30日	[公開収録] 『アール・ブリュットへ その道程と幸福について』	田口ランディ [作家]、嘉田由紀子 [前滋賀県知事]
71	2015年2月6日	『写真という表現を携えて向かい合った「もうひとつの時間」—写真集『ソローニユの森』から—』	田村尚子 [写真家]
72	2015年2月13日	『写真という表現を携えて向かい合った「もうひとつの時間」—写真集『ソローニユの森』から—』	田村尚子 [写真家]
73	2015年2月20日	『青柳正規文化庁長官 特別インタビュー』	青柳正規 [文化庁長官]
74	2015年2月27日	[現地レポート] 『アール・ブリュット☆アート☆日本2』	齋戸さゆみ [社会福祉法人グロー]、ボランティアスタッフ ほか
75	2015年3月6日	[公開収録] 『きたやまおさむ特別講演・特別インタビュー「生々しい何かと強迫 ～なぜ、作品に巻き込まれるのか～』』	きたやまおさむ [精神科医/作詞家]
76	2015年3月13日	[公開収録] 『きたやまおさむ特別講演・特別インタビュー「生々しい何かと強迫 ～なぜ、作品に巻き込まれるのか～』』	きたやまおさむ [精神科医/作詞家]
77	2015年3月20日	『きたやまおさむ 特別インタビュー』	きたやまおさむ [精神科医/作詞家]
78	2015年3月27日	『Glow 生きることが光になる 2014年度振り返り編』	アサダワタル/田端一恵
79	2015年4月3日	『福祉とアートの狭間で展覧会をつくるという仕事 —ボードレスアートミュージアムNO-MAの現場から—』	横井悠/齋戸さゆみ [社会福祉法人グロー]
80	2015年4月10日	『福祉とアートの狭間で展覧会をつくるという仕事 —ボードレスアートミュージアムNO-MAの現場から—』	横井悠/齋戸さゆみ [社会福祉法人グロー]
81	2015年4月17日	『地域と呼吸するアーツの取り組み、そしてアール・ブリュットの可能性』	小暮宣雄 [京都橋大学現代ビジネス学部教授]
82	2015年4月24日	『地域と呼吸するアーツの取り組み、そしてアール・ブリュットの可能性』	小暮宣雄 [京都橋大学現代ビジネス学部教授]
83	2015年5月1日	『アール・ブリュットを記録し続けること』	代島治彦 [映画作家/プロデューサー]
84	2015年5月8日	『アール・ブリュットを記録し続けること』	代島治彦 [映画作家/プロデューサー]
85	2015年5月15日	『アール・ブリュットを通じてひとり一人の人間に出会うこと』	小林瑞恵 [社会福祉法人愛成会常務理事兼アートディレクター/特定非営利活動法人はれたりくもったりアートディレクター]
86	2015年5月22日	『アール・ブリュットを通じてひとり一人の人間に出会うこと』	小林瑞恵 [社会福祉法人愛成会常務理事兼アートディレクター/特定非営利活動法人はれたりくもったりアートディレクター]
87	2015年5月29日	[現地レポート] 『「鳥の目から世界を見る」展』	はたよしこ [NO-MAアートディレクター]
88	2015年6月5日	『アール・ブリュットはどこへ向かう? その魅力と可能性について』	保坂健二郎 [東京国立近代美術館主任研究員]
89	2015年6月12日	『アール・ブリュットはどこへ向かう? その魅力と可能性について』	保坂健二郎 [東京国立近代美術館主任研究員]
90	2015年6月19日	[公開収録] 『鳥の目から世界を見る』展 講演「鳥の目で世界を描く—自身の制作からアール・ブリュットまで』』	山口晃 [画家/現代美術家]
91	2015年6月26日	[公開収録] 『鳥の目から世界を見る』展 講演「鳥の目で世界を描く—自身の制作からアール・ブリュットまで』』	山口晃 [画家/現代美術家]
92	2015年7月3日	『即興演奏が音楽の常識、障害の常識をズラす。音遊びの会のお話から』	沼田里衣 [「音遊びの会」代表]
93	2015年7月10日	『即興演奏が音楽の常識、障害の常識をズラす。音遊びの会のお話から』	沼田里衣 [「音遊びの会」代表]

回数	放送日(毎週金曜日)	放送タイトル	出演
170	2016年12月30日	[現地レポート]『目の見えない人との作品鑑賞プログラム～作品を言葉にして、手で見て、鑑賞しよう』	光島貴之 [美術家/ミュージアム・アクセス・ビュースタッフ]、三浦弘子 [滋賀県立陶芸の森専門学校芸員]
171	2017年1月6日	[現地レポート]『「第13回滋賀県施設合同企画展」彦根学園』	徳山彰 [出展者(彦根学園)]、本郷明日香 [彦根学園生活支援員]
172	2017年1月13日	『新春2016年を振り返る』	アサダワタル/田端一恵
173	2017年1月20日	『見えにくい生きづらさに向き合う ポスト福祉的居場所づくりと表現活動の可能性』	山下耕平 [NPO法人フォロ事務局長/不登校新聞社理事]
174	2017年1月27日	『見えにくい生きづらさに向き合う ポスト福祉的居場所づくりと表現活動の可能性』	山下耕平 [NPO法人フォロ事務局長/不登校新聞社理事]
175	2017年2月3日	[現地レポート]『「第13回滋賀県施設合同企画展」杉山寮』	柿本健 [出展者(杉山寮)]、玉木敦子 [杉山寮生活支援員]
176	2017年2月10日	『支援に携わることと芸術に携わることのつながり』	中村良 [社会福祉法人グロー]
177	2017年2月17日	『表現で他者と交通すること 一釜ヶ崎での表現活動とゲストハウス運営』	上田假奈代 [詩人/NPO法人コルム代表理事]、細馬宏通 [人間行動学者/滋賀県立大学教授]
178	2017年2月24日	『表現で他者と交通すること 一釜ヶ崎での表現活動とゲストハウス運営』	上田假奈代 [詩人/NPO法人コルム代表理事]、細馬宏通 [人間行動学者/滋賀県立大学教授]
179	2017年3月3日	[公開収録]『「大いなる日常」展 オープニングトーク』	田中みゆき [キュレーター]、安藤恵多 [社会福祉法人グロー]
180	2017年3月10日	[公開収録]『「大いなる日常」展 オープニングトーク』	田中みゆき [キュレーター]、安藤恵多 [社会福祉法人グロー]
181	2017年3月17日	『いのちに触れる表現との出会い 一岩手県花巻市るんびにい美術館のころみから』	板垣崇志 [るんびにい美術館アートディレクター]
182	2017年3月24日	『いのちに触れる表現との出会い 一岩手県花巻市るんびにい美術館のころみから』	板垣崇志 [るんびにい美術館アートディレクター]
183	2017年3月31日	『2016年度振り返りトーク』	アサダワタル/田端一恵
184	2017年4月7日	[公開収録]『アール・ブリュット～多様な表現がなく新たな社会～』	青柳正規 [美術史学者/前文化庁長官]、きたやまおさむ [精神科医/作詞家]、野澤和弘 [毎日新聞論説委員]
185	2017年4月14日	[公開収録]『アール・ブリュット～多様な表現がなく新たな社会～』	青柳正規 [美術史学者/前文化庁長官]、きたやまおさむ [精神科医/作詞家]、野澤和弘 [毎日新聞論説委員]
186	2017年4月21日	『富山からアール・ブリュットを伝えること 一ココベリの実践から』	米田昌功 [ココベリ代表/美術家]
187	2017年4月28日	『富山からアール・ブリュットを伝えること 一ココベリの実践から』	米田昌功 [ココベリ代表/美術家]
188	2017年5月5日	『アジアをつなぐアール・ブリュット タイ編 一ArtBrut in Thailand and Japanの取り組みから』	鈴村りえ/山田創 [社会福祉法人グロー]
189	2017年5月12日	『アジアをつなぐアール・ブリュット タイ編 一ArtBrut in Thailand and Japanの取り組みから』	鈴村りえ/山田創 [社会福祉法人グロー]
190	2017年5月19日	『祭礼と表現 写真家 辻村耕司のお仕事から』	辻村耕司 [写真家]
191	2017年5月26日	『祭礼と表現 写真家 辻村耕司のお仕事から』	辻村耕司 [写真家]
192	2017年6月2日	『障害のある人の地域生活支援と造形活動のつながり』	大平眞太郎 [厚生労働省 相談支援専門官]
193	2017年6月9日	『障害のある人の地域生活支援と造形活動のつながり』	大平眞太郎 [厚生労働省 相談支援専門官]
194	2017年6月16日	[現地レポート]『「HELLO 開眼」関連イベント「バスツアー ワズミさんと巡る滋賀不思議スポット 湖北編」』	和澄浩介 [滋賀県立近代美術館学芸員]
195	2017年6月23日	[現地レポート]『「HELLO 開眼」関連イベント「バスツアー ワズミさんと巡る滋賀不思議スポット 湖北編」』	和澄浩介 [滋賀県立近代美術館学芸員]
196	2017年6月30日	『ザッゼンに生きる。障害福祉から地域(世界)を変える、横浜市旭区カプカの挑戦。』	鈴木勲滋 [地域作業所カプカ所長]
197	2017年7月7日	『ザッゼンに生きる。障害福祉から地域(世界)を変える、横浜市旭区カプカの挑戦。』	鈴木勲滋 [地域作業所カプカ所長]
198	2017年7月14日	[現地レポート]『「展覧会「HELLO 開眼」ボランティアスタッフの声を訪ねる』	久保美代子/谷諒次 [ボランティアスタッフ]
199	2017年7月21日	『番組200回記念対談:田島征三×北岡賢剛/アール・ブリュットがつかない二人の出会いとこれまでの25年間を振り返る。』	田島征三 [美術家/絵本作家]、北岡賢剛 [社会福祉法人グロー理事長]
200	2017年7月28日	『番組200回記念対談:田島征三×北岡賢剛/アール・ブリュットがつかない二人の出会いとこれまでの25年間を振り返る。』	田島征三 [美術家/絵本作家]、北岡賢剛 [社会福祉法人グロー理事長]
201	2017年8月4日	[公開収録]『田口ランディ講演「神様はどこにいる」』	田口ランディ [作家]
202	2017年8月11日	[公開収録]『田口ランディ講演「神様はどこにいる」』	田口ランディ [作家]
203	2017年8月18日	『大西暢夫のライフワークから見えて来るアール・ブリュットの魅力』	大西暢夫 [写真家/映画監督]
204	2017年8月25日	『大西暢夫のライフワークから見えて来るアール・ブリュットの魅力』	大西暢夫 [写真家/映画監督]

回数	放送日(毎週金曜日)	放送タイトル	出演
132	2016年4月8日	『福祉と関わりながらアートを届けること。一NO-MA、糸賀一雄音楽祭の現場に携わるスタッフの声』	横井悠/山田創 [社会福祉法人グロー]
133	2016年4月15日	『まちとアール・ブリュットの幸せな関係 一近江八幡をきっかけに』	井口寛 [同志社大学総合政策学部教授]
134	2016年4月22日	『まちとアール・ブリュットの幸せな関係 一近江八幡をきっかけに』	井口寛 [同志社大学総合政策学部教授]
135	2016年4月29日	『滋賀ならではの'美'ってなんですか?アートの視点から考える』	石川亮 [美術家/成安造形大学共通教育センター助教兼地域連携推進センター職員]
136	2016年5月6日	『滋賀ならではの'美'ってなんですか?アートの視点から考える』	石川亮 [美術家/成安造形大学共通教育センター助教兼地域連携推進センター職員]
137	2016年5月13日	『滋賀ならではの'美'ってなんですか?アートの視点から考える』	石川亮 [美術家/成安造形大学共通教育センター助教兼地域連携推進センター職員]
138	2016年5月20日	『続・滋賀ならではの'美'ってなんですか?アートの視点から考える』	伊熊泰子 [新潮社『芸術新潮』編集者]
139	2016年5月27日	『続・滋賀ならではの'美'ってなんですか?アートの視点から考える』	伊熊泰子 [新潮社『芸術新潮』編集者]
140	2016年6月3日	[現地レポート]『美術の授業でアール・ブリュット 滋賀県立膳所高等学校』	山崎仁嗣 [滋賀県立膳所高校教諭] ほか
141	2016年6月10日	[現地レポート]『いのちについて考える 東近江市立山上小学校 命の授業について』	花戸貴司 [永源寺診療所所長]、園司清美 [東近江市立山上小学校養護教諭]
142	2016年6月17日	『“障害”観を編みなおす実践 一見沼田んぼ福祉農園をきっかけに』	猪瀬浩平 [見沼田んぼ福祉農園事務局長/明治学院大学教員]
143	2016年6月24日	『“障害”観を編みなおす実践 一見沼田んぼ福祉農園をきっかけに』	猪瀬浩平 [見沼田んぼ福祉農園事務局長/明治学院大学教員]
144	2016年7月1日	[公開収録]『鮎万里絵展オープニングトーク』	鮎万里絵 [出展者]
145	2016年7月8日	[公開収録]『鮎万里絵展オープニングトーク』	鮎万里絵 [出展者]
146	2016年7月15日	[現地レポート]『吉田季平流 NO-MAの楽しみ方、アール・ブリュットとの出会い方』	吉田季平 [NO-MA 友の会会員]
147	2016年7月22日	『細馬宏通と考える“介護するからだ”に宿る創意』	細馬宏通 [人間行動学者/滋賀県立大学教授]
148	2016年7月29日	『細馬宏通と考える“介護するからだ”に宿る創意』	細馬宏通 [人間行動学者/滋賀県立大学教授]
149	2016年8月5日	『細馬宏通と考える“介護するからだ”に宿る創意』	細馬宏通 [人間行動学者/滋賀県立大学教授]
150	2016年8月12日	『アール・ブリュットを巡る国際交流 一日本と欧州の場合』	齋藤誠一 [社会福祉法人グロー]
151	2016年8月19日	『アール・ブリュットを巡る国際交流 一日本と欧州の場合』	齋藤誠一 [社会福祉法人グロー]
152	2016年8月26日	『アール・ブリュットと宝塚歌劇の共通点』	今井英雄 [男の宝塚 評論家]
153	2016年9月2日	『アール・ブリュットを見つけ出すこと 一国内とタイの作品調査現場から』	安藤恵多/山田創 [社会福祉法人グロー]
154	2016年9月9日	『アール・ブリュットを見つけ出すこと 一国内とタイの作品調査現場から』	安藤恵多/山田創 [社会福祉法人グロー]
155	2016年9月16日	『生きづらさをずらす“迂回路”を探ってみる 一障害福祉現場の事例をきっかけに』	井尻貴子/三宅博子 [NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究(通称:ダイバージョン)]
156	2016年9月23日	『生きづらさをずらす“迂回路”を探ってみる 一障害福祉現場の事例をきっかけに』	井尻貴子/三宅博子 [NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究(通称:ダイバージョン)]
157	2016年9月30日	[現地レポート]『シガラキ・アートコミュニケーション 一信楽の新しいエアイメージを発信』	石野啓太 [ROOF代表]、林晋 [社会福祉法人しらかき会理事長] ほか
158	2016年10月7日	[現地レポート]『シガラキ・アートコミュニケーション 一信楽の新しいエアイメージを発信』	佐々木翔 [滋賀県立陶芸の森]、大杉和夫/酒井清 [信楽青年会] ほか
159	2016年10月14日	『障害者の社会的就労という視点からみる造形活動の可能性』	中川悠 [株式会社さきびもく/NPO法人チュラキューブ代表]
160	2016年10月21日	『障害者の社会的就労という視点からみる造形活動の可能性』	中川悠 [株式会社さきびもく/NPO法人チュラキューブ代表]
161	2016年10月28日	[公開収録]『「楽園の夢」展トークイベント「日常の楽園～モノを創る人々～」』	都築響一 [編集者/写真家]
162	2016年11月4日	[公開収録]『「楽園の夢」展トークイベント「日常の楽園～モノを創る人々～」』	都築響一 [編集者/写真家]
163	2016年11月11日	『美術館だからこそできるアール・ブリュットの展示について考えてみる。』	渡辺亜由美 [滋賀県立近代美術館学芸員]
164	2016年11月18日	『美術館だからこそできるアール・ブリュットの展示について考えてみる。』	渡辺亜由美 [滋賀県立近代美術館学芸員]
165	2016年11月25日	『障害のある人と一緒に舞台上立つということ 一糸賀一雄記念賞音楽祭をきっかけに』	小室等 [ミュージシャン]、坂田明 [サクソフ、クラリネット奏者]
166	2016年12月2日	『障害のある人と一緒に舞台上立つということ 一糸賀一雄記念賞音楽祭をきっかけに』	小室等 [ミュージシャン]、坂田明 [サクソフ、クラリネット奏者]
167	2016年12月9日	『障害のある人と一緒に舞台上立つということ 一糸賀一雄記念賞音楽祭をきっかけに』	小室等 [ミュージシャン]、坂田明 [サクソフ、クラリネット奏者]
168	2016年12月16日	『美術と福祉の“あわい”をキュレーションする。一今泉岳大の場合』	今泉岳大 [高浜市やまきの里から美術館学芸員]
169	2016年12月23日	『美術と福祉の“あわい”をキュレーションする。一今泉岳大の場合』	今泉岳大 [高浜市やまきの里から美術館学芸員]



佐藤朱美

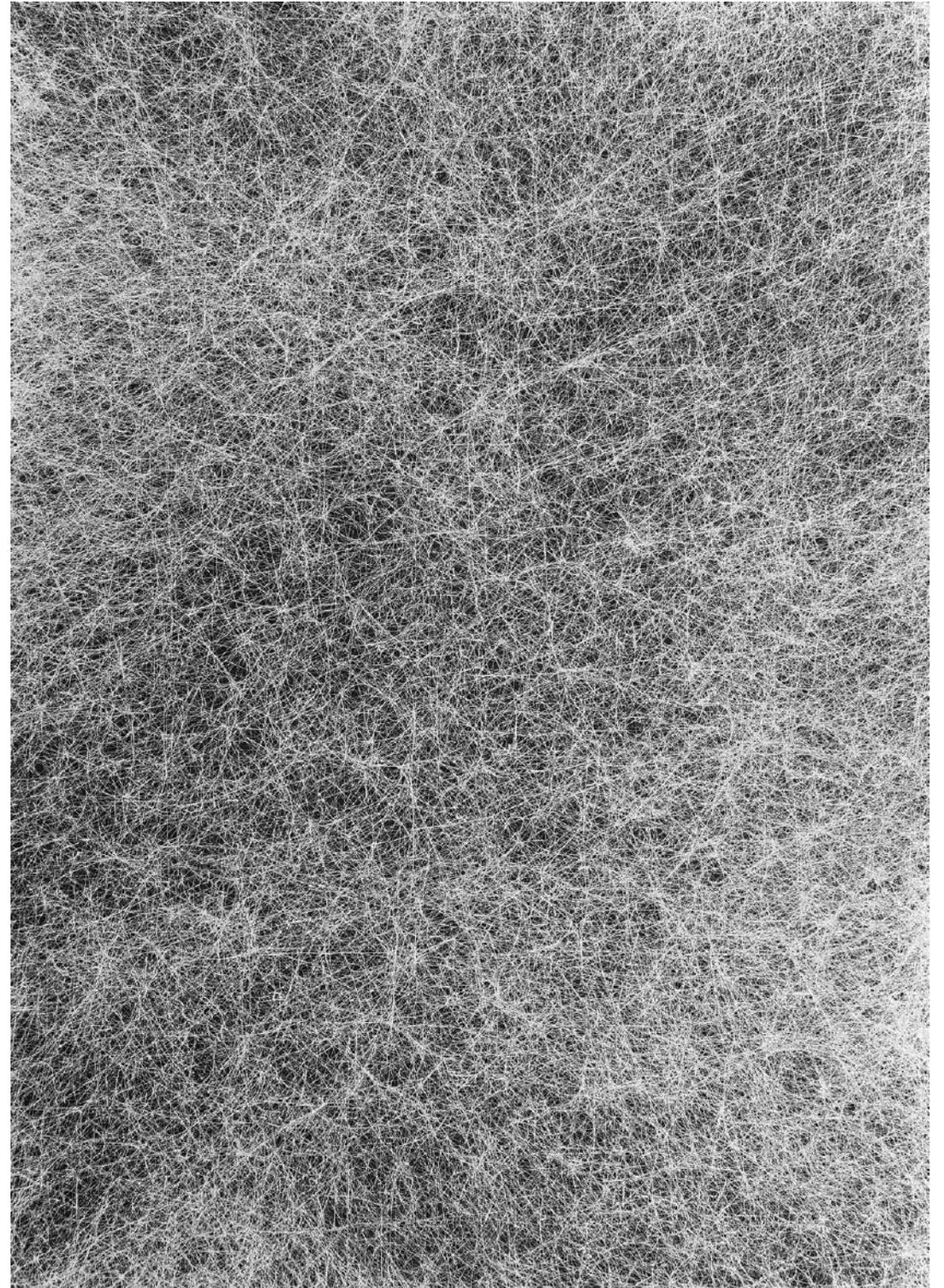
《ゾウガメと一緒に》

2016年

回数	放送日(毎週金曜日)	放送タイトル	出演
205	2017年9月1日	『福祉現場の造形活動 一作業で表現でもありを見守るなかから見えて来た地域福祉への道一』	中島秀夫 [社会福祉法人グロー]
206	2017年9月8日	『福祉現場の造形活動 一作業で表現でもありを見守るなかから見えて来た地域福祉への道一』	中島秀夫 [社会福祉法人グロー]
207	2017年9月15日	『2017 ジャパン×ナント プロジェクト特集第一弾 一アール・ブリュットと国際交流の進行形一』	小林瑞恵 [社会福祉法人愛成会アートディレクター/副理事長]、渡邊芳樹 [元駐スウェーデン特命全権大使/国際医療福祉大学大学院教授]
208	2017年9月22日	『2017 ジャパン×ナント プロジェクト特集第一弾 一アール・ブリュットと国際交流の進行形一』	小林瑞恵 [社会福祉法人愛成会アートディレクター/副理事長]、渡邊芳樹 [元駐スウェーデン特命全権大使/国際医療福祉大学大学院教授]
209	2017年9月29日	『2017 ジャパン×ナント プロジェクト特集第二弾 「湖南ダンスワークショップ」のこれまでとこれから』	北村成美 [ダンサー/振付家]
210	2017年10月6日	『2017 ジャパン×ナント プロジェクト特集第二弾 「湖南ダンスワークショップ」のこれまでとこれから』	北村成美 [ダンサー/振付家]
211	2017年10月13日	[公開収録] 『NO-MA 企画展「惑星ノマ」ライブ&トーク』	吉田隆一 [バトンサックス奏者/SF音楽家]、田所友香理 [大津ワークショップ (打楽器)]
212	2017年10月20日	[公開収録] 『NO-MA 企画展「惑星ノマ」ライブ&トーク』	吉田隆一 [バトンサックス奏者/SF音楽家]、田所友香理 [大津ワークショップ (打楽器)]
213	2017年10月27日	『精神障害を開く独創的なコミュニティづくり 一幻聴妄想かるたを手がかりに一』	新澤克憲 [就労継続支援B型事業所ハローモニー施設長]
214	2017年11月3日	『精神障害を開く独創的なコミュニティづくり 一幻聴妄想かるたを手がかりに一』	新澤克憲 [就労継続支援B型事業所ハローモニー施設長]
215	2017年11月10日	[現地レポート] 『糸賀一雄記念賞第十六回音楽祭 湖のまどろみ』	清水美紀/林美紀/北村成美/中路友恵 [糸賀一雄記念賞第十六回音楽祭ワークショッププロデューサー・ナビゲーター]
216	2017年11月17日	『2017 ジャパン×ナント プロジェクト アール・ブリュットと国際交流を振り返って』	西川賢司/原田綾子 [社会福祉法人グロー]
217	2017年11月24日	『2017 ジャパン×ナント プロジェクト アール・ブリュットと国際交流を振り返って』	西川賢司/原田綾子 [社会福祉法人グロー]
218	2017年12月1日	『映像表現から見えてくる滋賀の美 一伝統文化やアール・ブリュットに携わって一』	長岡野亜 [映像作家]
219	2017年12月8日	『映像表現から見えてくる滋賀の美 一伝統文化やアール・ブリュットに携わって一』	長岡野亜 [映像作家]
220	2017年12月15日	[現地レポート] 『第14回 滋賀県施設・学校合同企画展 オープニングイベント』	高山円 [社会福祉法人グロー]、太田諺輔 [能登川作業所支援員]
221	2017年12月22日	[現地レポート] 『第14回 滋賀県施設・学校合同企画展 オープニングイベント』	上林一生 [出展者 (いきいき)]、外山聖 [いきいき支援員] ほか
222	2017年12月29日	『2017年振り返りトーク』	アサダワタル/鈴村りえ
223	2018年1月5日	『障害のある人の表現活動について感じて来たこと 一信楽学園創立65周年を迎えて一』	山之内洋 [滋賀県立信楽学園園長]
224	2018年1月12日	『障害のある人の表現活動について感じて来たこと 一信楽学園創立65周年を迎えて一』	山之内洋 [滋賀県立信楽学園園長]
225	2018年1月19日	『熱海の障害福祉を開く ～ラジオ、建築など文化をきっかけに～』	荻沢洋子 [熱海ふれあい作業所所長]、秋庭好江 [熱海ふれあい作業所]
226	2018年1月26日	『熱海の障害福祉を開く ～ラジオ、建築など文化をきっかけに～』	荻沢洋子 [熱海ふれあい作業所所長]、秋庭好江 [熱海ふれあい作業所]
227	2018年2月2日	『新たに生まれ変わる美術館～滋賀の多様な美の魅力から～』	木村元彦 [滋賀県新生美術館整備室]
228	2018年2月9日	[現地レポート] 『キュレーター公募企画展「アール・ブリュット 動く壁画」辻智彦インタビュー』	辻智彦 [カメラマン/本展キュレーター]、山田創 [社会福祉法人グロー]
229	2018年2月16日	[公開収録] 『支援者と利用者の間にある「何か」を言葉にする試み 一創作のアナザーサイド一』	細馬宏通 [人間行動学者/滋賀県立大学教授]、堀淳二 [彦根学園生活支援員]、茂木麻貴 [オープンスペースれがーと]、片桐公彦 [厚生労働省障害福祉専門官]
230	2018年2月23日	[公開収録] 『支援者と利用者の間にある「何か」を言葉にする試み 一創作のアナザーサイド一』	細馬宏通 [人間行動学者/滋賀県立大学教授]、堀淳二 [彦根学園生活支援員]、茂木麻貴 [オープンスペースれがーと]、片桐公彦 [厚生労働省障害福祉専門官]
231	2018年3月2日	[公開収録] 『「作品」として社会化するということ、選ばれないということ、選ばれるということ』	青柳正規 [前文化庁長官/山梨県立美術館館長]、小室等 [ミュージシャン]、北村成美 [ダンサー/振付家]、田端一恵 [社会福祉法人グロー]
232	2018年3月9日	[公開収録] 『「作品」として社会化するということ、選ばれないということ、選ばれるということ』	青柳正規 [前文化庁長官/山梨県立美術館館長]、小室等 [ミュージシャン]、北村成美 [ダンサー/振付家]、田端一恵 [社会福祉法人グロー]
233	2018年3月16日	[公開収録] 『「KOMOREBI」展 出展作家トークセッション』	田湯ひろみ [出展者田湯加那子さんご家族]、平野智之 [出展者]、朝比奈益代 [アトリエLaMano]、小林瑞恵 [本展キュレーター/社会福祉法人愛成会副理事長]
234	2018年3月23日	『「障害」、そして「人の持つ普遍的な表現の力」の可能性を伝えること』	東村奈保 [NPO法人soshare代表理事]
235	2018年3月30日	『「障害」、そして「人の持つ普遍的な表現の力」の可能性を伝えること』	東村奈保 [NPO法人soshare代表理事]

1

障害福祉・医療現場から立ち上がる表現活動



岡崎莉望

〈目〉

2014年

精神医療の現場から生まれる アール・ブリュット

末安民生（日本精神科看護協会会長）

日本で紹介されるアール・ブリュット作品は、とりわけ福祉施設の現場から発見されるケースが多いとされてきた。しかし、この放送では精神科病棟での日常生活から生まれる表現に目を向けてみたい。普段問題行動としてのみ扱われがちなごだわりの行動と美意識の狭間には何かがあるのか。末安民生さんに話を伺った。



末安民生（すえやす・たみお）
1954年鹿児島生まれ。日本精神科看護協会 会長。
都立松沢病院に13年間勤務後、衆議院議員政策秘書をつとめる。看護師として地域のメンタルヘルスに関わり、慶應義塾大学准教授を経て、天理医療大学教授。渋谷区で、障害者就労支援活動を行うNPO法人の理事長も担う。これまでの活動の過程で精神障害者の「表現」と出会い、アール・ブリュットに関心を寄せる。2013年に設立されたアール・ブリュットの振興を目的とした全国的なネットワークの副会長に就任し、その普及振興に取り組む。

気づいてたけどそのままにしていたことを再発見する

アサダ まず、日本精神科看護協会について教えてくださいませんか。

末安 精神科に勤める看護師さんの団体です。看護師さんって115万人ぐらいいるんですが、そのうち8万人以上が男性看護師です。僕も現場にいたわけですけど、男性は全体からすると少数派で、その中でも精神科に勤めている人が割合としては多いんですよ。昔は薬もなくて、男の人の力で患者さんを押さえないといけないという発想もあったと思うんです。精神科の施設って全国の病院でいうと1600ぐらいあるんですけども、そこで主に働いている看護師・准看護師の組織なんです。精神科では10万人ぐらい看護師が働いているので、そのうちの半分ぐらいが私どもの構成員ということですよ。

アサダ その組織の会長も務められていますけど、実際、精神科病棟っていうのは、どうなってるのかわかることは世間的にあまり知られてないと思います。その中でアール・ブリュットのような造形作品がどういうふうに見られていくのかを今日はお聞きしたいです。ちなみに末安さんはアール・ブリュットにいつ頃から出会ったんでしょうか。

末安 僕は、昭和53年に病院に勤めたんですけど、勤めた当時は精神科病院に入院すると半ば出てこれないというイメージ、実際はそんなことないんですけど、イメージね。つまり、閉鎖されてる場所っていうような感じだったと思う。今でもそれをずっと引きずってる面もあるんですけど、長い入院の方が多いのは事実でした。僕が勤めたときはおそらく10年以上入院している人が結構いました。

アサダ 相当長いですね。

末安 長いのが当たり前でした。今だと平均で300日切っています。実際には1カ月から3カ月以内に退院する方が多いんです。短かろうが長かろうが入院生活の中で治療を受けるのですけども、急性期の状態がだんだん治まってきたら、自分の時間もありますよね。そういう時間でいろんなことをすると、治療で芸術などの作業療法を試みることも、病院の中のメニューとしてあったわけですよ。メニューとしていろんなものを創作するっていうレベルと、自分の部屋とかで好きでやってるっていうレベルがあるわけ。創作としてやってる部分については、広い意味での医療なんで積極的に行うんですけど、自分の好きでやってる人に対しては「この人、何やってんだろ？」っていう感じだったんで

すよ。そう見る僕らの目は、医療の訓練しか受けていないから、「何やってるんだろう？」という見方になっちゃうわけですよ。

アサダ もう、謎というか、ハテナしかないっていう感じなんですね。

末安 そう。「楽しんでるな」っていうのはあるかもしれないけど、すごく簡単に言っちゃうと、ゴミみたいなにも見えるわけ。現場的にはね。だけど、僕もいろんなことにこだわりを持つので、患者さんであらうと、何か自分で作ったものや描いたものにごだわりがあるのは当然だなと思う。だけどやっぱりゴミのような取り扱いをしてたと思うんです。それは今でも変わらないっていう面もあって、「これは何か変だな、おかしいな」とか思いながら、でもそうやって時間が過ぎてたんです。

そして、「おかしいな」と思っているときに、カメラマンの大西暢夫さんがグロリー理事長の北岡さんを連れて来られました。実は僕は北岡さんを知っていて、北岡さんも僕のこと知ってたんです。厚生労働省の会議の中で何年間か同席したことがあるんですよ。でもお互いに結構席が遠くて、「何言ってるんだろ？」ってお互いに思っていた。そういうときはアール・ブリュットの話は全然なかった。僕が慶

應大学で教員をしていたときに北岡さんが来られまして、作品の写真をいっぱい大西さんと一緒に見せてくれたんです。それで、「ああ、こういうのは確かに病院の中にあるな」っていうことを分かったわけだけど、その写真は主に知的障害の方の作品だったわけです。それに類似しているものを自分は今まで見てきたから、「そういうものが病院にもある」

って言ったから、日本の国では精神科の作品がすごく少なく、欧米は精神障害者の方の作品が極めて多いと。そこが逆転してるっていうことを指摘された。それなら探そうか、あるいは掘り起こそうかとなったんです。臨床に出たから30何年も経ってたところで、初めて再発見するっていうことが始まりですね。

アサダ やっぱり、おそらく作品っていう名付けられないようなものが積み上がっていくことに対して、当然それは医療の観点であったりとか、衛生的な観点もあるかもしれませんが、だから捨てたりしてきたと。しかしその一方で、そのことの違和感みたいなものはどこか末安さんの中では積み重なってる感じがあつたんですね。

末安 すごくためらっちゃうわけ。片付けなきゃいけないのは仕事の一部ですから。でも、患者さんで

こだわる人、あんまりいなかったんですよ。僕の経験では。

アサダ 別に捨てられても、ふうんって感じ？

末安 そう。何でかっていうと、多分また作れるからですよ。だから、作家とは違う意識。でも、作家でも自分の過去の作品を好まない人はいるじゃないですか。

アサダ いますね。あまり興味がないというか、固執しないというか。

末安 そう。でもそうじゃない人もいた。「捨てないでくれ」って言ってた人もいたけど、その人を説得してたわけ。説得してるし、それが要請されてる業務だったからやってたけど、「なんで？ いいじゃん。別に置いといても・・・」って心のどこかでは思っていました。自分は物を捨てられないタイプなんですよね。だから患者さんも「とっていきなれ！」っていう人はとっともいいんじゃないのって。

実際にそうしている人もいたんですが僕の病院にはいなかった、見えなかったただけかもしれないけど、僕の周りにはいなかったですね。

アサダ なるほど。そういうことが、改めて思い返される感じなんですね。

末安 例えば、ある病院で病室の中に小屋を作ってる人がいたわけよ。これはもう管理上すごく困るわけ。

アサダ それはもう作品っていうか、ベッドの上などで描くとかそういうレベルを超えていますね(笑)。

末安 そう。ダンボールで小屋を作って、のぞき窓作って、そこからじっとこつちを見るわけ。

アサダ うわ、すごいですね・・・。

末安 これ普通だったら直ちに撤去ですよ。でも、その看護部長さんは、「いや、あの人はあれで安心してるならいいんだよ」と。「ほっときなさいよ」というふうには。僕はその対応を見たとき、もうすぐくびっくりしちゃって。こんなことを許している人がいる。だから、そのときは作品っていうよりは処遇ですよ。ケアっていう観点で見て、こんなことが許されるんだと。自分の勤めて居た病院じゃ許されなかったからね。だけど、そう接することによってあの人はあそこで保たれている。今思えば、すごく映像的に記憶してるけど、ダンボールで小屋掛けしてるわけですよ。ホームレスの方に近いような。だけど城みたいな感じになってたんですよ。その中からのぞいてる目が、暗がりの中に目が・・・。

アサダ 猫のような感じですね、まさに。

1 1968、岐阜県在住。写真家・映画監督。東京総合写真専門学校卒業後、写真家/映画監督の本橋成一氏に師事。1998年にフリーカメラマンに。ポードレス・アートミュージアムNOMAでの展示をはじめ、日本国内におけるアール・ブリュットの作品とその作者の取材を多数手がける。

末安 そう。でもこれも作品っていう意味合いとは違うかもしれないけど、その人が生きてる証みたいなものでしょう。証拠でしょう。だから、それを保障できないんじゃない医療の本筋から外れるって思えた。だけど、今の世の中はやっぱり薬で良くして早く出していくっていうのが基本ですから。でもそういう人たちの気持ちを本当に理解するんだったら、それが生かされていくような道を探さないといけないんだなって思った。その作品っていうか小屋からは、そういうことを学んだんだけどね。

現物を見せることにつながる発見のネットワーク

アサダ そういうふうはその人が生かされていくような道を……っておっしゃったのは、末安さんのお立場から考えたとき、今回のこの日本精神科看護協会のネットワークの中で、具体的にどのようにしてアール・ブリュットの作品を見つけ出していく手順を踏んだんですか。

末安 やっぱり、見ないと分からない。最初は、広報したりチラシ配ったりして、「そちらの病院にあったら教えてね」っていう感じで。一つとして同じ物はないじゃないですか。紙に絵を描く作品がある

としても、その作品と同じ物はね。どの看護師さんも「まさか自分の所のあの人が……」っていうのがあると思うんですよ。だから、一つは現物を病院に持って行って見せないとダメだと。同じ絵を見せるんでも、写真で縮小じゃなくて、現物っていうのがあると思うんですけど、そういう考え方。例えばもう7、8年前、盛岡で学会があったときに、学会で作品を展示するっていうのをやりました。これはグローの前身の滋賀県社会福祉事業団さんに相談して作品を貸してもらって、学芸員も来てもらった。それで、戸来貴規さんという方の「につき」っていう分厚い紙の束、これはゼヒリスナーの皆さんには見ていただきたいと思うけど、その現物をそこで飾ったんですよ。そしたら、学会に来てその現物を見た看護師さんたちが、「うちにもいる」って言ったわけよ。

アサダ なるほど。そういうふうにしていくのか。

末安 その作品はいわゆる日記をちよつと文字とは思えないもので表現して、それを重ねてるわけじゃない。実際にうちにもこういう人がいるって言った作品は、大学ノートにボールペンで書いてる人だったんです。だから、作風は全然違う。紙の束に密集した時間が刻まれてるというものはあるけど、こ

っちは大学ノート見開きで、人物とか顔とか言葉とか書いてあるんです。全然同じじゃない。でも、「同じ人がある」って現場の看護師は言うんだよね。だから、何かそういう発見を、自分の中の記憶と自動変換するみたいなの、そういうことってできるんですよ。

アサダ そうなんですよね。見た目というか、造形物としては全然違うけども、そのプロセスとか、「何でこんなことやっぺんねやろ……？」ってずっと気になってたことがフラッシュバックするとうか。

末安 そうそう。その経験は僕にとっても嬉しかった。そのときはすぐ行けなかったんだけど、数日後その病院に行つて、高橋重美さんっていう方なんですよ、その方の大学ノートを束で見せてもらって、直ちに借りて当時の滋賀県社会福祉事業団に持ち込み、「こういう人がいるんだけど」って言ったたら、「ああ、これはすごいよ」って言って、美術の専門の人に行つてもらって、見てもらったらしいわけですよ。

アサダ その精査も含め、現場に行つたり現物を見たりとか、あるいは誰かが別の方の現物を見たら、「うちの病院にも！」っていうふうに広がっていい

て、徐々に手を挙げるといふか、「よく考えたらうちにもいたな……」みたいな感じで情報が集まってくるっていうやり方ですよ。

末安 そうです。でも作品としてどこかに持ち出して、とならないこともあるわけです。例えばある病院で、大学ノートに最初は文字を書いてただけですけど、次第にもう文字書く力がなくて、泡とか点ですね。水槽の中から空気の泡が出るじゃない？

ああいう感じの文字を大学ノートに書き連ねている人がいたんですよ。でもその人、それ書き始めたのがもう結構死期が間近で、結局亡くなったんですよ。亡くなった後にノートだけ残ったんです。だからそれは数ページの物なんですけど、それを看護師たちが大事にとつてるわけですね。僕はその病院に行つたときに、「私たちの団体ではそういうの探してましてね」って言うから、「これ見てください」って持ってきたわけ。それはもしかしたら多くの人に見てもらおうっていうレベルの作品じゃないかもしれないけど、でも、看護師さんたちがそれを捨てないでね、もう亡くなっちゃってる人の物をいわば遺品としてとつてなんとか見てもらいたかったんだと思う。そういう気持ちを看護師に起こさせるっていうことも、この活動、ただ作品や人を見つけないで

2 1980、岩手県在住。小学校5年生のときに毎日書いていた連絡帳がきっかけとなり、独自の文字で《につき》を書き始める。日記は両面に書かれ、表面には月日・曜日・天気・気温・名前が、裏面には同じ出来事が毎日繰り返して書かれている。新しい日記を一番上に積み重ね、中央部分に紐を通して一枚一枚丁寧に綴じていくのも特徴。

3 1946、岩手県在住。18歳で統合失調症を発病し、以来今日まで入院生活を送る。大学ノートの表紙で作った仮面をかぶって暮らす。鉛筆、消しゴム、ノック式4色ボールペン（黒・赤・青・緑）を使って毎日ノートに「おもしろい絵」を描いている。

けじゃなくて、人のする行為に対して看護師たちの気持ちはどういうふうに向けさせるって言えばいいの。結果としてはそうなっていくんだってことが分かりますね。

アサダ 具体的な日記であったり、大学ノートであったりとかを世の中に広く伝えていくために展覧会をしていくときのハードルはあったりしますか？

「ご家族だったりとか、病院の中でのしがらみもあつたりすると思うんですが。」

末安 そうですね。これは、ネットワークをつくる必要性を強く感じるところですけど、その作品からある価値を見いだしてもらいますよね。そうすると、まず家族はちょっと驚くじゃないですか。驚くっていうのと、これ以上騒ぎを大きくせんでくれ、静かに暮らしてらんだっていうのと両方あるというのか。

その患者さん自身がそう言うのは、僕はしょうがないと思うんだけど、患者さんは出していいって言ってるのに、なぜ家族がそう言うんだということをおもうんです。だけど患者さんしてみれば、世話になつてる家族がそういうなら仕方がないとか、これも本来はおかしいと思うんだな。本人の意思だと思うから、世話になつたつて、その家族に迷惑掛けるわけじゃない。でも例えば、「名前を出さないでく

れ」とか、「顔は出さないでくれ」とか、そういう方も結構いらっしゃる。でも、おおむね8割ぐらいは「名前も出していいし顔も出していい」と言われる。もちろん外に出すことを拒絶するご本人さんはいなくはない。自分の物だから自分の物のままにしておいてくれ、という方もおられますね。

造形として完成しない、「行為」としての表現

アサダ 末安さんが精神医療の現場の中で、どういうふうにあール・ブリュット、作品であったりとかを発見していくかという、そのプロセスについてお話しいただいたわけですが、今回改めて、ボードレス・アートミュージアムNOMAでも、今行われている展覧会「Timeless 感覚は時を越えて」。実は収録前に見ていただきました。改めて、率直な感想を伺いたいです。

末安 よく言うせりふになっちゃうけど、記憶に残る展覧会だったなと思います。この収録前の午前中に拝見したんですけど、リスナーの皆さんにはぜひ午前中に行つてほしいですね。

というのは、今までNOMAの敷地の中に入ると、建物の右側が入口で、左側にはガラス窓がある

んですけど、そこが普通は閉じられて壁が作られて、その裏側に作品がついていう展示の仕方になつてるんです。今回はそこに壁がなくて、中が見えるんですね。向こう側が見通せる。でも、何があるかよく分かんない。つまり、今までだったら絵画が掛かつてたりとか、陶器が見えたりとか、ある程度入る前にイメージがついたんですけど、今回は入る前にイメージがつかなかった。何が始まっているのか。

チラシは見てたし、すでに拝見したことのある作品もあるんだけど、どういうふうに表示されているのかが分かんなくて。入つていたら、鏡が上から吊るされていて、空気の流れでそれが回つてる。**アサダ** そうですね。何枚か鏡が天井から吊るされてくるくる回っている。そこに照明があたっているっていう演出もありますね。

末安 柱時計がいくつかあつて、後で知つたんですけど、その柱時計とか鏡とかは、近江八幡の町からお借りしてきたっていうのを聞いた。朝行つたっていう条件も加味されなきゃいけないかもしれないけど、今まで何十回も行ったことがあるのに、今までと全く違う空間のような感じがして。でも、この雰囲気は過去にどこかで味わつたことがあるような、という複雑な思いに捕らわれる。僕ね、1階の一番

奥に椅子が入口側に向いて置いてあるところにしばらく座つてたんですけど、そしたらまた全然違う場所のように思えてきて。そこで、三橋精樹さん⁴っていう方の鉛筆画かな、それを見るお客さんの姿を見ていたんですけども。

アサダ 作品ではなく、それを見る人の姿を見ている、と？

末安 そう。その所作っていうのかな。今ままでた作品は壁掛けか、造形物の上に置いてあるっていう見方ですけど、手袋をして手に取つてそれを学芸員が渡してくれて見る、みたいな段取りがある。今までこういう鑑賞の仕方ってあつたんですかね。触れるっていうのは今まであつたと思うんだけど。

アサダ 今までなかったと思いますね。ああいうふうな展示って、美術館としては珍しい。作品はものすごい数、それこそ100枚以上の三橋精樹さんの鉛筆画があるわけなんですけども。それを桐箱に入れて一枚一枚白い手袋をして見る。手に取れて、自由に動かせる。しかも裏に絵じゃなくて日記のような、「この絵はこういう時の情景を描いたものだ」って書かれている。そういうところまで一枚一枚丁寧に書いていく体験は、なかなかできるものではないかなと思います。

4 1943 滋賀県在住。漆黒に塗りこめられた鉛筆画の闇の中には、よく見ると驚くような記憶の情景が描きこまれている。日常の風景、テレビ映像の記憶など様々な線画があぶりだされて見えてくる。

「Timeless」の一つ興味深いところが、いわゆる

アール・ブリュットについていわれるような作品が、展示される状況によって、それは例えば学芸員などの展示する側の意図であったりとか、いろんなことの中で編集されるというか、見え方が全く違ってくる。ことかと。作品と新たな出会い直してみたいな。そこがこの展覧会で果敢に挑戦をしているところかと思えます。

今回、椎原保さんという現代アーティストの方が1階のまさに、先ほど末安さんがおっしゃった鏡であつたりとか、椅子であつたりとかつていう空間全体を演出されて、その空間の中で三橋精樹さんの鉛筆画の作品、そして武友義樹さんですね。

末安 あの紐の……。

アサダ そうですね。紐をずっとぐるぐる回して、踊っているというか、なんというか。ただずっとひたすらそれをやり続けているのを撮影した映像作品が流れていて、映像作品の横には紐そのものを置いてるわけです。ああいう造形物でもなければ、パフォーマンスって言ってしまってもいいのかわからないんですが、ああいう行為そのものみたいな、「何やってるんだろう？」この人。癖なんかな？ こだわりのなんかな？」みたいな、そういうものも今回展示

発したということじゃないですけど、それだけでは駄目じゃないかと思っている。その行為には何か意味があるんだろうと。

それとか、ある場所を行ったり来たりすることとか、あるものを繰り返し作る。それは本人が作っているというつもりじゃないかもしれないけど、ということがありますよね。それ一つ一つ見ていくと、精神病院の中において行われると、病的な感じって見るわけだけど。つい最近聞いた話では、1人の人が8人の患者さんが寝てる間に、まあ寒いとこだったのかもしれない、8人分の靴下を全部脱がせて、で、自分がその8人分の靴下を履いて、ドラえものの足のように存在してたというのがあつてね。

アサダ ものすごいことですね、それは。

末安 これ笑っちゃうけど、本人は必死だと思ってるんですよ。必死というのがある意味を持ってね。それが盗癖があるとかつて言っちゃうと、そこで終わってしまふ。盗んで隠したなら盗癖と言ってもいいかもしれないけど、そうじゃなくて、履いてるわけだから。

アサダ もこもこになるまで履き続けて。結構さすがに……。

末安 大体8足履けるのか、みたいな。

されています。

例えば、末安さんが病院の中でいろいろと見て来られた中で、けして完成されて造形物になってるわけじゃないようなパターン、「永遠にこれやり続けているなこの人……」みたいな状況って結構あるものなんですか。

末安 あるね。あるタイプとしては強迫神経症のことを繰り返す、とか。皆さんがよく分かる例で話すと、水道出しっぱなしにして手の皮むけるまで手を洗い続けるとかがあるわけです。それは強迫行為、本人は苦しがつてやっているとんだから、そういうことがなくなったほうがいいってことで治療の対象になるわけ。確かにそう言えばそうなんだけどね。でも、水の流れているのは一定じゃないでしょう。

簡単に言えばねじれて流れているわけじゃないですか。そういうふうには一瞬見えないけど。それを手に受けながら、その行為自体は清潔でいたいっていうことに駆り立てられてやっていると、でも、それ、別に水じゃなくなつていいはずなのに水になるっていうことには、僕は単に、その人が強迫的な精神状態にあるからそういうことしてるっていうだけのアプローチにしても駄目なんじゃないかと思ってるんですよ。だからといって、新たな治療法を開

アサダ 4枚目あたりからだいぶ苦しくなりますよね。普通に考えたら。

自分が納得する時間

末安 そうそう。武友さんの話に戻ると、僕あの映像全部見たわけじゃないですけど、武友さんがなかなか満足できなくて繰り返ししたり、途中で寝てるのか。あれ、疲れたんじゃないかって、納得できるものがないから、しばし休憩っていうか。

アサダ 本人の中で終わりがあるんでしょうかね。ずっと寝不足になられるまでやられてるっていう記述も図録の中には書かれていますね。そういう日もある、ことが書かれていました。武友さんの中での行為が、「今日はいけた」とか、何かが完成したって見る側から見たら全く分からない価値観、世界があるのかな、と思つて見てしまいますね。勝手にこちが想像して。

末安 でもさっきの「物が残る」という人たち、紙に書くとか物を作るとかつていう人たちも、精神科に関して言いますとあんまり固執する人は少ないような印象を持っています。どちらかというところ作ってるプロセスが大事だつて本人が言ってるんじゃない

5 1952年京都府在住。美術家。1977年に京都市立大学美術学部西洋画科卒業。自身の作品を「日常感覚で感じられることを編集する作業」とし、空間全体を作品化した、その場でしか感じることのできない独自のインスタレーションを展開する。

6 1963年滋賀県在住。迫力の陶器の作品を作ること知られ、大きいものになると2mにも達する作品も制作。また、幼少の頃から紐が付いた棒を振り続け、10m以上の紐を巧みに操り、波のような動きをつけ、窓の棧に配置するなどして日々戯れている。

いけど、多分そこが一番満足するところで。

アサダ あくまで推測されるという感じですね。

末安 だから納得するまで繰り返すみたいなの、作り方なのかな。それがその時々に関心でちよつとずつ変わるとか。そういうことなのかなと思うんですけど。武友さんの粘土の花瓶と呼んでいいかどうか分からないけど、大きな作品がお庭にありましたけど、これもぜひリスナーの皆さんに見てほしいです。時には指で押してるのかな、あの模様……。

アサダ かなり複雑な模様ですね。

末安 はい。あれも自分が納得するような形。季節によって変わるっていうことをさっきお聞きしたんですけど。だから紐も同じで、時間によって自分の力の振り出し方っていうよりは、もしかしたらある形とか角度とかよりは、「自分が納得する時間」みたいなものがあるのかな。今回の展覧会の副題も、『感覚は時を越えて』ってなってますが、越えられない時っていうか、時を見つけるっていうか。自分の満足できる時の感覚みたいな。

アサダ なるほど。面白いですね、それは。

末安 僕たちが普段評価的なものを見方をするところとは違う基準が、ご本人たちの中にあるのじゃないかなと。

アサダ そうかもしれないですね。

末安 共感できるところもあるし、それはすごくパーソナルなものだから、共有するのは難しいってことでもあるのかな。

アサダ 目の前で見えている、例えば絵画作品であったりとか、今回は映像だったので、武友さんが確かにひもを動かしているところはわれわれも見えるわけです。その見えている状況 というよりは本人の経験、その時間の質的なものの中で何か「たまった」というか、「今ここだ！」と満足できることは絶対に他人とは共有できないというか。名付けようのない共有感覚ですよ。アール・ブリュットに向き合うための新たな視点を見つけれたと、改めて思いました。末安さん、ありがとうございます。

末安 こちらこそありがとうございました。これからも作品に直接触れられるような機会を、僕らも作っていいこうと思います。

アサダポイント

末安さんの話は、生活と表現のボーダー、支援（あるいは治療）と創作のボーダー、そしてこだわりの行為と表現のボーダーといった様々な「間」をどう捉えるかという視点が満載だった。また現物の作品に立ち会った看護師たちが各々の現場で想起する「そう言えばあの人の……」という感覚と行動をどうネットワークするか、アール・ブリュットを発見し伝えていく具体的なヒントも得たと思う。

富山からアール・ブリュットを伝えること

ココペリの実践から

米田昌功 (アートNPO工房「ココペリ」代表、美術家)



米田昌功 (よねだ・まさのり)
1965年生まれ、富山県富山市出身。「立山曼茶羅」の継承をはじめとする日本画表現に留まらず、インスタレーション等の現代的表現、伝奇漫画の出版、アートビエンナーレの企画運営など活動は多岐にわたる。また、障害者の表現、アール・ブリュットを美術の原点と捉え、2006年より県内作家の制作活動の支援、展覧会などの企画運営に本格的に取り組んでいる。アートNPO工房ココペリ代表、人人展会員、日本美術家連盟会員、元・富山県立高岡支援学校教諭。

米田さんは、富山県高岡市にて、障害のある人々の造形活動を支え、発信してゆくアートNPO工房「ココペリ (COCOPELLI)」の代表を務めている。自身も日本画家として活動し、また本収録の前年まで富山県立高岡支援学校教諭として障害のある子どもたちの表現に関わり続けてきた。富山の地から積極的、地道にアール・ブリュットの魅力を発信されてきた米田さんに、美術家、また美術教員としての長年の活動なども絡めながら、「富山の地からアール・ブリュットを伝えること」をテーマに語っていただいた。

富山に必要な拠点をつくる

米田さんが立ち上げた「ココペリ (COCOPELLI)」は、富山県高岡市にある吉沢運輸工場跡地をアトリエ・作品の保存庫として活用し、様々な活動をしてきた。月に2回ほどの造形活動に関心を持つ知的障害のある人々が制作、そして県内の公募展に参加したり、自宅にある作品の保存を担ったり。主に特別支援学校を卒業したのちに、活動の継続が難しくなる人たちが対象に、米田さんの前職場である高岡支援学校の教員や作家たちがスタッフとなり運営されている。「障害のある人たちが何かしら相談できる場所が富山にも必要」と考えた米田さんたちの思いは県内に広がり、家族や施設職員など様々な人たちが来訪。とりわけ、家や施設においてはいはすぐに劣化し散逸してしまう作品の保存を担う重要性や、具体的な拠点を

持つことで障害のある人の造形活動を社会に可視化することの意義を、米田さんは語っていた。また企画展も積極的に展開し、2015年からは定期的に、高岡市美術館で「アール・ブリュット©TAKAKO展」も実施。射水市の射水神社では元旦0時から始まる展覧会「七つの彩の祝い(この括弧の中には干支の名前が毎年入る)」も行うなど、富山にアール・ブリュットを積極的に広める活動は、近年飛躍し続けている。

関心のすべてがアール・ブリュットにつながってゆく

日本画家である米田さんは大学を卒業後、表現者になろうとアルバイトをしてお金を貯めれば東京に出かけ、様々な展覧会に足を運び、自身の表現を探求していたと言う。そこで出会ったのは、水野朝という、1945年生まれの愛知県出身の日本画家だ。小児マヒを患い身体にハンデを持っている水野氏の描く作品に惚れた米田さんは、技巧や美術史の流れから解放されるような感覚を強め、アウトサイダーアートやアール・ブリュットと呼ばれる世界にも強い興味を持つ。そんな中偶然にも特別支援学校での教員職の誘いをうけ、挑戦してみることに。「やってみると面白くて。自分の美術表現と、人に教えることが矛盾せずにつながった」と語る米田さん。自身の活動、支援学校の教員業、そしてその先に立ち上げるココペリ、すべてが1本の糸に導かれるようになっていったようだ。

また一方で、米田さんは「立山縁起絵巻」という、立山町に伝わる曼茶羅の継承活動も行なっている。これは一見、米田さんの一連の活動とは異なるように見えるが、多次元多層的な作風で知られ、一つのモチーフを主題として大きく描こうとする西洋的な作品(あるいは世界認識)とは違った立山曼茶羅の魅力は、アール・ブリュットと通底すると感じているようだ。

多様な発信を絶やさない

ココペリの活動を躍進させる上で、「美の祭典 越中アートフェスタ」の存在があげられる。画材もジャンルも、年齢も問わず、かつ過去に賞をとったものでも出品可能というかなり間口の広い公募展だ。これまでどこにも出せなかったクレヨンや貼り絵など身近な素材の作品も出品できるし、かつ学芸員を含む様々な分野から審査員が集まったことによって、「せめた作品」が選ばれる傾向も。アール・ブリュットの表現が入賞することが増え、ココペリの認知も進んだ。福祉関係者だけでなく、美術関係者からも注目されるようになった富山県内の障害のある人たちの表現は、その後、様々なアートイベントや展覧会での発表機会が増えることとなる。

県内だけでなく、県外との交流も進めているココペリ。なぜならココペリで活動する作家は平面の表現が多く、多様な形態のアール・ブリュットを知り、その魅力を交換し合うためには、他県の作家との出会いが欠かせないと考えたらしい。そこで、米田さんは「トランク・プロジェクト」というトランク一つに作品を詰め込み、その箱がパートナーの団体間で移動しあいながら、各地での展覧会でお目見えするという仕組みを編み出した。このように、様々なアイデアとネットワークを織り交ぜながら、この富山の地からアール・ブリュットを発信し続けている。

ザッゼンに生きる。障害福祉から地域(世界)を変える、 横浜市旭区カプカプの挑戦。

鈴木励滋 (地域作業所カプカプ所長)



鈴木励滋 (すずき・れいじ)
1973年生まれ、群馬県出身。1997年から地域作業所「カプカプ」の所長を務める。『生きるための試行エイブル・アートの実験』(フィルムアート社、2010年)や『季刊ピープルズ・プラン』(ピープルズ・プラン研究所)に寄稿するほか、演劇に関する批評や記事を芸術評論誌『ユリイカ』(青土社)や『月刊ローンチケット』、劇団ハイバイのツアーパンフレットなどに執筆。政治社会学の栗原彬氏との対談『ソーシャルアート 障害のある人とアートで社会を変える』(学芸出版社、2016年)では、カプカプでの活動を紹介している。

横浜市旭区西ひかりが丘団地にある地域作業所カプカプ。商店街の一角で、喫茶店を営んでいるが、ここには地域のお年寄りや子どもたち、またここで働く障害のある人々が交じり合いながら、とてもものびのびと、ゆったりと、各々の時間を過ごしている。カプカプでは、日頃から絵本作家によるワークショップや、ダンスや音楽など、様々な表現者たちともコラボレーションしながら、とてもユニークな場づくりを行ってきた。放送ではこの現場から所長の鈴木さんをゲストに、障害福祉に表現活動が絡み合う可能性、そして、鈴木さんのもう一つの顔、演劇批評家としての視点も絡め、トークをお届けした。

市民が立ち上げた地域作業所

もともと水俣病や不登校など様々な社会問題を取り上げる出版社が大元。そこが自然食やフェアトレードに関心を持ち、珈琲の焙煎も始めた。その拠点に障害のある人たちもスタッフとして関わるようになり、養護学校の教員や施設の職員とのネットワークが紡がれる中で、1997年に地域作業所カプカプを、98年に喫茶カプカプを開設。当時大学を出てアルバイトをしながら演劇ライターをするつもりだった鈴木さん。大学で参加していた政治社会学のゼミの先生の縁からカプカプの立ち上げ話を聞き、遊びに行ったらそのままスタッフに。そうして……早20年が過ぎたことだ。

舞台となる西ひかりが丘団地は1970年〜80年代は憧れの対象だった団地。しかし時代が変わり、各地の郊外がオールドタウン化する波はここにも押し寄せ、90年代には商店街部分も空きテナントが。そこで高齢者を中心とした地域の困りごとを積極的に聞く姿勢を大切にすることで、「障害福祉」という分野に閉じず、当たり前のように様々な背景を持つ人たちが「地域の一員」として固有名で呼び合う関係性を、地道に作り上げてきたのだ。

働くってなに？

カプカプは、メンバーの作業メニューがかなり多様で流動的だ。おおまかに言えば喫茶店に出すお菓子づくり、ホール、店頭のバザー品の整理などがあるが、それに付随してお菓子づくりの現場で音楽を演奏して流したり、バザーの横でお客さんの値切り交渉に応じながら楽器を演奏する人がいたり。要は「その人がなんとか居られる状況を、仕事として捉える」という考えがベースにある。

「何を以って働いているとするのか」という問いには実は正解がないと、鈴木さんは言う。私たちの多くは学校教育を受け、親の働く姿をみる中で「働くとはこういうものである」という固定観念を抱いてしまう。「就労支援」という名のもとで、そのスタンダードな働き方(喫茶店なら接客マニュアルを作って訓練するなど)に乗っかるのは実は難しくない。しかし、そもそもそういう社会のノリに合わないからこそカプカプに辿り着いた人たちに対してそのやり方はどうなのか、という問題意識が根底にあるのだ。

アートも含め、すべてが「人と関わるための手立て」

カプカプでは月一回、表現ワークショップを実施している。ダンサー・体奏家の新井英夫さんと絵本作家のミロコマチコさんが月替わりで講師を担当。「ダンス」とも「美術」とも言い切れない、表現を介しているんなコミュニケーションのあり方を体感する、自由なワークショップだ。最近その中に、アサダの音楽(ラジオ)ワークショップも交わり、カプカプに通い始めているところだ。これらは授産商品を生み出すのが目的ではないため、福祉施設では一見なんのためにやっているのかわかりにくいかもしれない(もちろんレクリエーションという位置付けはあるが)。しかし、鈴木さんは「表現の経験を通じて、他人と関わる力がつき、コミュニケーションの引き出しがどんどん多くなる。そうなってくると、現場で面白いことが起こりやすくなるんです」と語る。表現も地域の様々な人と関わる手立てにする。これは「広い意味の働く力」となるのではないか。

そもそも鈴木さん自身が、舞台表現の批評家として感じてきたのは、自分が想定していないもの、理解できないものに時折心を揺さぶられるという体験の不思議さだ。その「わけわかんなさ」は、自分の可能性を広げてくれると言う。障害のある人と日々付き合う中で、わけのわかんないことは度々起こるが、つまるところ自分の価値観が乏しいので「わかんない」となるわけであり、多くの人がそういった多様な豊かさを持つために、演劇などの舞台表現にできることがあるのではないか。アサダも表現を介して関わりを深めている現場でもあり、ぜひ一度カプカプに遊びに行き、この現場の「雑然さ」を体感してほしいと願う。

福祉とアートの狭間で展覧会をつくるという仕事

―ボーダレスアートミュージアムNOMMAの現場から―

薬戸さゆみ（社会福祉法人グロー法人本部企画事業部学芸員）
横井悠（社会福祉法人グロー法人本部企画事業部学芸員）



薬戸さゆみ（わらと・さゆみ）
長崎県出身。社会福祉法人グロー法人本部企画事業部学芸員。絵本の美術館で学芸員として9年間の勤務を経て2013年より現職。作品調査や、「カソケキ+チカラ」展、「アール・ブリュット☆アート☆日本」展などを担当。

横井悠（よこい・ゆう）
三重県出身。社会福祉法人グロー法人本部企画事業部学芸員。作家としても活動しながら2010年より現職。「対話の庭 Dialogue of Garden まぎなしがこだまする」展、「Timeless 感覚は時を越えて」展などを担当。

ボーダレス・アートミュージアムNOMMAの学芸員の二人は、社会福祉法人グロー法人本部企画事業部文化芸術推進課に勤務しながら、NOMMAで開催される展覧会の企画運営に携わっている。健常と障害、日常と非日常というボーダーを問い直し、様々な企画展を創りあげてきた二人ならではの関心や苦労、またアール・ブリュットならではの具体的な展示の工夫など、様々な話題を展開した。

NOMMAの学芸員になった経緯と現在の仕事

以前は静岡県絵本美術館の学芸員として9年間働いていた薬戸さん。長崎出身の薬戸さんのアール・ブリュットにつながる原体験は、原体験者によって描かれた絵画だったと言う。プロではない作り手が、自らの体験と衝動のままに描く絵画に惹かれて、そこから絵本の世界（かつては絵本では画家の存在の地位が低かった）につながり、そして、尊敬する絵本作家田島征三さんからNOMMAの存在を知り、就職へと至った。

一方の横井さんは、美術系大学で作品制作に打ち込む日々。お世話になった先生から現職を紹介され、関心を持つように。以前から、巷では観られないユニークなアーティストを紹介するギャラリーとしてNOMMAに何度か足を運んでいた横井さんだが、自ら運営に関わるようになった。

お二人の主な仕事は、展覧会を作ること。しかしそこには様々な工程があり、例えば、作り手に会いに行くなどの調査、あるいは作品の保存や貸

し出し、作品の魅力を展覧会を通して多くの方に発信してゆくための広報など。また最近では、近江八幡市内の小学校への出張鑑賞授業や、地域へのアウトリーチも積極的に行なうなど、これらをすべて予算内に収めながら、開催日までに組み上げるという難題に毎回立ち向かっている。

作品の前にある「感覚」をこそ伝えるために

横井さんが放送時の昨年に取り組んだ企画展に「Timeless 感覚は時を越えて」（2014年5月2日〜7月27日）がある。「アールブリュットに初めて出会ったときの、自分の経験や価値観が解き放たれて行く不思議な感覚」を展覧会として現そうとしたと言う、この企画展では、「作品」（というカタチになるもの）の手前にある、その作品にかけた圧倒的な「時間」の蓄積や痕跡といったものに着目している。

例えば、NOMMAの2階に展示された、栃木県在住の西沢彰が描く大量の飛行機のスケッチ群。西沢氏は地上から飛び立つ飛行機を様々な角度から描いているが、その作品のサイズはハガキサイズからA4サイズから様々あり、その何千点に及ぶイラストの手前には彼が幼稚園の頃から描き続けてきている行為が当然ながらある。もちろん「飛行機が好きなんだな」というのがあるにせよ、その「どこまでも描き続けるという行為そのもの」がそれを観るものに誘ってくれる感覚」とはどういったものか？ そここそを表現するためには、壁面ではなく天井に展示し、かつ、それを（NOMMAの和室という空間も生かして）寝転びながら観るといふこちら側の態度があることによってその感覚を助長できるのではないか。

アール・ブリュットとして紹介される作り手には、自らが作家として意識的に作品を外に発表しようとする人は多くはない。だからこそ受け取った作品を「そのまま」観せるだけではなく、その作品が生まれるときに作

り手が積み重ねてきた感覚をもっともリアルに伝えるための鑑賞体験をいかに演出するかというのが、NOMMAの学芸員にとっての大切な仕事なのだ。さらに現代アーティストとボーダレスに展示する際のバランスもその都度意識しながら、NOMMAの根底にある「人の持つ普遍的な表現の力」に迫る展示を常に心がけているのだ。

「福祉」に関わることで「表現」の深みを知る

横井さんは「ホームかなざわ」という発達障害のある方々が暮らすケアホームでの支援にもあたっている。宿直として入り、入居者の日々の相談に乗る中で、「普段多くの人が気にしないような些細なことでも、彼らにとってはとても大きな出来事だったりする。そのことを知るたびに、他者に対する理解につながった」と語る。このことはさらには、人が何かを作り続けるということも、「生きるために必要なことであり、その人を形成するための表現である」という認識へとつながった。

また、薬戸さんは、「福祉」を「地域づくり」にまで広げて捉えた時に、NOMMAで行なっている街中企画展「アール・ブリュット☆アート☆日本」シリーズにおいても大きな感触を得ていると、話す。NOMMA界限の複数の町屋で行うこの展覧会の第2回（2015年2月21日〜3月22日）では、多くの近隣住民を含めた有償ボランティアの方が83名も参加。それぞれが作品解説や受付などを務める中で、アール・ブリュットに触れ、かつ観客に町屋の解説まで進めてくれる姿に、学芸員も含めて時に「館」を飛び出し、地域に関わってゆく可能性を感じた。一人の作家にぐっと歩み寄り姿勢も、アール・ブリュットを外に開いていく姿勢も共存しながらNOMMAの未来を担ってゆく、二人の学芸員の頼もしい声を届けることができた。

㊦ 第35回放送（2014年5月30日）

アール・ブリュットが生まれる瞬間に立ち会う 福祉職員の立場から

田端一恵（社会福祉法人グロー（GLOW） 法人本部企画事業部長）

福祉施設現場で日々営まれる行為を、創作行為として再発見する。岩手県の施設で暮らす作家戸來貴規さんの日常に寄り添ってきた当時の施設職員田端さんは、現在N.O.M.Aを運営する社会福祉法人グロの職員として様々なアール・ブリュットの企画を担当し、このラジオ番組でも現地リポーターを務めていた。田端さんとともに、福祉施設の職員だからこそ立ち会えるアール・ブリュットが生まれる現場をお聞きした。



㊦ 第68回放送（2015年1月16日）

ひとりの医者として アール・ブリュットを支えること

笠原吉孝（医師、NPO法人はれたりくもったり理事長）

笠原さんは滋賀県守山市でかさはら医院を開業し、また滋賀県医師会の会長も務めてきた。そして、これまでアール・ブリュット作品の価値を社会に広く定着させるための展覧会や、障害がある人たちの地域生活には欠かせない相談支援の全国普及に関する事業などに取り組む、NPO法人はれたりくもったりの理事長としても活躍。そんな笠原さんの、アール・ブリュットに出会ったきっかけや、普及に務める思いについてお聞きした。



㊦ 第85・86回放送（2015年5月15日、22日）

アール・ブリュットを通じて ひとり一人の人間に出会うこと

小林瑞恵（社会福祉法人愛成会常務理事兼アートディレクター、特定非営利活動法人はれたりくもったりアートディレクター）

小林さんはこれまで、障害のあるなしに関わらず、美術教育を受けずにあるがままの表現を追求する「アール・ブリュット」の作品紹介に、数多く関わっている。社会福祉法人に所属する「アートディレクター」という肩書きは、一見、「福祉の世界でどんなことをやっているの？」って不思議に思われるはず。海外との連携も深めてきた小林さんならではの経験値から、アール・ブリュットに関する広く深い思いをお聞きした。



㊦ 第120・121回放送（2016年1月15日、22日）

福井という土地から 障害福祉×アートを根づかせてゆくこと

荒川裕子、濱見彰映（NPO法人福井芸術・文化フォーラム事務局）

福井芸術・文化フォーラムは、福井市文化会館を活動拠点に様々なイベントや市民参加型のアートプロジェクトを企画・運営しているNPO法人。その事務局スタッフとして働くお二人は、障害のある人の表現活動の可能性を紹介し、語り合う場を企画するなど、アートと福祉の関係性についても様々な活動を展開中。今回はそんなお二人の活動について、福井という土地の持つ可能性も踏まえながらお聞きした。



① 第131・132回放送（2016年4月1日、8日）

福祉と関わりながらアートを届けること。 —NOMA、糸賀二雄音楽祭の現場に携わるスタッフの声—

横井悠（社会福祉法人グロー（GLOW）法人本部企画事業部学芸員）
山田創（社会福祉法人グロー（GLOW）法人本部企画事業部自立生活支援員）

社会福祉法人グロー法人本部企画事業部文化芸術推進課に勤務しながら、NOMAで開催される展覧会や音楽祭など、様々なイベントの企画運営に携わっているお二人。大学時代は美術畑、美学畑と、福祉とは異なる背景を持つ彼らは、どのように健常と障害というボーダーを問い直し、様々な企画を創りあげてきたのか。お二人ならではの関心や苦労、この仕事に携わる醍醐味など、現場ならではのエピソードをお聞きした。



① 第176回放送（2017年2月10日）

支援に携わることと 芸術に携わることをつながり

中村良（社会福祉法人グロー（GLOW）法人本部企画事業部副部長）

長年、障害福祉にまつわる様々な事業に携わってきた中村さん。彼の中で障害福祉サービスやそのサービスが運営される仕組みをつくることと、一方でオール・ブリュットといった福祉現場から生まれる表現活動をマネジメントすることがどのようにつながっているのか。あるいは「支援」というものの先に、障害のある方の表現活動を支えることがどのような意味を持っているのかをお聞きした。



① 第181・182回放送（2017年3月17日、24日）

いのちに触れる表現との出会い —岩手県花巻市るんびにい美術館のころみから—

板垣崇志（社会福祉法人光林会るんびにい美術館アートディレクター）

毎年2月に大津にて開催されている障害福祉の一大イベント「アミニティフォーラム」の会場よりお届け。板垣さんはご自身も画家、詩人として作品を制作される中、障害のある方々の造形活動に関われ、岩手県花巻市にある社会福祉法人光林会が運営する「るんびにい美術館」のアートディレクターを務めている。「命に触れる表現」をテーマに活動を続ける板垣さんにとって、常に大切にしていることを語っていただいた。



① 第192・193回放送（2017年6月2日、9日）

障害のある人の地域生活支援と 造形活動のつながり

大平真太郎（厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課地域生活支援推進室相談支援専門官）

障害のあるそのひとり一人の暮らしに必要なサービスを計画することとはもちろんのこと、その人に一層寄り添ったより良い支援をする為に大切なのが「相談支援」。大平さんは長年、この相談支援体制を充実させ、相談支援専門員のスキルアップのための研修などを全国各地で行ってきた。彼が今まで見つけてきた、障害のある人の地域生活支援のための相談支援と、障害のある方の造形活動の支援がどのようなつながりがあるのかをお聞きした。



精神障害を開く独創的なコミュニティづくり
— 幻聴妄想かるたを手がかりに —

新澤克憲（就労継続支援B型事業所「ハーモニー」施設長）

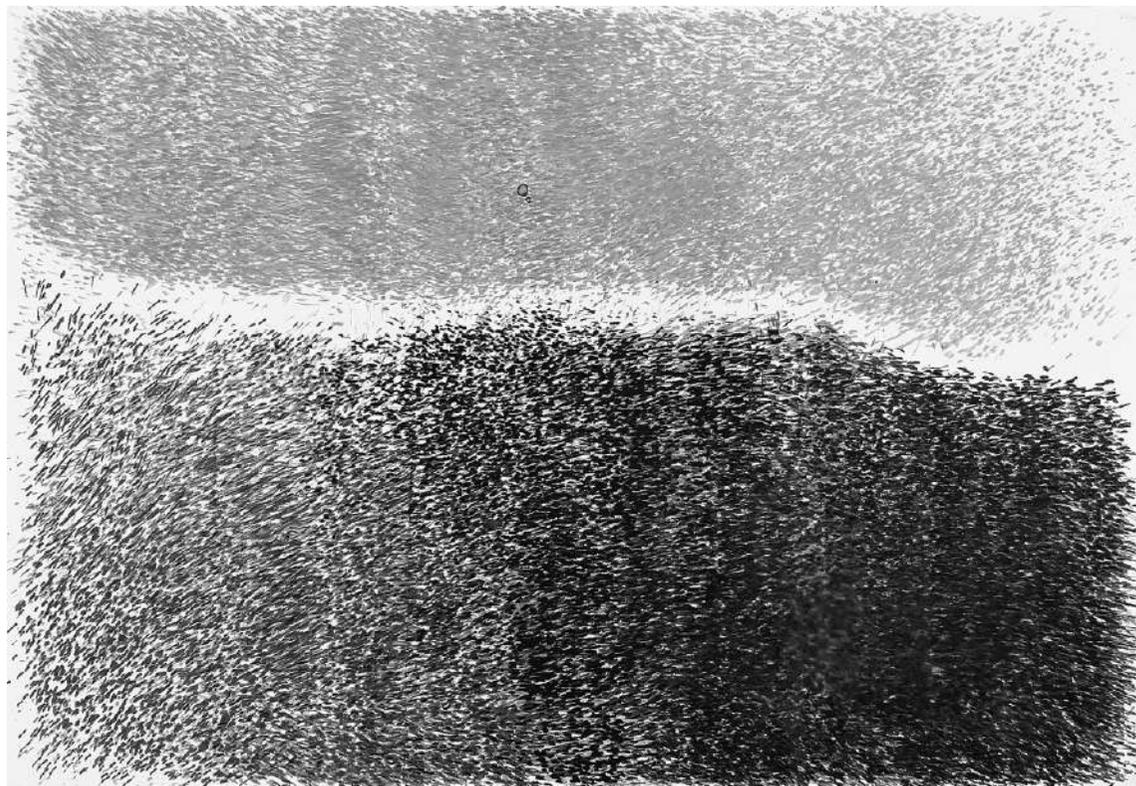
東京・世田谷にあるハーモニーは、精神障害者の方々が自分たちの幻聴妄想の実態を「かるた」にする、その名も「幻聴妄想かるた」の存在で知られている。新澤さんは1995年共同作業所「ハーモニー」開設と同時に施設長となった。「愛の予防センター」と名付けた当事者ミーティングを重ね、そこで語られた利用者の日々の困りことから「幻聴妄想かるた」が生まれた。今回はアサダが現場にお邪魔し、新澤さんのお話を伺った。



障害のある人の表現活動について感じて来たこと
— 信楽学園創立65周年を迎えて —

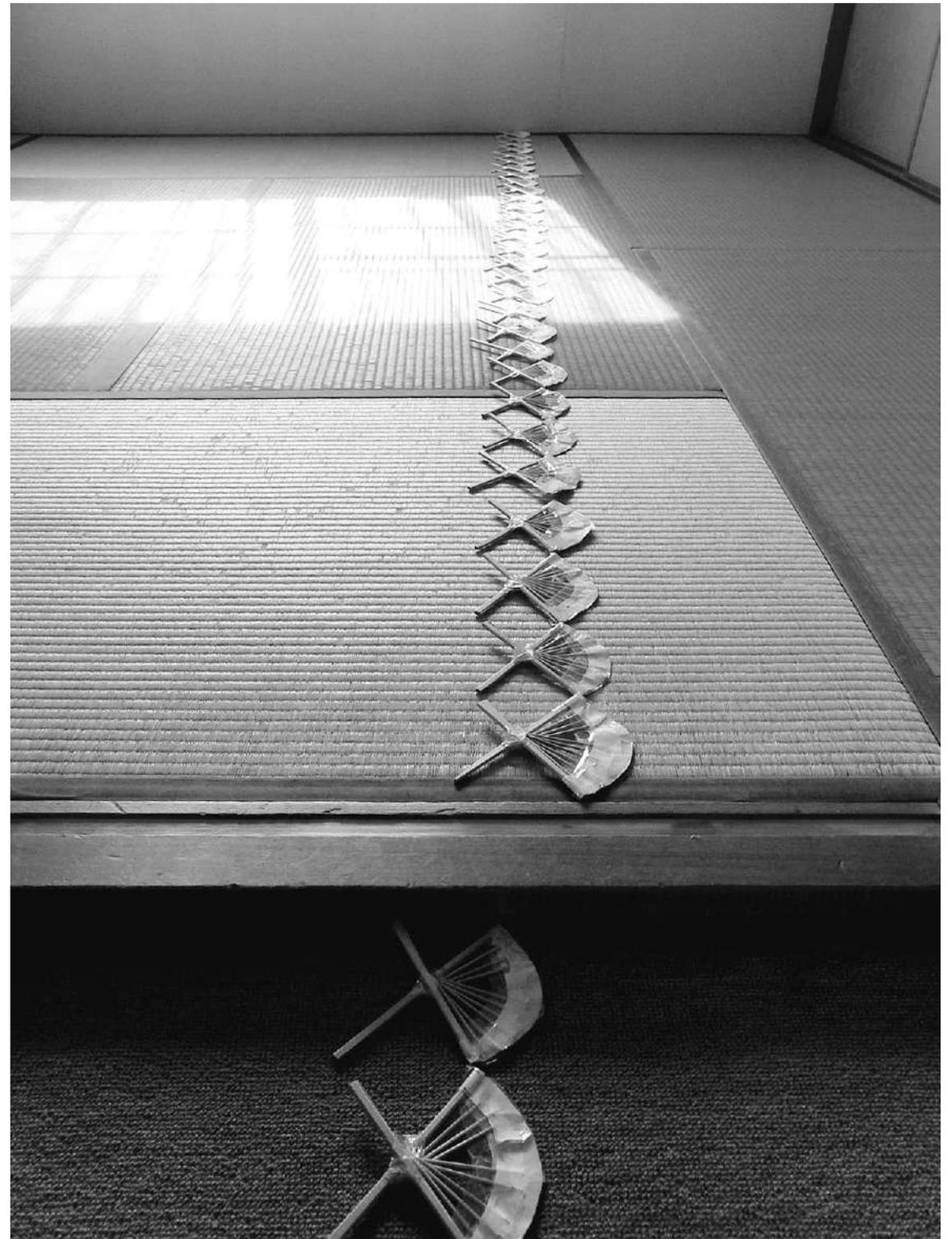
山之内洋（滋賀県立信楽学園園長）

山之内さんは、これまで障害福祉現場に携わりながら、ボードレス・アートミュージアムNOMAの立ち上げ初期の活動、糸賀一雄記念賞音楽祭に長年携わるなど、障害のある人々が生み出す造形活動やパフォーマンスの場づくり、発信にも関わってきた。今年創立65周年を迎える信楽学園。園長である山之内さんから改めて、障害のある人の表現活動の可能性について、これまで感じて来たことをお聞きした。



2

アート・文化関係者から見たアール・ブリュット



吉田格也
自宅の2階に並ぶ扇子
2017年

日本のアール・ブリュットのこれから NOMA 10年を振り返って

今井祝雄(美術家、成安造形大学名誉教授)

2004年のNOMA開館以来、ずっとその運営を支え続けてこれ、ご自身の創作活動のみならず、成安造形大学でも教鞭をとられてきた。国際的に活躍する現代美術作家である今井さんから、今、日本で高い関心を集めるアール・ブリュットの可能性を、NOMAの10年を振り返りながら語っていただいた。



今井祝雄(いまい・のりお)
1946年大阪市生まれ。造形作家。元、具体美術協会会員。成安造形大学名誉教授。1966年、第10回シュル美術賞一等賞受賞。以来、国内外の展覧会に出品多数。新大阪駅前や京阪天満橋駅、大津市役所沿道などにモニュメント制作、大阪市都市環境アメニティ表彰。著書に『白からはじまる一私の美術ノート』、『へたっぴんの美学—高鍋大師 保吉翁の世界』。2012年度まで成安造形大学で教鞭もとられ、ボダレス・アートミュージアムNO-MA懇談会会長としても関わってきた。

アール・ブリュットに早くも出会った今井少年

アサダ 今井さんの展覧会を何度か見させていただいてるんですが、デビューが17歳ということで、ずっと最前線でご活躍をされてきた、表現者として大先輩ですね。そんな今井さんが美術・表現に出会ったきっかけからお話ししていただこうと思います。

今井 小学生の頃から、なんとなく漫画が好きだったんです、漫画ばかり描いってたんですけども、小学生の時に初めて見た展覧会がアール・ブリュットと言えば日本では一番有名であろう山下清¹。それと、児童画でもないんですけど少年天才画家とか言われてたフランスのクロード岡本²という12歳の少年の展覧会をデパートで初めて見たんですね。それから初めて美術館へ行ったのはその後ゴッホ展。すべてアール・ブリュットに関係する展覧会だったなあと僕が今NOMAに関わるようになってから思い出したわけです。

アサダ 実はそうだったと。プロフィールの中にもある、今井さんといえば具体美術協会との関わり方、現代美術の世界では非常に有名な活動を残してきているわけですが、具体美術協会の簡単なご説明と、どういう形で関わられていたかを教えてくださいませんか。

今井 具体美術というのは、戦後の1954年にリ-

ダーであった当時50歳くらいの吉原治良が人の真似をするな、誰も見たことのないものを作れ、と、それをモットーに当時20代の若者を集めてスタートした活動です。18年続いたんですけど、僕はその後ろ8年に在籍していました。出会いは高校時代、そういう美術の方面に進みたいということで、たまたま展覧会で具体の人たちの作品を見ることになりました。

アサダ 吉原治良さんとの出会いというと、例えば今井さんが展示された作品が見られるというきっかけがあったんですか？

今井 そうですね。僕は実は「17歳の証言」というタイトルの個展を初めて開いています、その頃すでに具体の展示場へよく見に行っていたものですから、顔見知りでもあった若いメンバーが見に来てくれました。まあ、口づてに面白いぞということ、最終日に吉原治良さんが来られましてね。2ヶ月後に大阪の高島屋で展覧会をするので作品を持っておいでということから初出品になるわけです。

アサダ 大阪の天満にアートコートギャラリーというギャラリーがありまして、大変面白い活動をされているギャラリーです。そこで今井さんの展覧会があり、私も行かせていただいているんですが、初期の作品、17歳から22歳の頃の作品が、2012年の展覧会で紹介

1 1922-1971 画家。3歳の時に重病を患い軽い言語障害、知的障害になる。1934年に千葉県養護施設「八幡学園」に入園してから独自の技法による貼絵を始めた。全国各地を放浪し、その記憶を頼りに様々な風景画をちぎり絵で描いた。

2 パリ生まれ、3歳で絵筆をとり、5歳で初個展、8歳で来日し昭和昭和20年代から30年代にかけて何度も個展を開くなど天才少年画家として、当時世間を賑わせた。

3 1954年に兵庫県芦屋市で画家・吉原治良(1905-1972)を中心に阪神地域在住の若手作家で結成された前衛美術集団「これまでになかったものを作れ」という吉原の指示のもと、野外や舞台を使った展覧会などを企画。奇想天外な発想でユニークな作品を次々と生み出し、海外では「GUTAI」として高い評価を得た。

4 大阪市の桜ノ宮にある2003年オープン現代美術専門のギャラリー。美術館並の天井高を持ち、国内外で活躍するベテランから若手までを紹介する。

され、大変面白く拝見させていただきました。初期の作品はあういう白をテーマにした造形作品を作っていたことを改めて知った、というか知ってはいませんが見れる機会がなかなかなく、貴重なものでした。どんな作品の形態みたいものも変わっていったんでしょうか。

今井 日本人はこの道何十年とか、同じことを延々と繰り返すのが一つの価値というのがありますね。そうじゃなくて、僕は後年大学で教えるようになるわけなんですけど、学生たちに常々言っているのは、素材は地球上の物すべてと言っています。だから水から空気から自由にね、自分の最もふさわしいと思える表現媒体として使えばいい。

アサダ 媒体に関しては、その時に相応しい素材というのを選んでこられたと思うのですが、その中で2006年にNOMAで開催された「マイ・ルール」わたし時間の集積」という展覧会がありまして、この展覧会に出展作家として今井さんも参加されていまして、そのときに出展された作品が写真の作品、これについてご紹介いただけますか。

今井 これは「デイリーポートレイト」という、いわば私の写真による日記でもあるんですね。毎日インスタントカメラ、当時はボラロイドカメラでしかたけど、

自分の上半身を撮るわけですね。印画紙の下に余白がありましてそこに撮影した日付を書きまして、翌日またその写真を手に取って撮る。だから1枚の写真の中に前日の写真が写しこまれて、それにはまた一昨日の写真を手持っている、いわゆる入れ子構造みたいなかたちですね、ずっと続けているわけです。それが1979年5月から続けていまして、今35年経過したんですけども、先ほど紹介していただいたアートポートギャラリーで出品しました。

アサダ これはとんでもない量ですよ。

今井 インスタント写真は中に乳剤が入っているんですけどと分厚いですね、ですから積み上げていくと1年間に24cmになるわけです。それを透明なアクリルケースに入れていくわけです。1年間に1個できるわけですね。だから今36個目ですね。それが一番上の写真しか見えなくなるわけです。見えるのは大みそかの写真です。あとは写真の厚みしか見えない。むしろ僕は時間の厚みを見せる、それと同時に毎日、特別な日もあればなんでもない一日もあります。そういう時間というのは等しく存在します。そこに自分の生きてきた痕跡みたいなものを表すわけです。そして見る人は、それを自分の時間に置き換えてみるということになるかなと思います。

5 2006年7月1日〜8月20日、ポードレス・アートミュージアム NOMAで開催された企画展。出展者は伊藤喜彦、今井祝雄、澤田真一、西口友理、橋脇健一、堀尾貞治、米田文。

ポードレス・アートミュージアム NOMAの立ち上げ

アサダ NOMAって当時ポードレス・アートギャラリーだったと思うのですが、このNOMAで展示をするのは今井さんのように前線で活躍されている現代美術の作家と同時に、障害のある作家さんも参加されています。だからポードレスっていう意味が加わっているんですが、そのポードレス・アートミュージアム NOMAの立ち上げにも関わってこられたということ、今井さんはどういうきっかけで関わるようになったんでしょうか？

今井 その当時、成安造形大学に勤めて数年目であって、滋賀県のグローの前身である社会福祉事業団がアートサポーター制度というのをやっています。その県下の美術大学生たちがお手伝いに行くという要請が来たんですね。その時に事業団の方、そしてはたよしこさんも来られて、うちの大学との関わりがありました。僕はその窓口、アートサポーターの橋渡しをしたんです。

アサダ 学生さんたちが実際に福祉の現場で、造形活動のサポートに行かれるということはかなり刺激を受けるものは大きかったんじゃないでしょうか。

今井 目から鱗が落ちるみたいな、段ボールに絵をかく人、誰だったかな、今度出品される、（※小幡正雄氏）そのレクチャーが終わった後、それまでキャンバスに描いていたのが段ボールに描きだす学生もいました。そんな問題とは違うんだけど（笑）。

アサダ 思いもしない素材とか、手近にあったのがその素材だったからというのもあるかもしれませんが、美術をするために学校に入っている学生さんたちにとってはそれ自体が衝撃だったということですよ。

今井 ほかにも目には見えてないですけども影響を受けた人もいますし、卒業後そういう現場で働く卒業生も出てきています。

アサダ 当時はいわゆる障害のある作家さんたちの展覧会は、市民会館などであったりしたとしてもその時限りでした。一つの美術館・ギャラリーというものを具体的に建ててしまうとこれからずっと展覧会でまわしていかないといけない。それを常設で、障害のある方含め福祉から生まれる作家さんと現代美術の作家さんの作品を同じ空間に展示するというアートディレクターのはたよしこさん中心に立ち上げられたコンセプトに対して、今井さんは当時どういう感触というか、これはいけるといいう感触だったのでしょうか。率直にいかがでしたか。

6 正式名称…アート・サポーター派遣事業。グロー前身の滋賀県社会福祉事業団が2002年〜2008年まで日本財団の助成を受け行った。滋賀県内の障害者支援センターに、障害のある人たちが自由な造形活動をする場を整備し、そこに、美術を学ぶ学生を中心としたアート・サポーターを派遣し、造形活動の支援を行った。

今井 最初は障害者アートギャラリーというのを滋賀県下に作るという話があった。それまでは百貨店とか公共施設で障害者のアートだけを集めた展示はあったんですけど、その延長みたいなかたちで常設スペースを作ると。でも障害者に限ってしまうと逆に困り込んでしまうことになる。そうじゃなくてせっかく作るんだったら一つのテーマを設けてですね、現代美術の

先端的な仕事をしている人の作品と一緒に並べること、それによって現代美術も何ものにも囚われない自由な表現という点では共通していますので、それがいいんじゃないかなとなりました。それがネーミングのボードレスにつながっています。

アサダ 何にも囚われない表現をするということ、吉原治良さんもおっしゃっていたような見たことのない世界を自ら生み出していくんだという衝動みたいなことに関しては、障害あるなしのボーダーはその時点で超えているということかと思いますが、実際に開館して最初に「私、あるいは私」という展覧会、次に「マイ・ルール」と開催し、実際にご自身で出展もされながら展覧会を毎回ご覧になられている中で、改めて展覧会として形になったときにどんな感触をお持ちになりましたか？

今井 毎回展覧会のオープニングがスリリングな感じ

時代が変わったなあという感覚はありますか？
今井 実は僕はアウトサイダーアートという言葉よりもアール・ブリュットという言葉の方が先に知っていたんですよ。と言いますのは、僕の連れ合いの里である五島列島に、30年間一人で延々とガウディもどきの観音堂をつくっておられるおじいさんがいてましてね。その写真展を神戸でやったことがあるんですよ。その時に見た東京の美術の学芸員の方が、「これはアール・ブリュットだ。」と言いました。その時にアール・ブリュットのことを調べたんです。1970年代終わり頃です。その時にすでにアール・ブリュットという言葉はあったんですね。その調べている中でアウトサイダーアートという言い方もあるんだと知りました。アール・ブリュットはヨーロッパ、アウトサイダーアートはアメリカかなというように認識で受け止めていました。

アサダ アール・ブリュットという言葉自体はフランス語で「生の芸術」、どこにも「障害者の」という意味合いは入っていません。いわゆる美術教育を受けていないとか、ありのままの衝動でという意味ですが、ご紹介いただいた作家さんのお話をうかがっているとは必ずしも障害があるなしというようにただけではないわけですね。

今井 そうですね。

でした。スタッフだけではなく運営委員含め、企画の段階で胸ときめかせるような、どういう感じになるんだろうという気持ちがありました。それは回を重ねることによって段々と落ち着いてきたわけですけど、近年はNOMAだけではなく各地で同じようなことが行われるようになりました。

アール・ブリュットという言葉と表現

アサダ 当時含め2000年代前半から半ばくらいまでは、アウトサイダーアートという言葉のほうが、どちらかというと言われていたと思うんですが、徐々にフランスの言葉であるアール・ブリュット、生の芸術という言葉が普及していきました。その中でNOMAの活動はボードレス・アートというコンセプトを維持しながらも、アール・ブリュットという言葉を使い、2008〜2010年あたりからスイス、アール・ブリュットコレクションとの連携やパリのアル・サン・ピエールでの展覧会など徐々に活動を注目されるようになってきました。今改めて10年目を迎える中、アール・ブリュットという言葉が少しずつ日本の美術の世界でも広がってきていると思うのですが、そのこと、当時2004〜2006年頃とは今井さんの中で何か

アサダ その島で長年ずっと何かを作り続けているとか、そういうこと自体に昔から今井さんは関心をお持ちなんですか？

今井 僕は若くして作品を作り出したんですが、1970年代半ば頃に自分が造形的な制作にスランプになった時期がちょっとあったんですね。具体解散後なんですけど、その頃は作品が造形的なものから映像、写真という作品に変わった時期なんです。その頃にひたすら物を作り続けている人っていうのにもたまたま私の連れ合いの里である長崎の離島で出会ったわけですよ。それからそういう物に興味を持ち始め、いろいろ調べて知多半島の貝殻公園というところを訪ねたり、瀬戸内海の小島でやっている元石工を訪ねたりとか、そういうことをやっていました。それらの写真展をやったとき、前述の学芸員の方からこれはアール・ブリュットだということを知らされたわけです。

アサダ アール・ブリュットという言葉の方が、アウトサイダー・アートという言葉より先に知っておられたってことで、そのことがありながら一方で、ボードレス・アートミュージアムNOMAを運営しているところは社会福祉法人ということで、福祉施設であったり精神科病院であったり、この番組でもそういった施設に取材へ行っています。よく展覧会の会場だとキャ

クションにもプロフィールなど特性というか、そういうのが書かれていると思いますけれど、今井さんから見られてアール・ブリュットだなあとか、この作家さんはこういう傾向があるなということを感じることはあるんじゃないかな。

今井 まあ、ありますね。

アサダ 具体的に共通点は感じられますか？

今井 障害のある方、高齢者、また特殊な環境にいる人、特殊な環境というと刑務所に入っている人、精神科病院に入っている人も含められますけれども、いわゆる美術の教育を受けていない立場の人、あるいは美術の文脈とは無関係に創作活動を、まあ本人は創作というふうを意識しているかわからないですけども。

アサダ そこがすごく興味深いところです。作っているという感じもないのかもしれないですね。日々やり続けているというか。

今井 それが自分の生きる一つの証になってるということですかね。糧になってるというか。それが生きるということ言い切れる場合もあると思います。そういうものが美術の文脈から見ると非常に新鮮に見えるのが少ないです。ただ、そういう作品がすべていいというわけではないですけど。その中にはほかに代えがたいものがありますね。

アサダ 実際今井さんご自身の制作にアール・ブリュットと呼ばれるような作家さんの活動から何かしら刺激や影響を受けたことはあるんじゃないかな？

今井 そうですね。特に影響を受けたということはないですけど、自分が先ほど話した毎日写真を撮り続けるということ、人から「うわー」と驚かれたりしますけれども、それがアール・ブリュットの作家たちの中ではそういうことは当たり前なんですよね。一つのことをずっとやり続ける、それは僕の場合は前日の写真を持った作品は時間の積み重ねだと言いますが、そういうこと関係なく続けるということは変わらない。そういうところで自分自身励まされる、納得させられるということがありますね。

ボーダレスにする領域を広げる。

これからのNO・MAに向けて

アサダ NO・MAの運営に10年も関わってくださっているわけですが、今回、特別企画展「快走老人録Ⅱ」のカタログに今井さんにご寄稿いただいています。この「快走老人録Ⅱ―老ヒテマスマス過激ニナル―」という、以前に1があっただんですが、この展覧会に関して何かメッセージなどご紹介ください。

今井 障害者と現代美術家とのコラボレーションによる展示、そういう展覧会がNO・MAで続いてきたわけですけども、中でも僕が一番印象深かった展覧会は、改めて考えてみますと「快走老人録」であったなと。

あれは出品されている作品もさることながら、あの企画自体が非常に面白い。というのは、時代性とか地域性とか素材、技術、メディアとか、一つ焦点を絞った企画展というのは各地の美術館でも行われているわけですが、その人の生涯を通じたプロセスである高齢、それにスポットを当ててアートから老いを考えようとする企画展というのはあまりない、聞いたことがないという感じですね。

アサダ 高齢、誰もが通る道ですよ。例えば福祉の視点でそのことを考えると、最近では認知症だったり、高齢化している社会の中でほとんどん施設に入居される方の問題であったり、いろんなことを語られていく中で全く違う切り口、つまりアートからということ、ここに紹介されている文章も大変面白いと思うんですけど、ここにこう書いてあります。「フレッシュであることと老化することは真逆ではありません」と。

今井 そうですね。

アサダ 「新しいことは若い感性によってのみ生み出されるのではなく、長い人生の時間を持つているからこ

そ放つことができる」また、「人生の最終カーブをブレーキをかけずにキュンキュンと走る快感」とまで書いてしまっているんですね。

今井 (笑) まあ、まれでしょうけど。

アサダ 皆さんが皆さんそうではないでしょうけど、少なくとも今回出展されているような方々は明らかに突っ切っていますよね。これはすごいなあというような作家さんも出展されていて。ご自身の畑に謎のかかしを作っていたりとか。こういう観点で老いを見つめるということ自体、NO・MAがやれる可能性だと思いますが、いかがですか。

今井 僕はこのような企画展が、障害者を軸にしたNO・MAでおこなわれたことの意義、意味はとても大きいことだと思えます。一般に障害と同様に老化や高齢化というのはマイナス要因として考えられがちなんですよね。特に高齢化などのマイナス思考を積極的にプラスに持っていこうとする言葉として「老人力」という言葉がありましたね。それは赤瀬川原平の本にあるわけですけども、これはどういうものかと言うと、物忘れが多くなってもクヨクヨしない、宵越しの金ならぬ宵越しの情報は持たないということ。それはもう忘れてしまえということですけども。それを肯定的に捉えるわけですよ。老人が後戻りや暴走する

7 2014年8月9日〜11月24日、
ボーダレス・アートミュージアム
NO・MAの開館10周年を記念して開催した特別企画展。出展者は折元立身、小西節雄、白井貞夫、中川幸夫、西之原清香、福田増男。

8 2006年9月16日〜11月15日、
ボーダレス・アートミュージアム
NO・MAにて開催された企画展。出展者は上岡安風、小幡正雄、河野咲子、塔本シスコ、林田嶺一、三松正夫、宮間英次郎。

のはみつともないと言われますが、人は誰でも齢をとるわけですからね。こういう老いをポジティブに受け入れようとする考えは、好ましいことだと思います。

アサダ 改めてアール・ブリュットということ、一つテーマを設けた時にNOMMAがアートを通じて社会の常識、今回でいうと老いというどちらかというと弱っていくというような常識に対して全く違う風穴を開けていく可能性は、老いをテーマにせずともあると思うんです。そんなことを考えながら一方で、アール・ブリュットそのものをどんどん見せていく。今井さんの中で、これまでアール・ブリュットを中心にボードレス・アートミュージアムNOMMAをやってきたことと、今後NOMMAが社会のどういふこととつながっていったらもちとボードレスになっていくという希望みたいなことがあつたら教えていただけますか？

今井 ボードレスという言葉が必ずしも障害のあるなしのボードレスだけではないんですね。アートと地域社会、今回の快走老人録では老いとアートですよね、それからアートと医療とかですね、アートと他の分野のボードレスを探るような展覧会みたいなものもどんどんやってほしい。でないと各地でこれからアール・ブリュットの展覧会がNOMMA以外でも行われる機会が多いですからね。NOMMAは一つの先駆者として、

先端を行ってほしい。そういうことですね。

アサダ 一つの先駆者としていろんな分野と連携しながら、一方でこれからアール・ブリュットというのがどんどん認められていく中で、もつと深い意味での現代美術とコラボレーションしていくということですね。今井さんはずっと教員もされていたというご経験の中で、これから美術作家を志していく方、また現代美術を研究されている方が深いレベルでアール・ブリュットと現代美術が混じり合う表現ということをやっているときに、現代美術の世界とアール・ブリュットがい形でもコラボレーションしていくイメージがあつたらお聞かせください。

今井 そうですね。ただ今のところアール・ブリュットに興味持つ人と、いわゆる現代美術に持つ人とまだわかれてはいるんですよ。

アサダ ちょうど現在ボードレス・アートミュージアムNOMMAで行われている展覧会「Timeless 感覚は時を越えて」がどちらかというと現代美術のコンセプトチュアルな要素がかなり強い展覧会になります。だからと言って現代美術に興味がある方々と、アール・ブリュットみたいなことに感心のある方がなかなか現場で混じるということまでいかないもので、そこも混じるという状況をつくっていかれたらなと。

9 2014年5月2日〜7月27日
ボードレス・アートミュージアム
NOMMAにて開催された企画展。出
展者は遠藤一郎、椎原保、武友義樹、
筒井貴希、西澤彰、三橋精樹。

今井 いわゆる一般の美術の中でも、古美術に興味がある人とかね。いるわけですから。僕はNOMMAの10年の記念誌にも書いたんですけども、アール・ブリュットを本当に理解するためにはアール・ブリュットだけではだめなんですね。もつと広く現代美術とも接することでアートそのものが発するイメージやメッセージに耳を傾けて、まずは楽しむことが大切です。これは取材だ、これは研究だとか、アール・ブリュット

の作家は特に研究対象だという人もいますが、そうではなくて、作品そのものを楽しむことがベースじゃないかと。そういうふうには接していけば僕はまだまだ可能性が広がっていくんじゃないかと思えます。アール・ブリュットについて、あるいはアール・ブリュットじゃないものとの違いについてもつと議論していかなければならないと思います。

アサダポイント

NOMMAの10年を懇談会座長として支え、最先端の現代美術のシーンで活動してきた今井さん。アール・ブリュットが、社会の様々な領域——高齢化の課題、地域づくり、ケアの拡張など——に関わってゆく可能性とともに、現代美術とアール・ブリュットとが創作や展示を通じてもつと多様な対話・コラボレーションをしていく可能性についても、お話ししていただいた。

呉美保監督に聞く、アール・ブリュットの魅力

呉美保(映画監督)



呉美保(お・みぼ)
1977年生まれ、三重県出身。大阪芸術大学映像学科卒業後、大林宣彦事務所PSCに入社。スクリプターとして映画制作に参加しながら制作した短編『ハルモニ』が2003年、東京国際ファンタスティック映画祭/デジタルショート600秒の最優秀賞を受賞。同年PSCを退社。初の長編脚本『酒井家のしあわせ』が2005年、サンダンス・NHK国際映像作家賞/日本部門を受賞、映画監督デビュー。同作品を小説としても書き下ろす。2010年、『オカンの嫁入り』(脚本・監督)で新藤兼人賞の金賞を受賞。2014年に『そのみにて光輝く』(監督)、2015年に『きみはいい子』(監督)を公開。

2016年2月に大津プリンスホテルにて開催された地域福祉と文化の祭典「アメニティーフォーラム」にて講演した映画監督の呉さん。同時開催されている「バリアフリー映画祭」という、障害のある方とともに新しい映画の楽しみ方を考える上映会にて、呉監督のふたつの作品が上映されていた。一つは2014年の作品『そのみにて光輝く』、そしてもう一つは2015年の作品『きみはいい子』。介護や児童虐待など、様々な社会問題を扱ったこれら二作品を監督自ら紹介。また、講演を終えたばかりの呉さんに、同時開催されていたアール・ブリュット展「images」をご覧になった感想や『きみはいい子』の登場人物の一人、自閉症スペクトラムの少年があの映画の中で担っていた役割など、幅広く話を伺った。

アール・ブリュット作品とその背景にある関係性

初めてアール・ブリュット作品を観た呉さん。「楽しくて、ワクワクする」という率直な感想を述べつつ、その独特な色彩感覚などに惹かれながら、自身も絵を描きたくなるような気持ちにさせられると語っていた。「観る側に表現の衝動が乗り移る」という話は、これまでもこの番組で、作家の田口ランディさんをはじめ、何人かが語ってきたこと。そして具体的には、梅木鉄平さんのゼロハンテープで作られたまるで地層のような造形物や、舐万里絵さんの女性器が多く描かれた絵画などについて語り、またキャプションで紹介された家族とのエピソード(ゼロハンテープの剥がす音

に悩まされる母親への配慮として、音が控えめなテープを選んでいること)、職場でのエピソード(舐さんが職場では仕事として頼まれたイラストを描くことはあっても、こういった作風は出さないという意識)にも関心を寄せていたようだ。アサダとしては、アール・ブリュットが「人知れず表現する」という言い方で紹介されることがある一方で、その作品が世に出るプロセスには、作り手にとって身近な存在である家族や支援スタッフなどの存在があることも気になっている。そうした「関係性の中から、造形が『作品』として見出される」ことに着目し、呉さんの監督作品『きみはいい子』へと話を進めていった。

新たな関係性の結び目としての弘也くん

『きみはいい子』は、認知症になったことに戸惑うおばあさん、自閉症の障害を持つ小学生の男の子とその母親、我が子を虐待してしまう母親、学級崩壊するクラスで奮闘する新任教師と、様々な「社会問題」を背景に持つストーリーがいくつも並行展開する。呉さんは、ただ問題提起をしたいのではなく、その先にある、「全解決はできないにせよ、何か少しでも明日への一歩となるような、希望のある作品にしたい」という思いで制作に取り組んだ。各々のストーリーは映画が進むごとに、同じ街を舞台にした一つ一つのピースとして、じわじわと重なりあってゆく。お互いは知らなかったりする登場人物同士が、実は隣の隣くらいの近いところに存在しあっているのだ。

その絶妙な関係性が見事に描かれる中で、とりわけ重要な人物として、自閉症の当事者である弘也くんがいる。「弘也くんは日常にある、忘れがちな身近な幸せの存在に気づかせてくれる役割を持つてる」と呉さんは語る。

とりわけ印象深いのは、認知症のおばあさんと弘也くんの間で紡がれるコミュニケーション。彼女たちの会話は周囲からすれば噛み合っていないように映るのだが、そのふたりの間には、ものすごく豊かな時間が流れているのだ。弘也くんの母親は、自閉症の息子を持つ母親として、「息子が迷惑をかけてごめんない」といつも謝り続ける生活を送っている。そんな中、おばあさんは開口一番、母親に対して弘也くんを褒める。こうして、弘也くんを一つの軸として描かれる、それぞれの関係性の更新が、この映画の見所なのだ。

「抱きしめる」はじめる

この映画には、随所随所に「抱きしめる」、「頭を撫でる」といったスキンシップのシーンが描かれている。呉さん曰く、映画の中には原作にないセリフが登場し、その一つが新任教師の姉(シングルマザーという設定)が弟である教師に言う「私があの子に優しくすれば、あの子も他人に優しくするの。子どもを可愛がれば世界が平和になるわけ。母親って凄いい仕事でしょ」がそれだ。脚本家が加えてくれたこのセリフを、言葉だけでなくスクリーンを通じて体感してもらうために、「抱きしめる」という表現にこだわったのだと、呉さんは話してくれた。取材当時、8ヶ月のお子さんが誕生していた呉さんにとって、人が人に与えてくれる「ぬくもり」の大切さを強く感じていることを、最後に話してくれた。

美術と福祉の「あわい」をキュレーションする。

——今泉岳大の場合——

今泉岳大（高浜市やきもの里かわら美術館学芸員）



今泉岳大（いまいずみ・たけひろ）
1982年生まれ、愛知県出身。武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科卒業。BankART1929を経て2009年より現職。文化庁アール・ブリュット魅力発信事業調査員、滋賀県アール・ブリュット推進事業調査員、あいちアール・ブリュット優秀作品特別展審査委員などを歴任。そのほか愛知教育大学非常勤講師、日本福祉大学講師。

今泉さんは、高浜市やきもの里かわら美術館で、これまでもアール・ブリュットにまつわる展覧会や、美術と障害福祉の世界のボーダーを揺るがすような企画展など様々な取り組みをしてきた。収録時、愛知県では第16回全国障害者芸術・文化祭あいち大会が開催中で、その企画にも今泉氏は関わっている。パーソナリティのアサダとの個人的な出会いは、現代アートを発信する横浜のアートセンターだったりののだが、現代アートのキュレーターが「障害と表現」というテーマに、どのようにして関心を持つて行くかというそのプロセスについて、今泉さんを例に展開した。

学芸員としての変遷

大学時代はアメリカの近代美術を研究していた今泉さん。大学を一旦中退し、世界一周する中で、メリーランド州にあるアメリカンビジュアルアートミュージアムという、アウトサイダーアートの専門館と出会ったことが、アール・ブリュット的なものへの関心の発端となっている。ちなみに高浜市はもともと高齢者福祉の先進地として有名で、かつ、高浜市やきもの里かわら美術館は2005年に愛知県内の公立美術館では初めて障害のある人の作品を紹介する展覧会が行われるなど、知る人ぞ知る福祉と美術の交差点だ。今泉さんはここに就職することで、小さなまちの公立美術館ならではのスタンスとして、「地域」というテーマも踏まえながら、その地元の作家の発掘を行い、障害のある作り手ともアクセスする状況を作っていた。

「遊び」という視点の導入

取材時の3ヶ月前までかわら美術館で開催されていたのが、今泉さんキュレーションの企画展「PLAY vol.1 表現における遊戯性」だ。「遊び」をテーマに、美術作品をはじめとした様々な表現を発見していく展覧会で、彼にとってはカウンターの・挑戦的なテーマに挑んだと語る。なぜなら美術の世界ではそれを「＝遊び」と言ってしまうのはタブーであり、（プロの）作家とは本気で作品を作る存在であり、それを遊びと言ってしまうという風潮があるから。その一方で、地方の中小規模の美術館にいと、地元の作家とのつながりが強く、30〜40代の若手の現代美術作家が（都心や海外に出て）「売れる／売れない」という価値観に縛られることなく、自分が徹底的に楽しむために作品制作をしているスタンスにも出会ったらしい。そういった創作モードの違いの中から、観客に笑いを訴えるような作風や、一緒に体感して楽しむタイプの作風など、すなわち「遊戯性」の高い作品を発掘してきた。またその創作モードは、アール・ブリュット、つまり美術教育を受けていないアマチュア作家や、高齢者、障害のある作り手の創作とも連動する。自分の内的世界で（実際に）「遊び」として生み出されるものも含めて、それらもあわせて、美術における遊戯性をポジティブに捉え直したわけだ。

この「遊戯性」から見出されるもう一つの視点は、「作品（造形物）」という結果のみでなく、創作の「プロセス」に着目することだ。どうやってできたか、どういうコミュニケーションがあつてこれが生まれたか。美術に限らず、社会全体が近年、結果のみでなく過程を重視するようになってきたのではないかと、話す今泉さん。「遊び」とはまさに行為（プロセス）そのものが本来目的だ。その視点を通すことで、アール・ブリュットを受け取る私たちにも、もっとたくさんの発見がもたらされるだろう。

公立美術館だからこそ意識する役割

「美術と福祉の「あわい」をキュレーションする」というテーマで、今泉さんにインタビューしているわけだが、とりわけ公立美術館だからこそ意識していることがあると言う。それは美術館が「価値をつける殿堂」であり、例えば展覧会で紹介した作品は、「みんなが良いもの・正しいもの」と思う可能性が高い。なので、ちゃんと研究をし、美術史の中で作品の意義を位置付けることで、一過性の評価に終わらないようにする必要があるのである。今泉さんはこれまでアカデミックな評価を受けて来なかった地元の作家をちゃんと調査し、時には障害のある人の作品も含めてちゃんと再評価し、愛知県のアートの流れに組み込んでいくことをいつも意識していると語っていた。

その一方で、そもそもアール・ブリュット作品は、作り手が（美術館などでの）展示や収蔵を目的として作っているわけではないので、そこに手を広げることはやはり「聖域」だと言う。愛知県が本腰を入れて障害のある人の作品の紹介に取り組む際に、やるのであればやはりしっかりと関わりたいと強く思う今泉さんは、「最後は作品の力がそういった枠組みを超えてゆく」と力強く語った。福祉現場にも足を運ぶ中で、現場での作品の捉え方と学芸員として紹介したいポイントにズレがあることもある。しかし、日々丁寧に調査を続ける中で、今泉さんは美術と福祉の「あわい」を対話を通じて包み込もうと、努力をしている。今後も彼の企画する展覧会が楽しみだ。

障害のあることやないことや。音楽表現の可能性。

糸賀一雄記念賞音楽祭の取り組みから

中谷満（打楽器奏者、相愛大学音楽学部教授、糸賀一雄記念賞音楽祭実行委員会実行委員長）

中谷さんは、打楽器奏者としてこれまで様々な楽団で活躍し、相愛大学教授として後進の育成にも力を注いでいる。そんな中谷さんが、この10数年ずっと関わってきた取り組み、それが糸賀一雄記念賞音楽祭（以下、糸賀音楽祭）だ。毎年秋に、栗東芸術文化会館さき大ホールにて開催されるこの音楽祭は、琵琶湖を囲むように県内6つの施設で表現活動を行う障害のある人と、プロのアーティストが一体となって表現することの喜びを分かち合うフェスティバル。その実行委員長として、音楽祭に対する熱い思い、障害の有無を超える音楽表現の可能性について、語っていた。

糸賀音楽祭とのつながり

アマチュア時代にも既に県内各地で演奏を行ってきた中谷さん。その訪問先の一つに、日本の障害福祉の父と言われる糸賀一雄氏が設立した近江学園があったという。しかも今思い返せば大津高校在学時に当時の校長が糸賀氏を招いて生徒一同に講演会を開いたこともあったとか。「確か、近江学園のお話や障害児教育にまつわる色々なお話をしてくださったと思うのですが、その時はすみません……、僕ちゃんと聞けてなかったんですね」と中谷さん。しかし、この10数年糸賀音楽祭に関わったことで、「あの時お会いしていただんだ！」という記憶が蘇り、改めて自身の演奏活動と糸賀氏の福祉実践との間に強いつながりを感じるようになった。



中谷満（なかに・みつる）
1949年生まれ、滋賀県大津市出身。1973年京都市立芸術大学音楽学部打楽器専攻卒業。同年大阪フィルハーモニー交響楽団に入団。1977年3月から1年間旧西ドイツ国立ベルリン音楽大学に留学、ベルリン放送管弦楽団、ベルリン・ドイツ・オペラ管弦楽団などに出演。帰国後は、1990年よりパーカッション・アンサンブル「シュレーゲル」を主宰するなど、オーケストラでの演奏のほかにも数多くの協奏曲独奏やアンサンブルの活動を積極的に展開し、2008年3月大版フィルを退団。同年4月より相愛大学音楽学部教授に就任。同志社女子大学などでも後進の指導にも精力的にあたっている。

糸賀音楽祭立ち上げの経緯は、大津にびわ湖ホールが設立される際、県内の音楽家愛好家有志と1991年に滋賀音楽振興会を作ったことにまで遡る。会が関わった障害のある人と共に行う第九のコンサートがあり、その活動がのちの糸賀音楽祭につながる一つの流れとなった。合唱を軸にしつつ、そこから打楽器やダンスと様々な表現が加わっていく中で、第二回以降は、中谷さん自身も近江学園に赴きナビゲーターとして参加。10年以上も続く糸賀音楽祭の礎が徐々に築かれていった。

心の中を掘り下げる表現

障害のある人たちと共に音を奏でてみる。当初そのことに不安があったり、どこかで理論や技術をもとにしたプロという意識から彼女らと接していた中谷さんだが、根源的な感動や音に対する感覚については、自分たち演奏家がつくりあげてきた表現と共通だと感じるように。むしろクリティクとか技術といったものが、彼女ら前では何の価値も持たない事実に気づき、演奏から生まれる感動とまったくピュアに向き合わねばならないことを、障害のある彼女らから学ぶ機会となった。中谷さんはその経験を「心の中を掘り下げられたよう」と表す。

この心の中を掘り下げられる実感は、音楽祭にナビゲーターとして関わったほかのミュージシャンやダンサーにも共通して言えることではないか。「音楽祭を通じて変わってゆくのは、障害のある彼女らではなく、むしろナビゲーターの方」と語る中谷さんは、ナビゲーターの経験が良くも悪くも生み出す「表現に対する」価値観が、回を重ねるごとに「新たな感動値（の獲得）」へと向かっていると語る。またボーダレス・アートミュージアムNOMAでも展示されてきた土の作品に触れながら、「ああいう心

のさまが現れている表現を、早く『音』の世界でも皆で作らあげるようにしていきたいし、音でもきつとできると思うんです」と語った。

よりボーダレスに向かってゆく

第二回以降、和太鼓奏者の林英哲氏を招いてワークショップを行ったり、ダンスワークショップグループが生まれたり、第十回ではフランスのナント市からプロデューサーとミュージシャンを招いたり。また第十一回以降は、音楽家の小室等氏がプロデューサーとして関わるなど、徐々に活動の幅を広げて来た糸賀音楽祭。中谷さんは、うた、打楽器、ダンス、そして洋の東西も国境も超えて放たれる表現に、驚きを感じてきたと話す。近年では、音楽祭の会場である栗東芸術文化会館さきらのジュニアオーケストラや平均年齢65歳の合唱ワークショップグループも交えながら、世代も障害も超えて展開される音楽祭のあり方にさらなる可能性を感じているようだ。放送の最後に、中谷さんはまもなく開催される第十三回音楽祭に向けて、リスナーに以下のようなメッセージを発した。「ボーダレスという人間の心の感動をみんなで共有していただいて、滋賀を琵琶湖とともに大きなあったかい街に、人と人がつながり合う絆の持てるいい街にしていきたい。それは糸賀先生の大いなる思いでもあり、滋賀が心が豊かな人たちを育む場所にしていけるようなきっかけであって欲しいと思っております。」今後も続いていく糸賀音楽祭に、また、滋賀という土地に対する中谷さんの強い思いが詰まったメッセージだった。

④ 第27・28回放送（2014年4月4日、11日）

アール・ブリュットを訪ね歩く ボーダーを超える実践的取り組み

はたよしこ（ボーダレス・アートミュージアムNOMAアートディレクター、絵本作家）

今回はボーダレス・アートミュージアムNOMAアートディレクターで絵本作家のはたよしこさんをお招きした。福祉作業所での絵画教室の運営をはじめ、これまで全国の様々なアール・ブリュット作品の発掘に努めてきたはたさん。アートディレクターを務めるNOMAでの企画展の話題や、彼女が追求する「人の持つ普遍的な表現の力」というテーマにぐぐっと迫ったトークとなった。



④ 第48回放送（2014年8月29日）

リアリティーこそアート。 「快走老人録Ⅱ―老ヒテマスマス過激ニナル―」折元立身インタビュー

折元立身（現代美術家）
はたよしこ（NOMAアートディレクター、絵本作家）

NOMA開館10周年特別企画展「快走老人録Ⅱ―老ヒテマスマス過激ニナル―」の出版作家の一人、現代美術家の折元立身さん。今回出展している「アートのママ」シリーズについて、そして「アートのママ」である母、おだいについて、お話をいただいた。途中からは、現場に居合わせたはたディレクターも参加し、お茶の間のような雰囲気の中、お届けした。



④ 第61回放送（2014年11月28日）

ぐちゃぐちゃした他人同士がそのまま に居合わせること 音楽的場づくりの可能性

大友良英（音楽家）

大友さんと言えば、日本の先鋭的な音楽活動を牽引し、またNHKの連続テレビ小説「あまちゃん」のテーマ曲などを担当するなど、本当に多彩な活動をしているギタリスト、ターンテーブル奏者、作曲家、プロデューサーだ。実は大友さんはこの関西でも様々な音楽的な場づくりをプロデュースし、中には「福祉」ともつながるとてもユニークな実践に関わっている。この回では大友さんの最近のお仕事から関西でのプロジェクトまで時間の許す限りお届けした。



④ 第63・64回放送（2014年12月12日、19日）

ほほえむちから。糸賀一雄記念賞 音楽祭の取り組みから知ったこと

谷川賢作（ピアニスト）

谷川さんは、これまで演奏家として様々な楽団やコンサートに出演し、NHKの歴史番組「そのとき歴史は動いた」の楽曲など、様々な作曲の担当。そんな谷川さんがこの3年間、滋賀県で関わっているのが糸賀一雄記念賞音楽祭だ。琵琶湖を囲むように県内7つの施設で表現活動を行う障害のある人と、プロのアーティストが一体となって表現することの喜びを分かち合うフェスティバル。そのゲストミュージシャンとして活動される谷川さんに、音楽祭に対する熱い思い、障害の有無を超える音楽表現の可能性について、語っていただいた。



④ 第66・67回放送（2015年1月2日、9日）

目に見えない表現と向き合う近づく。 やさしい美術プロジェクトの実践から

高橋伸行（アーティスト、名古屋造形大学教授）

高橋さんは、これまで病院、老人福祉施設、障害者施設、ハンセン病療養所や東日本大震災被災地域などで様々なアートプロジェクトを展開してきた。障害のある方が取り組む造形活動にも精神的に関わる中で、アール・ブリュットとはまた違った「出来事としての表現」に取り組む「やさしい美術プロジェクト」の全貌に迫った。



④ 第71・72回放送（2015年2月6日、13日）

写真という表現を携えて向かい合った 「もうひとつの時間」 ―写真集『ソロニユの森』から―

田村尚子（写真家）

田村さんは、2012年にフランスのラ・ポルト精神病院を舞台にした写真集『ソロニユの森』を出版し、芸術、医療、福祉など様々なジャンルから注目を集める。思想家フェリックス・ガタリが終生かかわったことでも知られるラ・ポルト病院に向けた田村さんの眼差しは、福祉や医療という制度の中で時として見えにくくなりがちで、ひとり一人の人間に対する純粋で深い興味を現している。



◎ 第88・89回放送（2015年6月5日、12日）

アール・ブリュットはどこへ向かう？ その魅力と可能性について

保坂健二郎（東京国立近代美術館主任研究員）

保坂さんはこれまで、近現代芸術を専門とする一方でアール・ブリュットも研究テーマの一つに掲げ、アール・ブリュットにまつわる展覧会の企画や監修、執筆、各種委員会のアドバイザーなどを歴任。ボードレス・アートミュージアムNOMAとも親交が深い保坂さんに、これからのアール・ブリュットの広がりについて期待することを率直に伺ってみました。



◎ 第90・91回放送（2015年6月19日、26日）

「公開収録」「鳥の目から世界を見る」展 講演「鳥の目で世界を描く―自身の 制作からアール・ブリュットまで」

山口晃（画家）

放送時にNOMAで開催していた展覧会「鳥の目から世界を見る」展の関連イベントの様子をお届け。山口さんは本展の出展者であり、5月まで開催された個展「山口晃展 前に下がる下を仰ぐ」（水戸芸術館現代美術ギャラリー）では、テレビ番組でも特集されるなど、多くの方が山口さんワールドに引き込まれ、魅了されてきた。時空が混在し、古今東西の様々な事象や風俗が描き込まれた都市鳥瞰図・合戦図などの作風で知られる山口さん。今回の講演会では、自身の制作についてのお話を中心。作品のユーモラスさがそのまま講演でも発揮し、笑いの絶えない企画となった。



◎ 第92・93回放送（2015年7月3日、10日）

即興演奏が音楽の常識、障害の常識 をズラす。音遊びの会のお話から

沼田里衣（音遊びの会代表、神戸大学大学院国際文化科学研究科国際文化学推進センター協力研究員）

音遊びの会とは、知的障害のある人とその家族、音楽家などのアーティスト、そして音楽療法家たちによるアーティスト集団のこと。即興演奏を通して新しい表現を生み出すことを目的に、神戸を中心に月二回の継続したワークショップに取り組んでいる。これまで関西のみならず、多数の遠征公演も行い、また2013年にはイギリスツアーまで大成功におさめたこの音遊びの会。予定調和を許さない独特な音楽性は、見る者を釘付けにしている。プロジェクト立ち上げの経緯や、障害に対する関心など、幅広くお聞きした。



◎ 第97・98回放送（2015年8月7日、14日）

ある現代美術家の創作原点と アール・ブリュット ―パラモデル・中野裕介の場合―

中野裕介（美術家、パラモデル、京都市立芸術大学非常勤講師）

中野さんは相方の林泰彦さんとともにパラモデルというユニットで、様々な手法を用いた美術作品を、国内外の展覧会で発表してきた。そんな中野さんが制作を続けるうえでずっと心の中に生き続けている「ある存在」について、アール・ブリュットの可能性と絡めながら自由にお話いただいた。



◎ 第109・110回放送（2015年10月30日、11月6日）

「公開収録」 「これ、すなわち生きものなり」展 講演「民俗社会のなかの妖怪たち」

小松和彦（文化人類学者、民俗学者、国際日本文化研究センター所長）

NOMAでは放送時、「想像上の生きもの」をテーマにした企画展「これ、すなわち生きものなり」を開催。その関連企画としての講演会では、妖怪研究の第一人者として知られる小松和彦さんに、鬼や妖怪などの架空の生きものを通じて、日本人が古くから暮らしの中で感じてきた見えない世界との関わりや心のあり様についてお話いただいた。



◎ 第122・123回放送（2016年1月29日、2月5日）

「公開収録」対談「障害者の作品の魅力 と可能性について」

今井祝雄（美術家、成安造形大学名誉教授）
中野裕介（美術家、パラモデル、京都市立芸術大学非常勤講師）

NOMAでの展覧会「第12回滋賀県施設合同企画展 300 障害のある人の進行形」の関連イベントの様子をお届け。今井さんは2004年のNOMA開館以来、ずっとその運営を支え続け、自身の創作活動のみならず、成安造形大学でも教鞭をとってきた。一方の中野さんは現代美術ユニット「パラモデル」のメンバーであり、様々な手法を用いた美術作品を、国内外の展覧会で発表。そんなお二人が話す、「障害とアートについての関係」を放送した。



◎ 第124回放送（2016年2月12日）

梅沢富美男さん、池田明子さんに聞く、アールブリュットの魅力

梅沢富美男（梅沢劇団座長、俳優）
池田明子（一般社団法人日本ハンドケア協会代表理事、フィットセラピスト（植物療法士））

滋賀県大津市にて2月5日〜7日に開催された福祉の祭典第20回アミニティフォーラムの会場からお届け。ゲストは、梅沢劇団座長で俳優の梅沢富美男さん、そして一般社団法人日本ハンドケア協会代表理事でフィットセラピスト（植物療法士）の池田明子さんです。ご夫婦であるお二人が、アミニティフォーラムの会場で同時開催されている展覧会「Images展―アールブリュット、芸術の地平を開く―」を観覧し、その感想を語られるという企画。以前から、アール・ブリュットに関心を持っていたというお二人のお話をお送りする貴重な放送となった。



◎ 第155・156回放送（2016年9月16日、23日）

生きづらさをずらす迂回路を探ってみる―障害福祉現場の事例をきっかけに―

井尻貴子（NPO法人多様性と境界に関する研究の研究所専務局長）
三宅博子（NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所スタッフ）

今、「多様性」(Diversity) という言葉は、社会の中で大きな意味を持っている。ゲストにお迎えする井尻さんと三宅さんたちは、これまで研究者や実践者としての立場から、多様な背景をもつ人々の表現活動に関わってきた。障害のある人やセクシュアル・マイノリティなどの表現活動に携わった経験をもとに、これから目指すのは、「対話」と「境界」に関する諸問題に対して、「対話」と「表現」を通じて、新たな「迂回路」(diversion) を作ることに、だそう。では、実際、彼女たちはどのような現場に赴き、そこからのどのような具体的な対話の場づくりを行っているのか。とりわけ障害福祉現場での事例を交えながら、団体のミッションに迫った。



◎ 第161・162回放送（2016年10月28日、11月4日）

「公開収録」「楽園の夢」展トークイベント「日常の楽園〜モノを創る人々〜」

都築響一（編集者、写真家）

NOMAでは放送時、秋の企画展として「楽園の夢」を開催。その関連イベントとして開催されたトークイベントの様子をお届けした。都築さんは、これまで狭いながらも独創的な若者たちの部屋を撮影した、初の著作『「OKAYO STYLE」や日本各地の奇妙な名所を探し歩いた「ROADSIDE JAPAN」』また秘宝館やスナック、独居老人など、無名の超人たちに光を当て、アール・ブリュットやアウトサイダーアートとよばれる表現にも深い関心を示してきた。そんな都築さんならではのディープな事例紹介を通じて、アール・ブリュットに対する独自の見解が披露された。



◎ 第165・166・167回放送（2016年11月25日、12月2日、9日）

障害のある人と一緒に舞台上立つということ〜糸賀一雄記念音楽祭をきっかけに〜

小室等（ミュージシャン）
坂田明（サクソフーン・クラリネット奏者）

お二人が滋賀県で取り組んでいるのが糸賀一雄記念音楽祭。そのプロデューサーとして活動される小室さんとゲストミュージシャンの坂田明さんは、障害のあるなしに関わらずひとりの表現者と本気でぶつかりあひながら音や動きを重ねていくその姿勢について語っていた。



◎ 第177・178回放送（2017年2月17日、24日）

表現で他者と交通すること―釜ヶ崎での表現活動とゲストハウス運営―

上田假奈代（詩人、NPO法人こえとこばとこころの部屋（コールーム）代表理事）
細馬宏通（人間行動学者、滋賀県立大学人間文化学部教授）

滋賀県大津市にて開催された「アミニティフォーラム」の会場よりお届け。上田さんは表現活動を通じて就労や精神の問題などを抱える釜ヶ崎の生活保護受給者や、障害のある人、生きづらさを抱える若者たちなどの対話を始め、「釜ヶ崎芸術大学」を代表としたユニークなアートプロジェクトを実践してきた。実は上田さん、2013年の秋に番組が始まったときの初期のゲストとして出演。あれから3年。友情出演として上田さんとも旧知の仲の人間行動学者細馬宏通さんも交えて、最新の活動状況について話題を展開した。



◎ 第201・202回放送（2017年8月4日、11日）

「公開収録」講演「神様はどこにいる」

田口ランディ（作家）

NOMAでは、この放送直前まで、目に見えない世界とアクセスする表現をテーマにした企画展「HEIJO開眼」を開催してきた。その関連イベントとして田口さんは講演を行ったが、その講演タイトルは「神様はどこにいる」。社会問題、生、死などをテーマとして、多くの著書を発表する田口さんが、不可視な世界と私たちとのつながりについて語り、アール・ブリュットの魅力にも触れていただいた。



① 第209・210回放送（2017年9月29日、10月6日）

2017ジャパン×ナントプロジェクト 特集第二弾「湖南ダンスワークショップ」 のこれまでとこれから

北村成美（ダンサー、振付家）

北村さんは、関西をはじめ国内外各地で、「生きる喜びと痛みを謳歌するたくましいダンス」をモットーにダンス活動を展開。今回は2004年からナビゲーターをされている「湖南ダンスワークショップ」について紹介いただいた。知的障害のある人々とともにワークショップを重ねて創り上げる独特のダンスステージ、即興演奏を奏でるミュージシャンも参加するなど、通常の「福祉」のイメージを超えた活動は、フランスはナント市で開催される2017ジャパン×ナントプロジェクトにも参加。北村さんにこれまでの活動と、渡仏直前の意気込みを語っていただいた。



① 第211・212回放送（2017年10月13日、20日）

「公開収録」NOMA企画展 「惑星ノマ」ライブ&トーク

吉田隆一（バリトンサクソフォーン奏者、SF音楽家）
田所友香理（大津ワークショップ（打楽器））

NOMA企画展「惑星ノマ」の関連イベント、「惑星から鳴る音（吉田隆一×田所友香理）」をお届け。バリトンサクソフォーン奏者であり、「SF音楽家」を標榜するジャズミュージシャン吉田隆一さんと、滋賀県内の障害者福祉施設で実施される打楽器ワークショップに参加し、パワフルなパフォーマンスでほかを圧倒し、糸賀一雄音楽祭でも活躍の田所友香理さんによる、異色のフリースタイルセッションからスタート。プロアマ、障害の有無、そういったボーダーには一切囚われず、音で話し合う。そんなお二人の音楽の会話は、私たちの耳に未知なる星で生まれた音として鳴り響いた。後半のトークの聞き手は本展担当の山田創。



① 第228回放送（2018年2月9日）

キュレーター公募企画展 「アール・ブリュット 動く壁画」 辻智彦インタビュー

辻智彦（カメラマン、本展キュレーター）

この展覧会のテーマは4Kカメラで超高精細に撮影された作品の映像により、アール・ブリュットの作品を巡る視覚体験を生み出すとともに、作品そのものに内在する「動き」を発見すること。驚きの「動く壁画」を体感していただくこの展覧会を手がけるのは、公募で選ばれたカメラマンの辻智彦さん。映像畑の彼がなぜアール・ブリュットに関心を持ち、なぜ展覧会を企画するまでに至ったのか。本展担当の山田創も交えて、鈴村りえ現地リポーターがお送りした。



梅木鉄平
《テーブルの造形》
制作年不詳

3

作家インタビュー



新万里絵
《薬戸さん人形》
2014年

紙の上の私の風景と日常の風景

「アール・ブリュット作家鮎万里絵さんに聞く

鮎万里絵（アール・ブリュット作家）

長野県で作品制作を行うアール・ブリュット作家の鮎万里絵さんをゲストにお迎え。鮎さんは、乳房や缺、性器などのモチーフと、それらの間を埋め尽くす反復的なパターンが特徴的な絵画作品を制作されている。ときにエロティック、ときに暴力的でもある彼女の作品は、一方でどこかユーモアも感じさせる。鮎さんと親交のある田端一恵現地リポーターが、スタジオで聞き役となった。



鮎万里絵（すずき・まりえ）
1979年長野県生まれ。2008年、第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会の「アートはボーダレス」と題した全国公募に応募。500人以上の中から選ばれた13人による展覧会「独創羅列」（滋賀県立近代美術館）に選出。これを皮切りに、2010年パリ市立アル・サン・ピエール美術館で開催された「アール・ブリュット・ジャポネ」展のほかオランダやロンドン等での海外展、2011年にはNO-MAで個展「雑々異々、紙の上の私の風景」等、日本のアール・ブリュットとして国内外で多くの展覧会に出品。また、2010年に新日曜美術館へのゲスト出演、2013年には厚生労働省と文化庁の共催による懇談会の構成員、そして、2014年には地元長野の信毎文化事業財団による第19回信毎選賞を受賞されるなど様々なシーンで活躍。

日々の暮らしと趣味の旅

田端 鮎万里絵さんの作品は、足や乳房や缺、そして大人と子どもとどちらともつかない顔などがアウトラインとして描かれて、その隙間をドットや網目模様などで、綺麗で緻密なパターンで埋めているというのが特徴です。展覧会「これ、すなわち生きものなり」ではベッドの敷板に描かれた作品や、紙面に展開されている世界が人形として立ち現われているような立体作品などを出展しています。

まずは万里絵さんの日常についてお聞かせいただきたいと思えます。万里絵さんは会社員の顔もお持ちですけれど、どんな会社でどんなお仕事されていますか。
鮎 道路を作ったり、下水道を引いたりするような建設屋さんの事務のお手伝いのようなことをしています。
田端 メインとなってるその業務ってすごい幅広いのでしょうけど、例えば今週は何をされましたか。

鮎 今週は産業廃棄物の書類の作成をひたすら。作成というか住所と名前を入れてみたいな、そんな感じですよ。産業廃棄物を処理するにあたって、こういうゴミをこれだけ出してこういう業者さんがどういう処分場を持って行ったみたいなの記録をつけていく、みたいなこともしました。

田端 今、会社の話を聞きましたけども、万里絵さんと言えばということで、会社以外のお休みの日の過ごし方に関して質問をしたいんですけど、今ここ京都ですけれど、ここまでどうやって来られましたか。

鮎 今日はいつものルートって呼んでるやつですね（笑）。特急で名古屋に出て、名古屋から米原まで新幹線、あとは琵琶湖線でゆっくりきました。

田端 ゆっくり来ていただいたんですね。名古屋から長野は特急しなの号という振り子式の電車なのでなかなか揺れる。万里絵さん電車が実は好きですよ。

鮎 電車に乗るのが好きですかね。
田端 電車の旅と言えば今年の夏、長期戦の電車旅をされてましたよね。どんな旅かご紹介ください。すごくお得な切符を使ったそうですね。

鮎 はい。7日間、主に普通列車乗り降り自由の切符を見つけてまして、使ってみたいなと思って。日本海側の東北って全然知らなくて、父方の祖父が山形出身だったりするけど、あんまり行ったことがなかったから、それでずーっと日本海側の鉄道をトコトコ乗って、北は函館まで行ってしまいました。

田端 函館まで行って、帰りは太平洋側で帰ってきた。鮎 盛岡からは新幹線で一気に帰ってきました。大宮まで。そこから長野までは新幹線です。

田端 その7日間の旅で、何か印象に残っている景色とかありますか。

鮎 うーんと、そうですね、最初函館は行く予定じゃなかったんですけど、旅の途中でこの切符に特急券足せば行けるんだなと気がついて。行ってみると、真夏なのに大そう向こうが涼しかったのに驚きました。さすが北海道だなって。

田端 万里絵さんと言えば国内を電車で旅するだけじゃなくて、作品が海外でも展示され、その度に割と展示されているところに行つてらっしゃるじゃないですか。パリ、オランダやスイス、ロンドンなど。今まで行った中で、印象深い国ってありますか。

鮎 うーん、何か外国に行くときは、必ず具合が悪くなるのでいつもあたふたしてるんですけど、国が印象に残るっていうよりは、出来事やこういう人に会つたって方が何となく残りますね。

田端 なるほど。多分今その頃のことを思い出してると思うんですけど。面白話とかないですか。

鮎 そうですね、私はどこか施設に所属してるわけじゃないって旅に参加しているときは一人だったり、母と一緒にだつたりするんですけど、愛成会さんの職員さんと一緒にいるんです。その方が絶対ってことはないけど、ほぼ確実に、部屋に鍵かけないで一緒に行かれた利用

者さんのお風呂介助とかされて、それが面白いです。

部屋番号が分からなくても泊まっている階さえ分かれば、行ってみれば開いてるので、よく遊びに行つて喋ったりしてそれが修学旅行みたいで楽しいです。

田端 私も国内のあちこちで旅にご一緒してますけど、まち歩きって万里絵さんも好きだと思ふんですけど、万里絵さんのまち歩きの楽しみ方ってあったりしますか。

鮎 えーと、気になる道とか気になる路地があったら我慢しないで入る。ときにわざと道に迷います。

田端 私もふと気になったら、万里絵さんちよつと疲れてるかなと思いがらも「行きますか？」と聞くと絶対断らないですよ。『行きましょう！』って感じでもんね。あちこち路地も歩きましたね。万里絵さん、旅に行けば旅行の思い出のスクラップブックみたいなものを作ったり、すぐお手紙をまめに書かれますよね。

鮎 そこまですごくまめではないと思ふんですけど、お手紙を書くのは好きな方だと思います。

改めて、制作インタビュー

田端 そろそろ万里絵さんの絵を描くということについて聞いていきたいと思うんですけど。万里絵さん、

学生時代には美術部にも所属していたことがあるって聞いたんですけども、今のようなスタイルの絵を描き始めたのっていつ頃からか覚えてますか。

鮎 多分8年くらい前からじゃないですかね。

田端 2007年。いろんなメディアなどでは、ある日突然描き始めたみたいにセンセーショナルに紹介されたりしますが、それを聞いてどう思いますか？

鮎 それはそういうふうにする人の表現だからいいんじゃないですかね。

田端 万里絵さんの作品の多くはスケッチブック、いわゆるイメージした通りのサイズのスケッチブックなんですけど、1枚描くのにもどれくらい時間がかかるんですか。

鮎 そうですね、その時の体調や調子にもよるんですけど、1週間ぐらいで終わることもあれば、1ヶ月かかってしまったこともあります。

田端 先ほど、スケッチブックの作品はどれくらいで描けますかっていう話をうかがいましたが、描いてる画材、あれは何を使っておられますか。

鮎 いわゆるマーカーペンです。お気に入りのマーカーを使っているというより、耐久性のだったらいいかなって。前は油性を使っていたんですけど、油性はちょっと、みたいなことを、母の知り合いに言われたんです。

田端 万里絵さんのお母さんも絵をお描きになられるんですよね。そういうこともあつて詳しい方が周りに割といらっしゃる。

鮎 なんか外野のやじが飛んでくるみたいな。それで、耐久性のマーカーペンに変えました。どれくらいの時間、何年持つとか分かんないけど、油性よりはましなんじゃないかなと思つて、言つて下さった方にちゃんとそういうふうに変えましたよって。

田端 絵の画面一杯に広がるあの世界はどういうふうには展開していくんでしょうか。例えば頭の中にもう全体が浮かんでいて、それを紙面上に落していくことなのか、描いているうちにその世界ができあがっているという感じなのか、どんな感じであの紙面はできていくんですか。

鮎 あんまり、はっきり浮かばない部分ってあると思うんですけどね。なので、一番ははっきりしたところから描いてく感じですかね。説明がうまくつかない。

田端 それ体験してみたいな。じゃあ逆に、できあがつた時にイメージと違つたっていうことってあるんですか。

鮎 やっぱりはっきりしてないから別に何ができてもいいんじゃないかなって。

田端 なるほど。足とか乳房とかそのモチーフが何パ

ターンあるか、万里絵さん自身も分かんないと思うんですけど、ドットが多いですかね。すごくいろんなパターンがあると思うんですが、あれは何かに着想得るってあるんですか。

鮎 あと、昔から丸よりは三角の方が好きな気がしますが。よく覚えてるエピソードだと、幼稚園でクッキー作りまして丸く作るんです。丸だとどれが自分の焼いたクッキーか分かんないじゃないかと思って、三角に作って「それじゃだめでしょう」って怒られた。1回目は三角で通ったんですけど、焼きあがったものが手もとにきたら丸だったので、必ずしもどんな形にやっても、自分の手もとに来るとは限らないです(笑)。**田端** それを幼稚園時代から工夫してたんですね(笑)。ほかの人と混じらないようにというか自分のものって分かるようにして。

鮎 えーなんででしょうね、生きづらいというのは子どもの頃から感じていて。なんとなくそれでもやっていこうとはしていたと思います。

田端 いろいろと生きにくさを感じている中でも、何とか工夫したりその場にいようという感じでやってきたって感じですかね。作品の中で、万里絵さんの中でこの作品気に入ってるなとか、思い入れがあるなって感覚はあるんですか。

鮎 ありません(笑)。思い入れがあるとかはないですけど、描いている時にこういう人がやってきたとか、こへ遊びに行った時に描き終ったとか思い入れならぬ、思い出は、あります。

田端 絵を観るたびにこんなことがあったなとか、日記帳代りみたいな。そういう思い出が一枚の中にいっぱい入っている作品ってありますか。その絵を描いている時に、いろんな出来事が起きたとか。

鮎 そうですね、去年描いてた絵。描いている間に代島さんが取材に来られました。

田端 映像作家の代島さん。このラジオにも以前出ていただいた時、代島さんも万里絵さんの話をしていました。

鮎 代島さんが描いている間にいらっしやったなあっていうのと、同じ絵が描き終らないうちに今度は母が大げがをしました。脚立から落ちまして、大変でした。

田端 骨折をされたんですね。第一発見者で、救急車呼んだのも万里絵さんだったんですね。それはだいぶインパクトのあることですね。

鮎 そうですね。その後母の入院とかもあったので、ずーっと絵が描き終らなかつたです。時間がかかったというのと、いろんな出来事があつたということ。それは思い出深いですね。

1 1958、埼玉県生まれ。映画作家・プロデューサー、有限会社スコブル工房代表。2006年から国内のアーティスト・ブリュット作家16人の記録映像を撮り続け、2008年に5枚組DVD「日本のアウトサイダーアート115」、そして2014年には、記録映像「アール・ブリュットが生まれるところ」を発表。最新監督作品に「三里塚のイカロス」。

田端 ちなみにその作品には何とタイトルがついてますか。
鮎 思い出せません。

タイトルのつけ方

田端 タイトルは描き終った後につけるっていうこと聞いたんですけども、その作品のタイトルのつけ方を聞きたいなと思います。だいたい初期の作品だったと思うんですけど、何でしょう、ダルマ落しみたいになちよつとユニークなキャラクターが何個か顔を重ねているみたいな作品に「勝手に動かすな」というタイトルがついていたと思うんですけど、例えばこれはどんなところからついたんですか、って万里絵さんもう笑ってますけども(笑)

鮎 うちの父親の口癖です(笑)。母に対してよく言ってますね。

田端 絵とは直接関係ないんですね。

万里絵さんのお父さんってすごい多趣味でね。私も何度かお家にお邪魔しましたけれども、マンドリン・クラブですか、あとギター弾いてる姿もお見かけしましたし、ある時はテニスに出かけるって出かけていました。「勝手に動かすな」はお父さんの口癖なんですね。

鮎 はい。

田端 もう一つ、乳房がいっぱい並んでいてしぶきがぶあーつといっぱいあがつているような、色合いでいうと全面ピンクと赤って感じの作品があつて、タイトルは「続く(半覚醒の低空飛行)」とついています。これは作品を観ていると、あの中を低空飛行して漂つたら気持ちいいなって感じがするんですが、これはどうやってつけたタイトルですか。

鮎 描き終ってから思い出したのですが、小さい頃はこの絵に似た景色を低く低く飛んでる夢を見たことがあるなって。明け方に見てたんですけどちよつと目が覚めて、家の天井だなどと思って目を閉じると、またその夢を見れるってことが一度だけあつたんです。それを思い出しました。

田端 続くってことは、一回起きてまた寝ると続きが見れること?

鮎 はい。

田端 描きあがつた絵を見て、そういうことを思い出し、絵に直接つながるようなタイトルがついたと。本当に1個1個どうやってついたので聞きたいぐらいです。万里絵さんは疲れるでしょうけど、いつかそんな企画もできたらいいなと思います。

田端 今回の展覧会にはスケッチブック作品ではなく、別の作品が出ています。「泥の中のメモントモリ」という作品、あれはなんでベッド板に描かれたんでしょうか。NHKの日曜美術館に出られたときはすごい紹介のされ方でしたね。万里絵さん、今にやにやしてますけども(笑)。あの中では止むに止まらず布団とか剥がしてベッド板に描いたぐらいの勢いで紹介されています。実際はどうだったんですか。

鮎 使わなくなったベッドのベッド板です(笑)。

田端 せっかくもらったし、使わなくて置いてあるのももったいないなということでしたっけ。

鮎 一回画材屋さんへ持って行き、このベッド板に紙を貼れませんかって聞いてみたんですけど、ちょっと難しいってことでそうかあと思つて持ち帰ったんです。じゃあ板に直接描いてもいいんじゃないかと思つて。ダメもとで描いてみました。

田端 敷板2枚分で大きい作品です。私単純に思うに結構ペンを使ったんじゃないかなと思つて。紙より木の方がインクをすごく吸いそうなイメージがあるんですけど。そうでもない？

鮎 もう覚えてないんですけど。

田端 だいぶ前の作品ですもんね。最初は、アール・ブリュットの作家さんって止むに止まれぬ衝動で描くって紹介のされ方をするので、そうなのかと勝手な想像で、夜中に起き出して描かずにいられなくなったのかなと思つたんですが、ご本人に聞いたらそんなことはなくて面白かったです。

もう一つ人形の作品が出てますけども、6体ですかね。これはどうやって誕生したんですか。

鮎 5年程前に人形を作ってみようかと思つて二つ作つて、その後しばらくは作らなかつたんです。去年いだけき物をしたんです。瓶の中に奈良漬。その奈良漬を食べ終わつてお返しに何かと思ひました。その瓶は奈良漬のおいでで充滿してお返しの品に食べ物が入れられないなと思つた。人形を詰めたら面白いかなと思つて、多分こういう人形を贈つても怒らないだろうという相手だったので、なんとなく作ってみました。久々に作りました。

田端 なんとなくで思いつく発想が面白いですよ。瓶の中にギュッと入った状態で届いていました。人形は定期的に作っているものではなく、何かのきっかけがあつて、思いついたら作るみたいな感じですか。

鮎 気が向いたらですね。

田端 最後に、いろんなインタビューで聞かれると思

うんですけど、万里絵さんにとって絵を描くことってどんなことですか。実際、万里絵さんが描かれている姿を脇で見せてもらうと、さて描くぞ、みたいなことでは全然なく、いつの間にか自然と、さらさらと描き始めるイメージがあるので。すごく答えにくい質問だと思いますんですけど。

それと、展覧会に絵がどんどん出品されたとしても、普段通り過ごしていくことが大切とおっしゃっていますが、万里絵さんが普段と変わらない生活を保つために工夫していることがあればお聞かせください。

鮎 絵を日々の生活の中で描くこと、描く時間があつて

良かったなということが何となく救われていくような気が普段からしています。

田端 以前に、この描くことがあつてよかつたところから、生きにくさを感じてた、とおっしゃってましたけど、それを少し和らげてくれる感じというのはあるんですか。

鮎 そうかもしれないです。

田端 いろいろとお話を聞かせていただきました。ありがとうございます。

鮎 ありがとうございます。

アサダポイント

インタビュアーとインタビュイーの親密な関係性の中でとても心地の良い、肩肘の張らない放送になったと思う。万里絵さんの日常を構成する出来事を知ること、アール・ブリュットとして紹介される作家が誰一人として同じような「人知れず」「衝動のまま」描いているというイメージのみでなく、制作行為をその日常に根付かせている様子を知れる、とても貴重な内容となった。

創作ビレッジこるり村 西村一幸の制作現場

西村一幸(創作ビレッジこるり村)
島田和典(創作ビレッジこるり村施設長)

滋賀県蒲生郡竜王町にある創作ビレッジこるり村を訪ね、そこで制作を続ける西村一幸さん(1939生)の現地レポートをお届け。

西村一幸さんは、2015年2〜3月に開催された、「シガカラー Stage Color」展(近江八幡・旧伴家住宅)の出席者のお一人。植物のような、イソギンチャクのような形、かつ綺麗なグラデーションで色付けされたこの作品は、たくさんの方の目を引き付けた。このモチーフとなっているのは、ピラカンサ。ピラカンサは生け垣などにも用いられる低木である。

創作ビレッジこるり村の島田和典施設長から、事業所の特徴や西村さんの普段の制作の様子をお聞きした後、西村さんご自身にお話を伺った。取材で訪れたこの日は、写真を見ながら彦根城を描かれていたが、彦根城も西村さん仕様になっており、ユニークな作品だった。

西村さんは京都駅近隣の倉庫会社にお勤めされるなど豊富な職歴を持ち、また、脳に受傷された過去があるが、新聞を写す等、自身独自でリハビリにも取り組み、徐々にできることが戻ってきた経験を、喜びも交えて語ってくださった。

ピラカンサを描くようになったのは、西村さんが描いた絵に、余白が多かったことに気づいた職員に「花でも描いてみてはどうですか」とアドバイスされたことがきっかけ。さらに、ピラカンサを描いた理由は、こるり村からの外出の際に車窓から見た、とある工場前に植えられたピラカンサの美しさ。「なんて綺麗なんだろう。いいなあ」と見とれたのだそう。そう



思っていたこともあって、パツと思いついて描きだしたそうだ。

ピラカンサを見た時の感想を語る西村さんの言葉から、実際の情景が浮かぶようなお話だった。また、ピラカンサへの深い感動も伝わってきた。自身の、受傷からの快復の喜びを語られた時同様、伺っているこちらも嬉しさがこみ上げるほど。絵だけでなく、話すという表現力も持ち合わせておられる西村さんのお話はとても魅力的だった。

「第12回滋賀県施設合同企画展」滋賀県立信楽学園

谷本達哉(出展者(滋賀県立信楽学園))
湧井康貴(滋賀県立信楽学園児童支援員)

第12回滋賀県施設合同企画展の出展者の谷本達哉さん(1998生)が所属する滋賀県立信楽学園からレポート。信楽学園では15〜18才までの主に知的障害のある児童が、3年間の職業訓練と寮生活を通して生活力と社会性を育んでいる。今回はその施設の訓練の中から派生的に生まれた作品を出展した谷本達哉さん取材した。

谷本さんが出展したのは、紙製のフラットファイル。元々「作業日誌」を綴るためのファイルだったが、ファイルそのものがたくさん文字や数字で埋め尽くされている。内容を見ると、メモのようでもあり、作業中の態度や成果を得点化するルールを描いているようでもあり、スケジュールが書かれていたり、気持ちのようなものが書かれていたり、一部イラストもあったり。一見乱雑に見えるが、一つ一つの文字は上手な字だ。

このファイルの秘密を谷本さんご本人にいろいろとお聞かせいただいた。取材に緊張され、普段に比べるとあまり喋らない状況だったそうだが、それでも質問一つ一つに丁寧に答えてくれた。

作業へ取り組む姿勢や振る舞いに応じてポイントが得られたり、減ったりする「得点表」なる仕組みを谷本さんと職員とで作り、それを書き込んでいくということや、ふと谷本さんが思いついた架空のドリンクや、その場で交わされていた言葉等が書き込まれているということをお話いただいた。

普段、谷本さんの作業を担当している職員の涌井さんからも、この「作業日誌」が生まれるに至った状況などを伺った。信楽学園を利用し始めた



頃は早く信楽学園から出たくて、このポイントを貯めて信楽学園を退所するという思いだったそう。そこから3年間を経ていよいよ園を出るわけだが、その気持ちを尋ねると意外にも「普通です」と言う答えが返ってきた。「作業日誌」ファイルが作品として飾られる展覧会、誰と一緒に見に行きたいですかと聞くと、「信楽学園のみんな」とのこと。飾られている作品の前に、園のみんなに控えめながらも自慢する谷本さんの姿を想像した取材だった。

「第13回滋賀県施設合同企画展」彦根学園

徳山彰(出展者・彦根学園)
本郷明日香(彦根学園生活支援員)

第13回滋賀県施設合同企画展の出展者の徳山彰さん(1939生まれ)が日中活動されている彦根学園からレポート。彦根学園は19〜80歳の男女で合わせて100名の方が生活している。徳山さんは、生活は近くのグループホームで、日中に園へ来られて作業班で、粘土作品作りをしている。

—徳山さんは今展中の陶芸作品で、車、人、電話、いろんな形の作品を作っていますが、形はどうやって思い浮かべますか。

頭の中で思い浮かべながら作っていくんですよ。作る前日から考えている。前は見えていたので、その時のことを思い浮かべながら。今日はブランコをつくりました。公園で遊んでいた思い出です。10歳くらいの時かな。

—粘土作品をつくることは子どもの頃からやっていたのですか。

粘土はそんなに。大阪の旭区に児童施設があって、僕はそこに入っていた。絵を描いたり、工作したりしていました。昔から作ることは得意でした。

—ボーダレス・アートミュージアムNOMAで徳山さんを講師にした粘土のワークショップが開かれましたが、そういう経験はありましたか。

それは初めてやわ。結構来てはったね。その時は、グラッドピアノと、軍艦を作りました。昔、舞鶴で軍艦を見たのを思い出して。軍艦を見たのは、15、6歳の頃かな。

—園で作品を作るときに、あ、これが作りたいなと思いつくことがありますか。

それはあります。昔のちんちん電車とかね。車作るときも車輪が回ったり、本物に近くなつたらいいな一と思ってる。

—なぜそこまで本物のようにしたいと思えますか？

やっぱりかっこいいなあ、すごいなあと思う。僕にもこんなんできるんや一と思う。

—最初に粘土を使ってやってみない？と言われた時、どうでしたか？

いいよ。という感じ。初めはお茶碗、お皿、花瓶とか作っていた。粘土作りに慣れてからほかの物を作るようになった。

—グループホームの空き時間では何をされていますか。

言うの恥ずかしいけど、昔の古いレコードから入れたCDを聞いています。岡晴夫さんとか、東海林太郎さん、藤山一郎さんとかね。一緒に歌ったりもしています。



第33・34回放送(2014年5月16日、23日)

細馬宏通と訪ねる アール・ブリュットが生まれる現場

その1(やまなみ工房編)、その2(古久保憲満さんアトリエ編)

細馬宏通(人間行動学者、滋賀県立大学人間文化学部教授)
早川弘志(やまなみ工房主任支援員) 竹中克佳/吉川秀昭/井上優(やまなみ工房)
古久保憲満(アール・ブリュット作家)

アール・ブリュット作品には、制作における「行為」とその結果立ち上がる「作品」の境界線、ボーダーについて考えさせられる間いがたくさん含まれているように思える。アール・ブリュット作品が生まれる現場をたくさん見てこられた細馬さんと共に、第33回では滋賀県甲賀市のやまなみ工房(写真上)を、第34回では滋賀県東近江市の古久保憲満さんの自宅のアトリエ(写真下)を訪ねた。



第52回放送(2014年9月26日)

「現地レポート」 すべてはもったいないから始まった 「快走老人録Ⅱ」出展作家 白井貞夫インタビュー

白井貞夫(出展者)

NOMA開館10周年特別企画展「快走老人録Ⅱ」老ヒテマスマス過激ニナル」の出展作家のインタビューをお届け。箸袋やタバコのパッケージ、こけしなどの収蔵庫をもち、日常品を何でも集めているコレクター白井貞夫氏(82歳、滋賀県近江八幡市在住)のご自宅を訪ね、近江八幡のまちとの関わりも含めお話を伺った。



④ 第53回放送（2014年10月3日）

「現地レポート」
誰もやっていないような面白いことをやろう！
「快走老人録Ⅱ」出展作家小西節雄インタビュー
小西節雄（出展者）

NOMA開館10周年特別企画展「快走老人録Ⅱ―老ヒテマスマス過激ニナル―」の出展作家のインタビューをお届け。スイカをカラスから守ろうと作ったかかしが評判になり、屋根に座るかかし、ビールを飲むかかしなど、ユニークでリアルに満ちた作品で周囲を不思議な世界に誘う小西節雄氏（67歳 滋賀県東近江市在住）のご自宅を訪ねた。



④ 第95回放送（2015年7月24日）

「現地レポート」「鳥の目から世界を見る」展
出展作家山田美智子の制作現場
山田美智子（出展者（やまなみ工房））
神山精二・神山よりへ（山田美智子さんご家族）
牧原里佳（やまなみ工房支援員）

NOMAの企画展「鳥の目から世界を見る」に出展の山田美智子さんにインタビュー。山田さんが制作する滋賀県甲賀市のやまなみ工房のスタッフや、ご両親にも彼女の日常の様子を聞き、彼女の作品がいつどのように生み出されてきたかを垣間見る機会となった。



④ 第117回放送（2015年12月25日）

「現地レポート」「第12回滋賀県施設合同企画展」
滋賀県立三雲養護学校

羽賀詢（出展者（滋賀県立三雲養護学校））
筒居正幸（滋賀県立三雲養護学校副校長）
村尾敏則（滋賀県立三雲養護学校教諭）

滋賀県立三雲養護学校の創作現場よりレポート。NOMAで開催された「第12回滋賀県施設合同企画展」の出展者である羽賀詢さんは、自身が通っている三雲養護学校で干支をテーマにした動物のイラストや毛糸でできた不思議な生きもののオブジェなどを創作されている。羽賀さんと彼を支える同校の村尾敏則さんとお話を伺った。



④ 第144・145回放送（2016年7月1日、8日）

「公開収録」
鮎万里絵展オープニングトーク

鮎万里絵（出展者）

「NOMAコレクションPart2+新作展」鮎万里絵 遠くて近い私の風景」展のオープニングトークを公開収録。作者の鮎万里絵さんご自身によって語られる、作品制作にまつわるお話。鮎さんと日常的にも親密な交流を続ける田端一恵現地リポーターが聞き手となってお届けした。



【現地レポート】

「第13回滋賀県施設合同企画展」杉山寮

柿本健(出展者(杉山寮))
玉木敦子(杉山寮生活支援員)

滋賀県高島市にある杉山寮よりレポート。NOMAで開催された「第13回滋賀県施設合同企画展」の出展者である柿本健さんの制作現場を紹介した。杉山寮では、さき織りの作業や、施設の周辺からツルなどを取りに行き、リース作りをされている。また、絵画制作も行う柿本さん。毎日の制作活動や、出展作品について柿本さんにお話しいただいた。



【公開収録】

『KOMOREBI』展 出展作家トークセッション

田湯ひろみ(出展者田湯加那子さんのご家族)
平野智之(出展者(トリエL'Amour所属)) 朝比奈益代(トリエL'Amourスタッフ)
小林瑞恵(KOMOREBI展キュレーター、社会福祉法人愛蔵会副理事長兼アートディレクター)

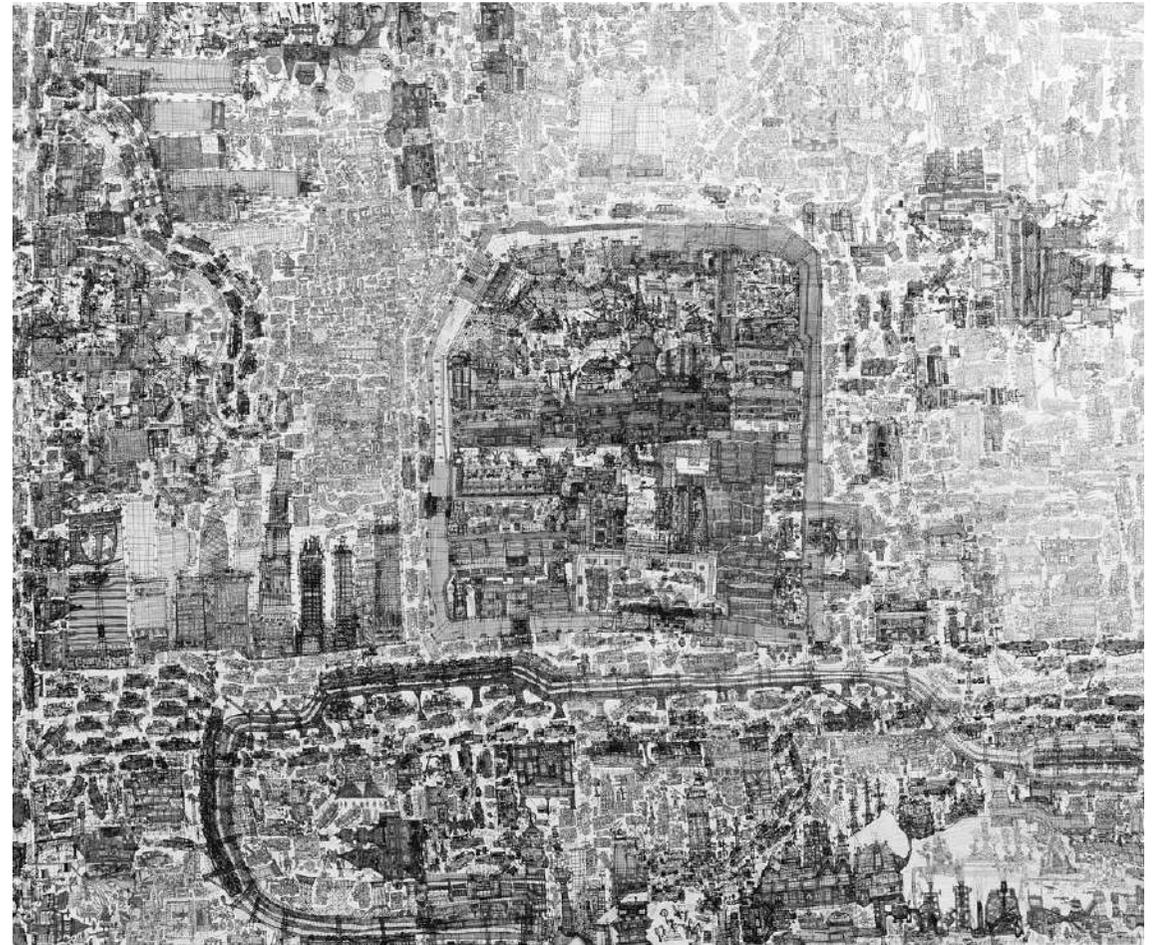
大津で開催された「アール・ブリュットネットワークフォーラム2018」でのトークセッション「日本のアール・ブリュット『KOMOREBI』展について」の公開収録の様子をお届け。2017年10月にフランス・ナント市で開催された日本のアール・ブリュットの展覧会「KOMOREBI」展に出展された作家、家族、支援者が展覧会に参加した状況について語った。



徳山彰
《警官》
制作年不詳

4

「障害」の見方を変える多様な視点



古久保憲満
《オレゴン州の街》
2013年

聞き書きを通じて出会いなおす （高齢者介護の現場から生まれる表現）

六車由実（デイサービス「すまいるほーむ」管理者、民俗研究者）

六車さんは、大学教員の仕事を経験したのち、2009年から静岡県の特別養護老人ホームの介護スタッフとして働き始めるという異色の経歴の持ち主だ。彼女は、民俗研究者として培った「聞き書き」という行為を、高齢者が集う介護現場で実践。ひとり一人の記憶を丁寧に聞き取りながら、一冊の「思い出の記」を書き上げ、それらを家族や支援者と共有する。そういった「介護民俗学」とも言える取り組みを提唱している六車さんのお話を、アール・ブリュットとも絡めながら、展開した。



六車由実（むぐるま・ゆみ）
1970年静岡県生まれ。民俗研究者。デイサービス「すまいるほーむ」管理者・生活相談員。社会福祉士。介護福祉士。2008年に東北芸術工科大学准教授を退職し、静岡県東部地区の特別養護老人ホームの介護職員に転職。2012年10月から現職。「介護民俗学」を提唱し実践する。著書に『神、人を喰う』（第25回サントリー学芸賞受賞）、『驚きの介護民俗学』（第20回旅の文化奨励賞受賞、第2回日本医学ジャーナリスト協会賞受賞）など。

関係性を編みなおす「聞き書き」の可能性

アサダ 今回僕は現地リポーターの田端一恵さんと共に、六車さんたちの現場である静岡県沼津市のすまいるほーむの現場にきています。そこでの1日を終えた後にこうして収録しているわけですが、改めてお疲れのところありがとうございます。六車さんは執筆をされたり、デイサービスという現場でお仕事されたりとか、かなり多忙なんですけど、いきなりですがなぜ民俗学を研究された後に介護現場に関わろうって思ったのか、教えていただいてもよろしいですか。

六車 はい。まず介護現場に関わろうっていうのは「よし！ここで民俗学をやるよ」と思ってではないんですよ。というよりは、いろいろ体調崩して大学を退職してしばらく沼津の自宅で療養してたんですけど、じゃあ次のお仕事を何にしようかなって思ったときに、ハローワークで失業保険をもらうためには、3カ月後に辞めてから行かなきゃいけないじゃないですか。何か就職活動をしたくないもたえなないんで、って考えてたときに、「ホームヘルパー2級の講習があるから行ってみたらどうですか？」っていうふうなお誘いを受けたというか。

アサダ ものすごく今、普通の話を（笑）

六車 そうです。普通のね（笑）ただ、そこに対して

私がそうですよねと思えたのは、やっぱりそれまで民俗学をやっていた、色んな地域に入ってお年寄りの話を聞いてきたわけですよ。だから何かお年寄りに関われる仕事があったとは思ってましたよね。

アサダ なるほど。それで実際、特別養護老人ホームに勤められて、日々いろんな介護を学ばれて実践されていくわけですよね。その中で今、このプロフィールの中にもあった、「聞き書き」という活動をされていますが、これってどんな感じなんですか。

六車 聞き書きって民俗学者にとったら、なんと面白い話が出たら、癪みたくないものなんです。何か面白い話が出たら、聞かないわけにはいかない。私いつも手元のバックの中にメモ帳とボールペンがあって、思わずこう出しちゃうっていうね。だから、前の特養に勤めるときにも、本当は多分そんなことやってる場合じゃないかと思ったんですけど、だって隣でなんかいきなり面白い話始めたら「ちょっと待って！」ってなるじゃないですか。それを始めてみたんですけど、周りの職員からしたら、「あんた何やってんの？ 仕事しなさいよ」ってことになる。でもね、改めて考えれば私たちは目の前にいらっしやる利用者さんについて何も知らないんですよ。例えば介護度5とか4とか、あるいは症状として片まひとか、そういうのはもちろん「情報」としては入っ

てきているし、目の前にいるから分かるんだけど。でも、じゃあこの人がどういう「人生」を歩んできたかってことはほとんど知らないわけ。

アサダ 書籍の中にも書いてらっしゃったと思うんですが、介護現場でよく回想法で、昔どういうふう生活を送ってたかを利用者さんがお話しされるっていうことはあると思うんですけども。そういうものともまた全然違うんですかね、聞き書きっていうのは。

六車 そうですね。最初は回想法との違いってのは分からなかったんですけど。でも、その回想法も勉強すると、すごく違和感を感じたわけですよ。結局何のために回想法で話を聞くかっていうと、その利用者さんが、例えば認知症の方であれば認知症の症状がいかに穏やかになっていくとか、あるいはちよっと進行が遅れるとか、そういうことを目的としてるんですね。利用者さんがどういふふうに変化するかってことのために聞いているわけです。

でもそれって利用者さんに対する職員の関係が、やっぱり上からの関係にどうしてもなってしまう。現場そのものがいつだって「してあげる立場」になるじゃないですか。だから常にそういう関係に固定されちゃうんですよ。それはすごく恐ろしくて。私自身がどうしてもこういうふうな立場で上からの目線になってしまってる、

そのことがやっぱり怖いなって思っただけですよ。

だけど、自分が民俗学でやってきたような聞き書きでは、その関係性が実は逆転してるんだっていうことに、後から気が付いたんです。結局私は何のために聞いているかっていうと、その利用者さんの変化のために聞いているわけじゃなくて、その話が面白いから聞いているんですね。もちろんその人の人生を知りたいから聞いているんだけど、そうすると私はその人の人生を知らないから「教えてもらおう立場」にいるわけじゃないですか。だから立場としては絶対的に利用者さんの方が上にあるわけですよ。「お前はそんなことも知らないのか」っていう感じで、お話を聞かせてくれる。

その一瞬変わる関係性ってすごく自然というか。あるべき社会かな、みたいな感じに思えた。だからこれもやっぱり今まで介護現場で行われてきたような、回想法とかあるいは傾聴っていうのとは分けて考えるべき聞き方じゃないかなって思っただけです。

アサダ そういう様子っていうのは、徐々に介護の現場の中では共有されていったんですか。

六車 それがとても難しくって。前にいた特養ではそうしなかったんですけどなかなかできなくて。でも例えば、「このAさんについての思い出の記ですよ」って形でまとめたときに、同じユニットの職員さんが読んでくれて

「Aさんこんな人生だったんだね」っていうふうな気づきはありました。だからといって「じゃあみんなで聞き書きをしていきましょう」とか、聞き書きの面白さみたいなことを共有できたかっていうと全然そうじゃなかったですね。

アサダ でも、聞き書きそのものが、みんなが見れる1冊の本になる。そうなったときに、ある意味ではとても分かりやすい。それはほかのスタッフさんもそうだし、利用者さんのご家族が見られていろんな感想が出てくるっていう感じもあるかとは思いますが。だって近くで接していたけど「こんなこと経験していたなんて知らなかった」っていうこともあるんじゃないですか。

六車 そうですね。家族のほうが逆に自分の親について知らないってことはたくさんあるんですね。それは家族によって様々で、例えば、認知症の利用者さんにお話を聞いて、それをまとめたものについては、お嫁さんがそれを読んで、うちのお母さんがこんなに認知症が進んじやっただってということが分かってショックだったっていう。

アサダ なるほどね。そういう反応あるんだ。

六車 ここが違うとかって赤ペン入れられたりも。でもそれは今のお嫁さんとその方との関わりの中ではそういうふうにしか捉えられないのは仕方がないかなって

思っただけです。でも、例えば同じ方ではないんですけど、思い出の記を書いて差し上げた方が1年後ぐらいに亡くなったんですよ。お嫁さんはその方の思い出の記を、生きてる間には読めなかったそうなんです。客観的に読めないっていうか、どうしていいか分からないいな。だけど、亡くなってお葬式のとときに葬儀社の人に抜粋して読んでもらったそうなんですよ。「改めておじいさん、すごい人生歩んできたんだな」と感じるものがあつたと感想をいただいたことがありました。だから、その人の家族の変化によっては全く捉え方も変わってくるのかなって思います。

「継承」の現場として地域に開く

六車 私は聞き書きの意味や目的がもしあるとすれば、その利用者さんの変化ではなくって、その利用者さんの記憶を継承していくことだと思ってるんですよ。それは民俗学ではずっとやってきたことなんです。継承するためには聞いてそれを書いてまとめなきゃいけないから。私たち介護職員を介して家族に記憶が継承されてゆくのやっぱ一番いいんじゃないかなっていう。素直に受け止められるというか。

アサダ 継承っていうことで言うと、今日この現場も納

涼祭をしましたよね。その中でも、昔の踊りがあって、現場に子どもたちもいましたよね。そういう形で介護する人と家族だけでもなく、地域にこのこと伝えていくってことも意識されているんですか。

六車 そうですね。私、本当はこういう地域のデイサービスとかグループホームとか介護現場が、地域の人にとっての社会資源というかね、記憶の原点みたいになってほしいな。だから、「この地域のことを知るんだったらここに来たら分かるよ」っていうような、そういう場所であるべきだなと思ってるんですよ。

アサダ それすごく面白いですよ。すまいるほーむに行ったら、この地域の郷土史じゃないけども、いろんなことが分かるから行こうって地元の小中学生が来るみたいなことって、こういう活動を続けていく一つの未来としてはあり得るわけなんですよ。そのときに、例えば、働く人たちや組織、施設としてどういうふうなところに地域を開くか、その工夫については結構考えられておられるんですか。

六車 うちの施設は介護保険が始まってから、10年以上ここでやってるんですね。私、来てからまだ2年なんですけど。地域との関わりって実はほとんどなかったんですよ。まずは認知してもらおうところから始まっていて、なので私たちが、とにかく外に出てって行って、いろん

な地域の老人会なんかに出て行って関わっていく。利用者さんも連れて行くんですよ。実際、地域の人たちに記憶の継承とかのレベル以前に、介護に対する拒絶感があったり、未知の世界っていうのもあるからまずそこを知ってもらうってことから始めてるんです。そうやって徐々に地域の人たちが来てくれるようになる。ここからですよ、多分。

アサダ いろんな人たちの私的な記憶とか、背負っている地域の歴史みたいなものがまぜこぜになって、それを編集する場所として実は介護現場がある。そうやっていくと、多分「介護をする／される」だけじゃなくて、この現場が地域の中で果たす役割みたいなことがだいぶ面白いことになってくのかなって思いました。

六車さんご自身、もともと民俗研究者でそのモチベーションがあり、継承していくことの大切さを身に染みてわかってらっしゃると思うんですけども。僕が一つ思ったのは、例えば今日スタッフの方でも映像を回してらっしゃる方とか、それぞれやれること、いろんな表現の仕方ありますよね。

六車 そう！ だから面白い。この、すまいるに来てからはね。私にとっても発見だったんですけど、今まで私は本当に孤独にやってたんですよ。さみしくね(笑)

アサダ お疲れ様です(笑)

六車 私ができることってのはやっぱり文章表現なわけですよ。聞き書きってのは文章表現でしかあり得ないっていうふうに思ってたんですけど、でも実はそうじゃないんじゃないかって思い始めたのはここにきてからなんです。スタッフの持つって意外な経験や能力を、ここで表現してってくればそれが一番いいなって思っていますね。

流れているものを「作品」として「とめる」

アサダ ボーダレス・アートミュージアムNOMAで展示されている作品の一部に、知的障害や精神障害のある方の作品などあって、それがものすごく刺激的で面白い。それはご本人たちが「これ作ったから展示して」っていう感じではなくて、めっちゃめっちゃそれに感動を受けた支援現場におられる職員さんやご家族が「この人のこの表現を世に出したい」という思いでいろいろ関係性を作って行って、やっとなんかの人たちがその作品に触れられる状況が生まれていっています。

僕、さっきからお話を伺っていて、聞き書きの中で話されることって本人が話さなかったら絶対出てこないし、しかも聞き手にその話を面白がる感性もないと、「すごいねそれ」ってなかなかならないと思うんですよ。

そこは何かしらさっきの造形活動とも近い関係なのかなと感じたんですけども、その辺りについてどういうふうな思われますか。

六車 多分、すごく共通するところはあると思うんですけど。利用者さんの記憶っていうのは、ずっと利用者さんの中では日々の暮らしとつながっているわけですよ。それは、「流れるもの」としてあるわけです。だけど、その中で、一瞬一瞬なんだけど、「言葉」として「とどまる瞬間」ってあるわけです。それは、どんな介護現場でも、あるいは、どんな家庭でもあるはずなんです。だけど、それを話されたからと言って形になるかっていうと、決してそんなことはなくて、それに対して反応するとかいうか、「それって何？」という聞き手側の一言があって初めて「これってこうだよ」っていう説明、そこから会話が始まっていくってことなんです。それはまさに発見だと思うんですけど、介護現場っていうのは、多分その発見をしてこなかったんです。

アサダ それは、何でしてこなかったんでしょう。

六車 一つよく言われることは、現場があまりにも忙しくて、話なんか聞いている場合じゃないっていう理由があります。あるいは、認知症の利用者さんだったら、聞いてもしょろがないといった変な話なんですけど、毎日同じことを繰り返してるから、そこに意味を求めると

要はないっていう思い込みもあるかもしれない。けど、私にとっては一つ一つの言葉が実に面白いわけです。「なぜこの言葉が出るの？」ってところから、この言葉の背景というか、「それってどういう意味？」っていうところから、「じゃあ」って教えてくれるところからならだかに聞き書きが始まっていて、最初から「これについて教えてください」って言って現場で聞き書きをしたことはないんですよ。

でも今考えると、私がずっと介護現場ではなくて、民俗学のフィールドでやってきたことと同じなだけで、実はそれができてなかった。そう、発見が。自分が目的とすることにしているの発見はできてたんだけど、それ以外のことについては、ノイズにしか聞こえてなかったんです。

アサダ なるほど。研究で論文をまとめるときは、「これは要る／これは要らん」みたいな感じで、自分たちで聞いた内容を選別しちゃってたってことですよ。

六車 すぐもつたないことしてたなあとは思うんですけど、今はだから、その辺が、実に素直に反応できる。すると本当にいろんな話に展開して行って、思わぬところでこつちとこつちがつながっちゃったりとかするわけですよ。単に聞いているだけじゃなくって、一緒に聞きながら、あるいは問い掛けながら、それを形にしていって。私の場合は、それを本や連載という形で文章にするわけ

です。それは私の作品でありながらも、共同制作みたいな感じになってるんだろうなあって思うんですよ。

アサダ 多分、今、六車さんが「作品」って言葉をあえておっしゃったことが、ポイントやなあと思った。介護現場でなかなか作品っていう言葉は出ないと思うんですよ。あくまで介護の仕事をしているから立場からすると、そういうふうにご利用者の言葉を聞いて、何かにまとめるっていうことを自分の自己表現みたいな形として捉えてもいいのかみたいな、そういう後ろめたさというか、葛藤みたいなものっていうのは、福祉の現場にあるのかないのかって。僕はこのあたり、かなり気になっていることなんですけど。

六車 葛藤っていうのは、逆に多分ないと思う。そもそもそういう行為がないから。「作品にしよう」っていう行為がない。記録はありますよ。介護記録とか。でも、記録はあくまでも記録なんですよね。それを目にする人は限定されているし。

作品というのはもつと普遍的というか、いろんな人がそれを見て、それで何かを発想する種になったり、そういうものとして形を作るわけじゃないですか。私は、「そこまで行く」のが実は介護現場でも重要だと思っていて、今、映像を撮ってる男性職員には、「作品（ってところまで）を作りなさいよ」って言っています。

だから、それは何で必要かっていうと、外への発信をしていくのに必要っていうのもあるんですけど、もうちょっと原点に戻ったときに、やっぱり何かの作品を作るっていう行為は、一瞬そこを流れているものを「とめる」っていう行為だと思ってるんです。日々流れていってしまっ

まう、利用者さんの記憶も流れていってしまう、あるいは、現場も流れていってしまう。それを一瞬とめるってことにすごく意味があつて。あまりにもみんなとめてないからね。とめると何が起きるかかっていうと、そこで一体何が行われていたのかっていうのを考え直すんですよ。

アサダ まさにそうですね。

六車 それは作品として意識して作らなければ、絶対にできないことだと思つていて。だから、映像を編集するときに、最初の頃は本当に、時間軸でまとめているだけだったんだけど、「一体ここで何が行われていたのか、ちゃんと表現してよ」って言って。

そしたら、彼はすごく一生懸命、彼が撮影しているある利用者さんがどんな思いでその思い出の味を作っていたのか、ということまで考えながら作品を作ってくれて。そうすると、その方に対する理解が絶対深まったのかつていうのも分かってくる。だから、作品を作るっていうのは立ちどまる行為なんですよ。

アサダ なるほど。外に発信するっていう以前に自分たちが立ちどまって、今、起きることを考えていくんですよ。立ちどまっていくことをちゃんと習慣づけるとい

うか。そうやって作品を作っていくことで、現場では何かが変わってきた感じはありますか。
六車 決定的に変わってきていると思います。それは職員の意識が単に技術としてのケアじゃなく、人間と人間との関わりっていうところで。それは、私がそんな大上段に立つて説明しなくても、経験的に作る、立ちどまるっていう行為によって、深まっていていっているような気がするし、それを利用者さんたちも共有していると思います。

冒頭に話した関係性の問題につながるんですけども、利用者さんとスタッフとの関係がともフラットっていうか、もつと近いっていうか、ある意味家族みたいな関係になってく。「みんなでこの現場を作ってるんだよ」っていうね。

支援者の「表現」と「日常性の回復」

アサダ 以前、六車さんと奈良のとあるイベントで対談させていただいたときに、すごく面白いなと思ったのが、参加者の質疑応答の時間に、そうやって介護の現場で利用者さんが何か作るのを、支援者が時間や材料を用

意して支援するのは見るけども、六車さん自身が作って

るよねって、要は支援者が表現、創作してる現場っていうのはあんまり見たことがなくて、そういうこと自体あり得るっていうのが面白い、っていう話を聞いたときに、僕もその意見はすごく共感しました。

六車 あのとときは、あんまりそういう意識がなかったから言われてみてちょっと驚いたっていうか。でも、確かにそうだなって。だけど、現場がそれを許してくれてるっていうか。今、共同作業って話があったけれども、例えば私が文書に書いて作品を作るっていうことは、利用者さんたちも参加意識がすごく強いんですよ。登場人物ってこともあるんだけど、それと共に読者でもあるわけです。だから、そういう現場自体がもしかしたらすごく特別なかもしれない。でもその雰囲気は最初からあったわけじゃない。やっぱり聞き書きってことを繰り返していくことによって、そういう雰囲気になってきた。

それは私にとってミラクルだと思っています。

アサダ そういうふうに現場が変わってくると、さらに好循環というか、例えば、具体的にこれから新しいスタッフが入るといときも、ある意味、レベルが上がっているっていうか。この現場だけじゃないかもしれないんですけど、介護現場にこういうふうなスタッフが育っていったらいいなとか、もつと働いていたらいいのになと

いうイメージってありますか。

六車 それは例えば、『驚きの介護民俗学』に書いたときには、「民俗学をやっている人たちが入ってきなさいよ」っていうお誘いであつたわけです。それはいまだにそう思っています。でもそれだけじゃなく、例えば小説を書く人でもいいですし、やっぱり表現手段を持つてることが、重要になってくると思うんですよ。それはプロとしてということだけじゃないですよ。だから、この現場は発信するってことでもあるけれども、表現するってことによって、現場自体を変えていく力が絶対ある。

アサダ そういう現場を変えていく力が、一つは外向きな力にもなったとしたら、それによって地域とか福祉っていう領域以外に広がっていく可能性まで含めたらさらに面白いですね。

六車 そうですよ。福祉が福祉で閉じられていることが自体が異常なわけですよ。やっぱりいろんな人たちが関わって多様性があるのが社会だと思うので。だから私、このすまいるほーむでかなり意識してることは、「日常性を回復したい」ってことなんです。

どういうことかっていうと、日常性ってのは、今あるものすべてが日常性だとは思うんだけど、利用者さんが置かれている立場っていうか、普段送っている日常

っていうのは、非常にいびつな形だと思ってるんですね。例えば、家族の中でも意識的に阻害されているわけではないかもしれないけれども、やっぱり要介護という状態になって、もう何もしなくてもいい、だから、介護される側としてだけそこにいてそれ以外は何も必要とされない。介護現場でも、結局そうなわけですよ、特に大きな施設だったら。でも、そうじゃなくて、利用者さんっていうのは、機能を持ってるとか、残存能力があるとかそういうことではなくって、この社会を生きてきた先輩なんだから、私たちに教えてくれることはいっぱいあるわけじゃないですか。あるときは主役になって、思い出の味をみんなに教えてくれたり、あるいは、そういうことでプレッシャーを感じて落ち込んでしまったりとかね。だから、保護されているだけじゃなくって、本来

ある人間のあり様っていうか、それを回復する場所。それをみんなが支え合ってるっていうか。だから、誰かがものすごい落ち込めば、みんなで心配してどうのこうのっていうことをすればいいのであつて。

アサダ 確かにそうですね。保護されるだけじゃないんですよ。

六車 そうなんです。だから、それはすごく意識してやらないと、介護現場そのものがどうしても非日常の世界になっちゃう。いろんな波があつたとしても、その波も含めて、この日常をみんなが作り上げて共有していくことが、やっぱり幸せに生きていく、幸せだなんて思えることなんじゃないかなって思うんですよ。だから、すまいるほーむに來てる利用者さんたちは、「ここが良いよね」って言ってくれるのかなって思います。

すまいるほーむには、いろんな表現を持っているスタッフがいます。元デザイナーのスタッフ、映像で記録してそれを編集して伝えるスタッフ、最近ではすごくやるた制作も盛んだとか。そういう表現的な手段を持つてる人たちが、これからの福祉現場には必要だろう。また、利用者と支援者の関係のみに閉じず、ひとり一人の記憶をもとに現場を地域に開いていく話題は、アール・ブリュットを地域資源として捉えなおすヒントを与えてくれたように思える。

アサダポイント

すまいるほーむには、いろんな表現を持っているスタッフがいます。元デザイナーのスタッフ、映像で記録してそれを編集して伝えるスタッフ、最近ではすごくやるた制作も盛んだとか。そういう表現的な手段を持つてる人たちが、これからの福祉現場には必要だろう。また、利用者と支援者の関係のみに閉じず、ひとり一人の記憶をもとに現場を地域に開いていく話題は、アール・ブリュットを地域資源として捉えなおすヒントを与えてくれたように思える。

「障害」観を編みなおす実践

見沼田んぼ福祉農園をきっかけに

猪瀬浩平（見沼田んぼ福祉農園事務局長、明治学院大学教員）



猪瀬浩平（いのせ・こうへい）
1978年生まれ、埼玉県浦和市（現さいたま市）出身。2001年に大阪大学人間科学部卒業後、見沼田んぼ福祉農園の活動に関わり、管農集団「見沼・風の学校」を2002年に結成。2007年に東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得満期退学。同年から明治学院大学教員。専門は文化人類学、ボランティア学。NPO法人のらんど代表、NPO法人こえとことばとここの部屋理事、明治学院大学国際平和研究所所員。著書に「むらと原発」（農文協）など。

猪瀬さんは、明治学院大学でボランティア学の教鞭をとりながら、埼玉県さいたま市の見沼田んぼをフィールドに、「福祉」と「環境」活動をかけあわせた取り組みである見沼田んぼ福祉農園を継続的に展開している。障害のある人も、シニア世代も、大学生も、地元の人、よそ者も、様々な立場の人がこの見沼田んぼ福祉農園での農業を通じて、新しいコミュニケーションを生み出す、そんなプロジェクトの話題をきっかけに、福祉現場における表現活動の可能性など、幅広く話を伺った。

障害者に支援される場としての見沼田んぼ福祉農園

さいたま市と川口市にまたがる、総面積約1260ヘクタールの見沼田んぼ。東京駅から25キロ、35キロとほど近く、遊水機能に優れていることもあり、開発せず農地としてのみ利用する場所として市民によって保全されてきた。80年代、少年時代の猪瀬さんは、地元さいたまで両親と障害のあるお兄さん良太さんと暮らす中、この保全運動に関わり、良太さんの縁で障害のある子どもがいる家族とつながり、運動を広げてきた。この運動が郊外の都市住民だけでなく、実際に田んぼを耕す農家の方とも連携する、つまりみんなが農作業を通じて訴える活動へと発展する中、「障害のある人もどこか遠くで作業するんじゃない、コミュニケーションと切り離されずに農業を自分の仕事とし、見沼田んぼを守る主体になれば」と考えた猪瀬家たちが行政に提案し続けたアイデアは、10年以上の時を経て99年に実現。

それが見沼田んぼ福祉農園のスタートだ。

「福祉農園」と名前が付いているが、「福祉」よりも「農園」という言葉の方がインパクトがあるため、あくまで「支援」目的ではなく、障害のある人もない人も一緒に汗を流して農作業をする仲間として運営されてゆく。猪瀬さんは最近改めてこう感じたと言う。「うちの農園の最大のボランティアは誰かという、平日毎日農園に来ている人たち。例えば農園全体の樹木の管理や、共有部分（トイレや倉庫など）の掃除・整理も障害のある人たちが中心にやっている。ボランティアが農園に来て彼らを支えるっていうよりも、障害のある彼らが毎日農園の維持管理をやっているところに、いろんなボランティアの人が来てより多様性を増しているんです」。障害者の支援じゃなくてむしろ障害のある人たちに支援されながら環境を作っているのが、この農園の魅力なのだ。

「障害者」が生まれていくプロセス

猪瀬さんは「郊外化という状況の中で、『障害者』が生まれてきた」と語る。もともと埼玉の障害者運動は、座敷牢のようなところに障害者が入れられているのを見た都市住民が、「農村って遅れる」と感じ「私たちが助けてあげる」といった発想から始まっていると言う。しかし、実は団地ができるまでは綿を作って糸きりをやったり、食用としてザリガニをとる仕事もあった。これらの仕事は、農業が機械化されていくプロセスで必要がなくなり、こうして障害者は「穀つぶし」になってゆく。猪瀬さんはこう話す。「だから、新しく移ってきた都会の人たちが遅れる人を助けるって構図じゃなくて、むしろ都市化の中で、障害のある人たちが『障害者』になっていったんです。だからかつてあった農村の知恵だったりとかを、も

う一度含めて考えていくことが大事じゃないかと」。時代が下るに連れ、障害者を支援する制度は整ってきた。そこで救われることは大いにありつつ、しかし同時にともともと制度に乗っかってないような仕事や生き方が、実は地域の中には多様な形で存在していたことにも目を向けるべきではないか。

自分を気持ちよく表しながらどう生きていくか

猪瀬さんは、生き様としか言いようがないような、名付けようのない表現に着目している。彼がまさきに思いつくのは、越谷市に暮らす橋本克己さんの存在だ。橋本さんは肢体不自由で耳も聞こえず弱視であり、地元「わらじの会」に参加する中で、大きな車椅子でまちに繰り出すようになった。大きすぎて歩道を通れない車椅子で車道を走るわけだが、大渋滞が発生。クラクションを鳴らしても耳が聞こえないので気づかない。つまり周囲から「不良障害者」として様々な攻撃（トラックの運転手に殴られるなど）を受けつつも、橋本さんにとってそれは不合理なこと。そのエピソードを絵日記として「月刊わらじ」に掲載するとまた周りがウケるウケる。いつしか書籍まで出版し、ちょっとした有名人になっていくわけだが、猪瀬さんは、「生きているから表現しなきゃいけない」という切実さから、結果的に生まれたその表現に、可能性を感じている。直接的な「障害者の造形表現」ではなくとも、大切なのは、その背景にある「生き様」も含めて表現として捉える態度を持つことなのかもしれない。

障害者の社会的就労という視点からみる 造形活動の可能性

中川悠（株式会社きびもく、NPO法人テュラキニア代表）



中川悠（なかがわ・はるか）
御講談社 KANSAI週間編集部での情報誌編集業務、アートギャラリー運営などの経験をもとに、2007年にNPO法人・株式会社を起業。近年はクリエイターのビジネス促進を目標に掲げ、大阪府や近畿経済産業局などのマッチングイベントのファシリテーターを担当。そのほかにも、障害者施設の工賃向上を目指したお墓参り代行サービスビジネスの立ち上げ、2014年9月からは淀屋橋にカフェ併設の障害者福祉施設「GIVE&GIFT」をオープン。社会課題を少しでもプラスに変えられるようなアイデアをカタチにしている。

中川さんの仕事は、地域コミュニティや産業の問題、そして障害者の社会的就労など、そのほか様々な社会的課題の持つ一つ一つの要素を、他ジャンルとの協働や独自のアイデアをつなぎ合わせることで、ユニークな課題解決をもたらすこと。そんな中川さんは自らを、イシューII課題を編集IIキュレーションの力で解決にむけるイシューキュレーターを名乗っている。これまで数々のプロジェクトを立ち上げて来た中川さんが、2014年秋に大阪の都心部に立ち上げたのが、カフェ併設の障害者福祉施設「GIVE&GIFT」。放送では、そんな彼と障害のある方の社会的就労を切り口に、障害のある方の造形活動の今後の可能性についても伺った。

イシューキュレーターの誕生

20代半ばまで雑誌編集者だった中川さん。テーマを決めてライター、デザイナー、イラストレーター、カメラマンなどに仕事を出し、一つの記事を仕上げていく「編集（キュレーション）」というスキルを、徐々に、社会課題の解決へとつなげていく。もともと母方の祖父が精神科医、父親が義足の研究者という家庭で育った彼が、仕事として障害福祉に近づいたその発端は、障害者がパンをつくる工場を営む叔父からの相談だった。精神障害者と知的障害者の就労状況を改善するアイデアを考えた中川さんは、当時雑誌で流行だった「お取り寄せ特集」からヒントを得て、冷凍のロールケーキの販売を画策。パンに比べて賞味期限を気にせず、注文があったら

発送できることで、廃棄ロスを減らし、在庫や流通の仕組みも変える。施設も喜んでくれて、当時の年間の一般就労人数が6倍に増えた。

そこから、募参りができない高齢者に代わって障害者が現地に赴き掃除する「お墓参り代行サービス」を府中市と組んで始め工賃アップに貢献したり、京都にある就労支援センターそらいろと、大学教員の蔵書を自炊（裁断してスキャンに入れてPDF化すること）する仕事をつくるなど、「課題」と「課題」をつなぎ合わせて、新しい価値を生む「イシューキュレーター」としての活動を、障害福祉分野においても広げていった。

心の中を掘り下げる表現

しかし、同時に障害福祉の領域で工賃を「継続的」に上げていくには、コンサルティングのような関わりでは限界があることにも気づく。なぜなら、福祉現場のスタッフはあくまで支援の専門家であり、「授産」という仕組みにおいても、ビジネスの教育を受けていないからだ。「自分でプレイヤーになってやらない」という意識が高まった中川さん。こうして、大阪淀屋橋というオフィス街でサラリーマン向けのランチをつくるカフェ「GIVE&GIFT」がオープンした。予想通りお客がたくさん訪れ、また、これまで就労支援の現場では、実際にそれが売れていく状況を利用者が目の当たりにすることは少なかった課題に対し、「ここだと商品が実際に動いていく。すると働いている障害のある方々もイキイキしますよ。」「一生懸命作ろう、おいしいと言ってもらおう」になってくる。これは働く上で、とてもシンプルなモチベーションだろう。これらの就労感の高まりは、「電車で基本的に通所されるんですけど、女子がどんどんおしゃべりになってくるんですよ。原色を使い始める子が多いとか、スカートが短くなって

くるとか。いつか彼女たちが都心部で働く可能性も十分あるし、電車通勤するのは結構大事やな」と。こうやって、中川さんは自分の実践を通じて、就労支援のさらなる可能性を試し続けているのだ。

よりボーダレスに向かってゆく

実は中川さんには、かつて大阪の大正区でアートギャラリーを運営されていた過去がある。中川さんは、昨今の「障害×アート」の文脈をどのように捉えているのだろうか。例えば重度の知的障害の人だと、創作活動を通じて当人の可能性を何年もかけて見出し、それを作品として人の目に触れる状況にまで持つていくことは、生活介護的には素晴らしいこととする一方で、「就労支援的」には、課題も感じていると語る。「もし創作活動するのであれば、その作品を作るという行為がいかに「働く」につながるのかを考えるべきです」と中川さん。その取り組みの一つとして京都の伝統的なろうそく屋さんと組んで、絵を描くことができる障害のある方が、その担い手さんになれるよう試しているらしい。伝統工芸の継ぎ手不足を解決し、かつ障害のある人の働く力につなげる。「絵を描いてはる人自身を、作品をちゃんと販売する行為や営業する行為の中に織り交ぜていって、彼ら自身が「社会ってこうなんや」って体験ができるまでのカリキュラムがあればいいと思う」と語る中川さん。創作活動においても、福祉スタッフが持つ「支援」の専門性にあわせて、それら（この場合は作品）を社会へとつなぐ「価値付け」の教育までもが必要という意味で、多岐にわたる彼の実践から発せられるメッセージは終始一貫していると感じた。

見えにくい生きづらさに向き合う

ポスト福祉的居場所づくりと表現活動の可能性

山下耕平（NPO法人フォロ事務局長、不登校新聞社理事）



山下耕平（やました・こうへい）
1973年埼玉県生まれ。大学を中退後、フリースクール「東京シューレ」スタッフを経て、1998年、『不登校新聞』創刊時から、2006年6月までの8年間、編集長を担当。また、2001年10月、フリースクール「フォロ」設立時より、同事務局長を務め、2006年10月より若者の居場所を立ち上げ、コーディネーターを務めている。著書に『迷子の時代を生き抜くために』、共著に『名前のない生きづらさ』など。

山下さんは、現在、大阪市中央区でフリースクールや若者の居場所を運営。子どもたちが通うフリースクールだけではなく、広い意味での「若者」が、それぞれに生きづらさを抱えながらも、それを仲間どうしで共有していく居場所づくり（「なるにわ」という名前で活動）もやっている。山下さんの活動の特徴は、一見、マイノリティに見えにくいものの確かに切実な生きづらさを抱えている人たちと、がちがちの「支援」ではないかたちで共に過ごす時間をつくりだすこと。そこにはきつとアール・ブリュットや福祉現場から生まれる表現活動の持つ豊かな時間と共通するものがあるのではないだろうか。

「なにももの」であるかをわし、「自分発」の言葉を編む場

「生きづらい」という感覚を持つ大人にも子どもにも、共通してあるのは「社会に合わせられない自分が悪い」という感覚なのではないか。まずは、自分個人の問題ではないという価値観を共有することが必要だという山下さん。「なるにわ」は、「なにももの」でなくともよい場所」として毎週土曜日にサロンを開いており、趣旨に賛同する18歳以上の人々が集っている。今の社会では、「なにもものか」「レースにうんざりして道を少しでも外れると、たちまち「不登校」「ひきこもり」「ニート」「発達障害」などなど、専門家を名乗る人たちから名指される。そんな名前を返上して、人と人が出会う場所だ。なるにわから派生した活動に「づら研」（生きづらさ

からの当事者研究会）がある。こちらは月1回、「生きづらさ」を感じるメンバーが集い、当事者研究をしている。生きづらさを自分に閉じ込めるところにさせるので、聞いて他者と共有していくことで、生きづらさを生み出す社会のあり方を問い直すと同時に、社会と自分との関係を問い直すことにもつながっているという。これらの活動のポイントは「名指される」ことの事前で、その名指しをかわしながら、「自分発」の言葉を発していくことだ。

「問い」が自分に返ってきた

山下さん自身は不登校やひきこもりの経験者ではない。しかし大学1年生のときに、所属する学生新聞サークルの取材で都内のフリースクールに訪れ、学校に行かない子どもたちの話をきくうちに、「なんでこの子たちは学校に行っていないんだろう？」という問いが反転して、「なんで自分はどの疑問もなく学校に行っていたのだろうか？」と、自分自身が問い直されたという。心のどこかで、「不登校」という「問題」が社会に存在していて、それを解決するという意識で取材に行った山下さん。しかし、不登校から問われているのは、「そもそも学校って何なのか？」「学校に行く意味って何なのか？」ということでもあり、それを大人も子どもも一緒に考え続けるなかで、今の社会のあり方や、自分たちが縛られている規範のあり方が見えてきた、と話す。「支援する側」ではなく、不登校を「自分の問題」として捉える。その信念のもと、『不登校新聞』を発行し、大阪でフリースクール（フォロ）を立ち上げ、運営を継続してきた。この問いを学齢期の子どものものではなく、若者の労働問題にまで広げて考える過程で、なるにわの活動も生まれたのだ。

「当事者性」のあいまいさと「支援」の難しさ

しかし、「名前のない生きづらさ」というのは、当事者のあいだでは感覚的に共有される一方で、大変わかりにくいものでもある。ましてや制度的な支援の対象とするのはとても難しい。「不登校」や「ひきこもり」、「発達障害」などの名前ではくりきれない生きづらさは、縦割りの行政的な仕組みでは扱いにくい。例えば不登校について、文部科学大臣が「不登校児の中には未来のエジソンやアインシュタインが眠っているから、フリースクールを支援しよう」と語ったことがあるが、そういうわかりやすいストーリーにしてしまうと、とたんに「なにももの」になることが偉い」というマジョリテイの規範を再生産してしまう。「実はすごい」でも「困った人たち」でもない、「あいまいでモヤッとした当事者感覚」をこそどう表現するか。そこに活動の課題を感じていると、山下さんは語る。

表現活動が挟まれる意義

「名前のない生きづらさ」は、すなわち「境界上の存在」。何かと何かの狭間にあるがゆえに言葉にしがたいのだが、そのボーダーから生まれてくる重要な存在の一つにアートがある。「境界的なところに生きている人は、どこかでアートのなものに触れざるをえない」と語る山下さんは、アサダも以前関わってきた大阪市西成区のアートNPOココロームの実践などにも触れながら、必要なのは遊具が整備された公園ではなく、「空き地」だと訴える。「支援」に正解はない。そのことを現場でひしひしと感じてきた山下さんならではの視点だろう。

社会の価値観が流動化するこの時代において、みずから遊び方を発明するためのレッスンとして、表現活動は有効ではないか。今、様々な「生きづらさ」の現場で、アートは必要とされているのだ。

④ 第31・32回放送（2014年5月2日、9日）

発見！ コミュニケーションの回路としてのアール・ブリュット

細馬宏通（人間行動学者、滋賀県立大学人間文化学部教授）

アール・ブリュット作品には、制作における「行為」とその結果立ち上がる「作品」の境界線、ボーダーについて考えさせられる問いがたくさん含まれているように思える。細馬さんは、アール・ブリュット作品が生まれる現場をつぶさに観察することを通じて、私たちがアール・ブリュットを楽しむための新たな気づきを与えてくれる。細馬さんとともにミステリアスな制作プロセスを追求した。



④ 第55・56回放送（2014年10月17日、24日）

老いと表現について考える

釈徹宗（如来寺僧侶、相愛大学人文学部教授・NPO法人ライフ代表）

釈さんは、大阪の浄土真宗本願寺派如来寺住職、相愛大学人文学部でも教鞭をとられながら、認知症高齢者のためのグループホーム「むつみ庵」も運営している。また落語や映画など、様々な芸能文化に関する執筆もされていることから、改めて釈さんとともに「老いと表現」というテーマを、放送時間中のNOMA開館10周年特別企画展「快走老人録II―老ヒテマスマス過激ニナル―」の話題と絡めながら語り合った。



④ 第59・60回放送（2014年11月14日、21日）

境界（マージナル）を生き抜く表現者たちへのまなざし

坂上香（映画監督）

坂上さんは、8年という長期間取り組んできた最新作「トークバック 女たちのシアター」を2014年に発表。米国カリフォルニアのサンフランシスコを舞台に、HIV陽性者、元受刑者、薬物依存の女性たちが演劇を通して自らの人生を取り戻していくドキュメンタリー映画だ。今回は坂上さんとともに、社会の中で常識や多数派という境界を超えてしまった人たちが「表現」を味方に生き抜くあり様について語り合った。



④ 第83・84回放送（2015年5月1日、8日）

アール・ブリュットを記録し続けること

代島治彦（映画作家、プロデューサー）

代島さんは、2006年から国内のアール・ブリュット作家16人の記録映像を撮り続け、2008年に5枚組DVD『日本のアウトサイドアート1〜5』を発表（後に6〜10も発表）。2014年には、記録映像『アール・ブリュットが生まれるところ』も発表し、話題を呼んでいる。今回は、監督自ら、アール・ブリュット作家を記録し続けるその動機やアール・ブリュットの魅力について存分に語っていただいた。



④ 第105・106回放送（2015年10月2日、9日）

地域に関わるアール・ブリュットに関わる仕掛けづくり

中脇健児（場とコトLAB代表、公益財団法人伊丹市文化振興財団）

中脇さんは、兵庫県伊丹市を中心に関西一円で、ミュージアム、商店主、行政、市民を結びつけるプロジェクトを多数展開されている。アートとまちづくりを掛け合わせ、街に愉快なコミュニケーションをもたらしてきた視点や、滋賀県高島市の地域づくりにも関わる彼の経験から、滋賀県の文化やアール・ブリュットがどのようなに見えるのかをお聞きした。



④ 第107・108回放送（2015年10月16日、23日）

アール・ブリュットから垣間みる世界の秘密

鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授）

鎌田さんは、宗教哲学者として数々の研究と執筆活動をされてきた。また神職の資格を持ち、神道ソングライターとして作曲活動も行うとても多彩な活動を展開している。そんな鎌田さんが、アール・ブリュットが織りなす世界観に魅力を感じているということで、改めてアール・ブリュットについてお話を伺った。



① 第113・114回放送（2015年11月27日、12月4日）

表現と居場所の関係 生きづらさを現す別の仕方

上岡陽江（ダルク女性ハウス施設長）
坂上香（映画監督）

今回はKBS京都スタジオではなく、アサダがダルク女性ハウスのメンバー向けに行った音楽ワークショップの会場（東京都内）からお届け。「私」を知り、「生きづらさ」に対する受け止め方を少しほぐす。そのための「感性の体験」としての「表現」の可能性について、お二人とじっくり語り合った。



① 第115・116回放送（2015年12月11日、18日）

越境する障害福祉 そしてアート活動のゆくえ

椎名保友（日常生活支援ネットワーク・コーディネーター）

椎名さんは、大阪の障害福祉分野で様々な支援の現場に携わりながら、地域づくりや若者の働き方について考える場づくりなど、分野を越境しながら活動されている。今回は、そんな椎名さんに、今の障害福祉分野に足りていないものや、逆に可能性に溢れているところなどを語っていただき、この分野から生まれるアート活動についてお話しいただいた。



① 第141回放送（2016年6月10日）

「現地リポート」いのちについて考える 東近江市立山上小学校 命の授業について

花戸貴司（永源寺診療所所長）
圖司清美（東近江市立山上小学校養護教諭）

滋賀県東近江市にある東近江市立山上小学校。この学校は人口約6000人の永源寺地区にある。学校医はこの地区で「地域まるごとケア」に取り組んでいる永源寺診療所の花戸貴司所長。その人がその人らしく、最後まで住み慣れたところで暮らすということを考え続け、実践している医師である。山上小学校では、花戸先生による内科健診の後「命の授業」の時間を設けている。今回はその様子を現地リポート。



① 第147・148・149回放送（2016年7月22日、8月5日）

細馬宏通と考える 「介護するからだ」に宿る創意

細馬宏通（人間行動学者、滋賀県立大学人間文化学部教授）

細馬さんは2006年から介護現場での観察研究を始め、利用者やスタッフの会話に現れる身体動作を観察。障害のある人々と共同で行う即興演奏に参加し、アール・ブリュットの創作現場の造形活動現場に足を運ぶなど、広い意味での「福祉」現場で発生しているコミュニケーションに独自のまなざしを向けてきた。今回は、著書『介護するからだ』の紹介を中心に、彼ならではの驚きの視点を現地リポーター田端一恵も交えてお届けした。



① 第152回放送（2016年8月26日）

アール・ブリュットと宝塚歌劇の共通点

今井英雄（「男の宝塚」評論家）

今回は、大手損害保険会社勤務のかたわら、「男の宝塚」評論家として、金融誌のコラム連載や地元の市民大学での講演などで活躍の今井英雄さんがゲスト。今井さんはまたアール・ブリュットのファンとしてこれまで様々な展覧会やアール・ブリュットにまつわる企画に参加してきた。そんな今井さんにこれまでにない切り口、「アール・ブリュットと宝塚歌劇の共通点」をテーマに語っていただいた。



① 第203・204回放送（2017年8月18日、25日）

大西暢夫のライフワークから見えて 来るアール・ブリュットの魅力

大西暢夫（写真家、映画監督）

大西さんは約20年にわたり、ダム建設と長い間向かい合ってきた全国の山里を巡り、そこに生きる人たちの住まいや暮らしぶりをカメラに収めてきた。また2011年の東日本大震災以降は、被災地である東北沿岸部を訪れ、その風景の撮影や、人々へのインタビュも続け、日本の精神科病棟や福祉施設などでアール・ブリュット作品やその作り手の撮影もしてきた。そんな大西さんならではの視点からアール・ブリュットを語っていただいた。



◎ 第225・226回放送（2018年1月19日、26日）

熱海の障害福祉を開く ラジオ、建築など文化をきっかけに

荻沢洋子（熱海ふれあい作業所所長）
秋庭好江（熱海ふれあい作業所スタッフ）

静岡県熱海市にある、熱海ふれあい作業所の現場からお届け。ここでは、主に精神障害者のための就労継続支援B型作業所とグループホームを運営している。最近、若手建築家との協働によって作業所をリノベーションし、地域に広く開いていく取り組みや、静岡県文化プログラムの採択を受けたアートプロジェクトにも取り組んでいる。熱海からより広く地域に開いて行く実践への思いを伺った。



◎ 第229・230回放送（2018年2月16日、23日）

支援者と利用者の間にある「何か」を 言葉にする試み——創作のアナサード——

細馬宏通（八間行動学者、滋賀県立大学人間文化学部教授）
堀淳二（社会福祉法人青い鳥会彦根学園生活支援員）
茂木麻貴（社会福祉法人クローオープンスペースれがーと）
片桐公彦（厚生労働省障害福祉専門官）

障害福祉の一大シンポジウム「アミニティーフ・オーラム22」のセッションをお届け。アール・ブリュットをはじめとした障害福祉現場で営まれる創作活動の、支援者と作り手の方との関係、コミュニケーションについて、その研究事業の成果を研究者、支援者が交じり合いながら話した。その内容をラジオでも改めて紹介。



◎ 第234・235回放送（2018年3月23日、30日）

「障害」、そして「人の持つ普遍的な 表現の力」の可能性を伝えること

東村奈保（NPO法人Sound代表理事）

最終回。番組のこれまでを振り返りながら、この放送を通じて伝えたかった「障害」とは何か、そして、「人の持つ普遍的な表現の力」とは何か、そして、アール・ブリュットという言葉、あるいは障害のある人たちの表現の一つの捉え方が、この4年半でどのように日本の福祉を変え、アールの世界を変えてきたのか。現地リポーターの田端一恵、そして番組の最後に立ち会うゲストとして、東村奈保さんと一緒に振り返った。



塔本シスコ
《絵を描く私》
1993年

5

「滋賀」という地から



井上優
《だっこしている人》
2014年

滋賀ならではの「美」ってなんですか？ アートの視点から考える

石川亮（美術家、成安造形大学共通教育センター助教）

石川さんは現代美術家として、近年は滋賀県での制作に力を入れており、また成安造形大学の附属機関である近江学研究所においても、滋賀県ならではの暮らしの美とアートをつなぐ研究をされている。そんな石川さんと「滋賀ならではの『美』ってなに？」というテーマを、石川さんのこれまでの活動をきっかけにしながら三回にわたって放送した。



石川亮（いしかわ・りょう）
1971年大阪生まれ。滋賀県大津市在住。美術家、成安造形大学共通教育センター助教兼地域連携推進センター職員、2012年より成安造形大学附属近江学研究所研究員。交通インフラやそのシステムの興味から作品制作を始め、近年は国内の神仏にゆかりのある地に向き、その場所の持つ性質やルーツを探ることが作品制作の糸口になっている。近年の代表作に近江の地域伝承や地名をもとに名付けられた湧水を集めた「全体・水」、神仏に所以のある山を題材にした「日出山・日入山」など。

個人の創作と近江との出会い

アサダ 石川さんはこれまで現代美術家として、国内の神仏にゆかりのある地域に向き、その場所の持つ性質やルーツを探ることで作品制作をされてきました。とりわけ、滋賀県での制作に力を入れていて、成安造形大学の附属研究機関である近江学研究所においても滋賀県ならではの暮らしの美とアートをつなぐような研究をされています。

かなり滋賀に根付いて制作や研究をされている石川さんですが、制作テーマが、近江のいろんな土地や地域のルーツを探って作られてるってことなんですか？
どういうことをされているんですか？

石川 はい。だんだんと近江にテーマを置くようになってきたんですけど、学生時代はインフラやシステム、そういう社会構造の仕組みと自分自身との距離についてというふうに関心を持っていました。日本人のルーツとか、自分のかを考えていました。日本人のルーツとか、自分のかをどうアウトプット、作品化するかっていうのが多分、自分の仕事なんやろなと思って。最初は「全体駅」と書いてある駅名看板なんです。

90年代から2000年代、今もそうなんですけど、グローバル化されたシステムの中の一人ってどうあるべきなんやろって考えたとき、駅なんていうのはその土地を象徴するような場所ですよ。そこがその街の出入口になっているし、そこしかないものがその入口を通して想像されるわけ。そういったものがどどん均質化されていくってことをどう捉えたらいいのかなと。そのときに、逆に全体って言葉ですべての駅が『全体駅』になってしまえば、名前はなくなくなっちゃうんだけど、見る側は『全体駅』の看板を通して向こうの景色が気になって、より一層そこしかない場所に目が行くってことがグローバルizmとローカルと一緒に見るというコンセプトになるかと違うかなと。

アサダ 確かに駅ってそういう存在ですよ。駅自体がどんどん再開発されたりとかして、同じような見た目になっていったときに、どうせやったら『全体駅』っていうのにしてしまったらよりローカルイが見えるんじゃないかっていう。

石川 そこで背景を含めて看板を写真撮影するってところまでが僕の作品なんです。でも作品にキャプションでニューヨークとかジュネーブとか書いていたら、『全体駅』がなしになってしまいますよね。そういうこ

とで、見る人に考えてもらうことが作品。

アサダ システムというよりはもう少し地域固有のルーツとか伝統、民俗というところにシフトしていく中で「全体ー水」の作品などがあると思うんですけど、少し作品のご紹介と関心の変遷について教えてもらえませんか？

石川 僕がそういう活動をしてると、スイス、ジュネーヴの美術学校の先生が、君は琵琶湖の近くに住んでるだろうと。ジュネーヴにはレマン湖があるんですけど、そのほとりのアートスペースで水をテーマにした展示会をするから作品考えろと。そんなとき「全体ー水」構想が出てきました。琵琶湖の水をレマン湖の水と混ぜるっていうのをやったらどうかかって。混ぜてなんでもない水になることを展示会でやるっていうのはどうかかっていうプランニングを出した。レマン湖、琵琶湖の水を凍らしてプレートの上に置いてくだけなんです。溶けていって液体になって二つの水たまりができるんですけど、それが表面張力で二つが付くときがありますよね。このとき「全体ー水」が成立する。混ざった瞬間、どちらのものでもなくなるってことを先ほどの「全体駅」と一緒に、固有のものと固有じゃないものを、一緒に考えることが大事なんじゃないかなって思っています。

アサダ 実際「全体ー水」が滋賀の中のいろんな湧き水単位でも行われて、同じく溶けてざーっと流れていくみたいなの、あれも観させていたでいて。妙な感慨がある作品だと思いました。

石川 そのスイスでの作品のときに、「滋賀でそれやってみたらどうか」っていうことを言う先生がいて、どうやったらいいかなと考えたときに、名前の付いている湧き水を探すことをやってみようと思ったんです。**アサダ** 固有の名前が付いているってことですね、ポイントは。

石川 最初はそんなにあんのかなと思って調べてみると、これがなんと、一番最初に僕がざっくり調べただけで40カ所できてきました。これ、ひよっとしたらものすごく面白いことになるかもしれない。水を汲んでいる様子を撮影、ストックして、地図にマッピングしていく作業をやったんです。やっていくと、40で済まへんかった。

アサダ 行った先でまた教えてもらったりとかで、情報広がつてくんですよ？

石川 そうなんです。汲みに行ったときに「君、あつこのあの水、行ったか」っておっちゃんが言うんです。いろんな情報が出てきて、2010年の時点で80カ所。

アサダ 倍になってるじゃないですか。

石川 こんなんするって決めたら途中でやめるわけにいかへんですよ。水って地域の人々が大事に水場を掃除して保ってるし、水道のない時代はそれがみんなの水やったわけです。そこでもいろんな対話があって、文化が生まれた。固有の水ではあるけど、誰のものでもないんですよ。水って人間の生活に必要で、すべての環境に関わってくるもの。愛でながら名前を付けて、その環境をキープする人間の営みと、そもそも水は誰のものでもないんだってということ、この二つを一緒に言えるかなと思って80やったら、2012年にもう一回、滋賀県立近代美術館で「自然学¹」っていう展示会があって、そんなときもう120個ぐらいになって。**アサダ** 「全体」っていうコンセプトにしながら実地でローカリティに関わっていくような動きっていうのが滋賀で生まれたんですね。

石川 スタートはグローバルと個人という距離感で動き出すんですけど、やりだすとどんどん固有性に寄っていくわけです。グローバルワークからローカルワークにいつてるんだけど、両方をしっかり見据えていって、それを見える化するとか物質に置き換えるとかっていうことが多分、自分の美術家としての仕事なんちゃうかなって思って、勇気もつてやろうとなるわけです。

滋賀の美を再発見するプロジェクト

アサダ 成安造形大学付属近江学研究所の연구원としても活動されてきたと思うんですけども、近江学研究所というのはどういった研究や実践をされてるんですか。

石川 近江の歴史、文化、民俗をひもとき、たくさんの先人がいろんなこと調べておられて僕が言うことでもないんですけども、これを次の世代にどんなふうにも面白く伝えるか。そして若い世代が近江のかっこよさ、美しさを面白く伝えていってくれるような、そういう学びの場所になったらいいというのが、僕自身思っています。

アサダ 僕が去年の秋に近江学の取り組みの一環として行かせていただいたのが、「MUSUBU SHIGA 空想MUSEUM²」っていう滋賀県全域の様々な伝統や産業や生活文化をキュレーションし、デザインの力も借りながら学生と共同して行う展示会です。その取り組みについてご紹介ください。

石川 まずは近江学研究所のベースックなところからお話しますと、「近江のかたちを明日につなぐ」という題名で公開講座をやっています。特に僕が関わっている部分は「明日につなぐ」っていうところ。県内には伝統産業で手仕事をされる人たちがたくさんいらっしゃ

1 「自然学」SHIZEN GAKU（来るべき美学のために）2012年8月11日〜9月23日に滋賀県立近代美術館で開催。成安造形大学と滋賀県立近代美術館の連携推進事業。

2 2008年4月1日に成安造形大学が設置した。近江の歴史と芸術の持つ創造精神とを結びつけ、新たな可能性を探求する研究所。一般参加できる近江学フォーラムも設立している。

3 MUSUBU SHIGA 空想 MUSEUM 2016—近江のかたちを明日につなぐ—2016年10月22日〜11月27日に成安造形大学で開催。主催…成安造形大学（キャンパスが美術館）、滋賀県

るんですけども、その人たちに焦点を当てる。この伝統的な仕事が時代時代に流されて変化していくけど、なぜか今日もその伝統が受け継がれている。そこには相当の工夫があると思うんですね。その工夫をじわじわ聞き出していくという。そして、それを聞いた人たちがまた新しい捉え方をして、そこにまた意味や価値を付けていくてくれたらいいなというのがわれわれのねらいです。例えば、紹介いただいた「MUSUBU SHIGA 空想 MUSEUM」⁴、そういった展示会を開いて、伝えるにくいこと、あるいは見えにくいことを面白い表現にアウトプットしていくっていうところも近江学研究所の仕事の一つと言えます。

アサダ 例えば、伝統文化とか伝統芸能とか技術とか手仕事とかっていろいろな言葉を聞いたとき、僕らは博物館に行ったらそういうものが観られますよね。手仕事されてる方のお話を聞く会とか、いわゆる社会見学的なものって想定し得ると思うんですけども、「MUSUBU SHIGA 空想 MUSEUM」⁵っていう展示会は、美術大学ならではの展示会だなと思いました。例を挙げると、彦根市に七曲がりっていう通りがあつて、そこで彦根の仏壇の全七行程の各々に携わる職人さんが住まわっていて、一つの仏壇を組み上げていくんです。その工程や一つ一つのパーツといったものが、そのま

ま置かれるんじゃないなくて分解された状態で、まるでインスタレーションのように展示されてました。伝え方っていうときに、デザインの表現が入ってくる。かつよく伝えることで若い人たちに関心を持ってもらうとかってあると思うんですけども、そういう伝え方について、美大ならではの表現的な工夫は、かなり意識されてるってことですか。

石川 そうですね。過去に「近江のかたちを明日につなぐ」⁴で彦根仏壇事業組合の方に来てもらって、お話してもらったことがあるんですね。50年に1回仏壇のお洗濯っていうのがあるよと。そういうことを仏壇屋さんにはさつと言わはるんですけど、われわれからすると、「何が起こってるの?」⁴と思うわけですよ。

アサダ 本当ですよ。50年に1回、仏壇を洗うって。どういう工程でそれやんのか、なかなかイメージできないですよ。

石川 そうなんです。仏壇屋さん、職人さんからすると、解体して直すっていうことが当たり前のことから、そりゃ何百、何千っていうパーツになるっていうこと、普通のことですね。でも、われわれにとって仏壇がばらばらになるっていうこと、ちょっと想像つかへん。でも、これをきちんと順番に並べたらどうなのやろか。われわれが現代美術の展示室の中に、

仏壇のばらばらになったものをきちんと並べたらどう見えるかって考えるわけです。そんな何百個、何千個のパーツを丁寧にきちんと並べるなんて何日かかるんやろなっていうことを思いついてしまったらやりたい。

アサダ やるしかないぞと。

石川 これが多分、美術とかデザインとか表現の醍醐味というか面白いところやと思うんですけど。これちょっと大変やけどやってみよう、と学生に声をかけました。最初は懲りて逃げ出すかなと思ったら、そんなことなかったんですよ。学生がめちゃくちゃ面白がってる気になってね。並べ方とかは解体の順番があるんで、僕がこういうこかかって話したんですけど、それを的確に学生は壁にぴちっと貼っていきよるんですね。また、展示のスペシャリストもいるので、釘は見えへんほうがいいですねとか、こういう部品は垂直に見えてるほうがいいからこんな金具ついたらいいですよとか。

アサダ 見せ方を実現させるための技術ってセットですもんね。

石川 なんぼ思ってもそれを見せる技術がなかったらできないし、これはわれわれ、大学しかできひんなど。表現するっていうことと、歴史や文化をどういうふうに見せるかっていう目線、それと「MUSUBU SHIGA」⁵っていうコンセプト。50年が経って世代も変わるけど、

受け継がれてきたものがこうやって結ばれていくんですよ。だからこれはMUSUBU SHIGAのテーマにぴたりだなと、やるしかないだろうということをやっていくわけですね。

アサダ 滋賀県は「MUSUBU SHIGA」⁵っていうコンセプトや、僕もずっと関わってる「美の滋賀」というコンセプトのプロジェクトがあります。滋賀県には伝統的な暮らしの美、その中には博物館などでは観られない地域の中の神仏の信仰もあると思います。また、ずっとこの番組でテーマにしているオール・ブリュット、ボードレス・アートミュージアム NO・M・A の活動や、滋賀の福祉の歴史といった流れ、そういったものや、石川さん自身ずっと取り組まれている現代美術であったりとか。当然、その暮らしの美って様々な角度からあるんですけども、石川さんのバランス感覚といますか、美術作家として美術館で発表される一方、近江学という研究所にも勤められているという中で、滋賀で活動するっていう意味ではまさにダイナミックに現場にいると思うんですけども、そういうつながりが個人の中では見えてきていますか。

石川 振り返って考えると、グローバルな社会になっていく中で個の存在とか、均質化されていく、またもしかししたらなくなってしまうもの、そういったものが

⁴ 近江学研究所が主催の連続公開講座「近江のかたちを明日につなぐ」シリーズ 第2回「近江へ受け継ぐかたち」彦根仏壇・株式会社井上」2013年7月20日に成安造形大学で開講。

⁵ 「湖と、陸と、人々と。」MUSUBU SHIGA」プロジェクト 滋賀県の魅力を県外へそして世界へと発信し、ブランド力を高めていく為に発足された滋賀県によるプロジェクト(平成26年度)28年度)

おそらく際立ってくるんじゃないかなって、「全体駅」のときから考えてたわけです。僕としてはそういうコンセプトで作品を貫徹できたらいんじゃないかっていう思いでやっています。これはご縁ですけど、近江学研究所、成安造形大でお仕事させてもらってる、また滋賀県的美術館の方、文化行政の方ともいろんな連携させてもらってる中で、自分の個人的なそういう思いと、今、直面している滋賀県、近江のこれからの文化をどう捉えるかということが、まんざら別物ではないなど。だったら、僕自身の表現も、頭の中を切り分けてそういう思いで進めればいいんじゃないかなっていうのがありますね。

アール・ブリュットから入りつつ解体する

アサダ 石川さんから見られてアール・ブリュットの活動について、どういう魅力を感じられてますか。

石川 アール・ブリュットの持っている作品の強さっていろいろは皆さんが感じておられるように、すごいなって思うものはあるんですね。僕らの立ち位置からすると正直、悔しいなっていう思いもありますし、でも、いわゆるわれわれ美術家だって頼まれてやることなんてまずなくて、自分自身の問題から始まるんですね。

アサダ 美術家っていうものはそもそもそういうものだっていうことですよ。まずは自分たちが表現したいものを作るっていうところから始まるよ。

石川 そうです。でも、そのときに自分の表現しようというものが世の中に受け入れられる、理解してもらうためには、今の社会とか今日性ですよ。きつとトレンドもちょっとは分かかってないと厳しいだろうし。だから、僕らはそういった時代の流れも汲みつつ、同時に自分の責任っていうことを常に考えながら、自分のやっていることが飽きられて見られなくなっても自身のスタンスとして続けるっていうことでやるわけですけど、その辺が多分、アール・ブリュットの作り手とはちょっと違うんだろうなっていうことは考えています。

ただ一つ思うのは、福祉行政は滋賀県の文化としてアール・ブリュットをちゃんとみんな理解しよう、着目しようというところから始まったと。その次に、最後は個人の表現であるし、個人が社会とどう向き合うかというものが作品だと思うので、アール・ブリュットとの向き合い方から始まりつつも、最後はそのコンセプト自体を解体していこうとしてみるんじゃないかなって思うんです。表現者としても、あるいは観る側もそういう境界を取り払っていかないと作品も自立していかないよ

いか。作家も本当の意味でノーマライゼーションといふかね、それがゆくゆくは必要だと思ふ。でも、滋賀県は、そこにいったん、まず、アール・ブリュットという枠組みを設定しながら、こういう表現の問題を見ていこうよ、と現代アートと切り分けてみたよ。でも、行く先は僕ら美術作家と同じで、すべてが取り扱われたいところにならぬ文化っていうものがあるんじゃないかなって言いたいのかなって僕は捉えています。

アサダ 滋賀県立近代美術館の新生美術館っていうプロジェクトが始まっていますが、石川さんも僕も、いろんな関わりがこの美術館から生まれてきていると思います。観る側が現代アートとアール・ブリュットはともに根源的にはつながっているよ。そう感じる力を試されるんじゃないかということですよ。

石川 そうですね。

アサダ その中から本当のノーマライゼーションみたいなものが起こってくるんじゃないかって話だと思ふ、すごくうなずいてその話を伺っていました。

滋賀の美を語るためにやるべきこと

アサダ 新生美術館は、神仏の美と近・現代美術とアール・ブリュット、この三つが絡まってくる中で、

どのあたりが面白くなりそうだなあと、お感じになりますか？

石川 僕としては、もう一つ上に目標というかテーマをみんな設定していく時期なんじゃないかなあって思っているんですよ。おそらくこの三つについて、それぞれの専門家、それぞれの立場にいる人たち、そして、そうじゃない人たちが、かなり勉強したと思う。それをみんなが考えて、みんなで作る美術館と言いながら、こんな歴史や文化性があるんやなとみんなを着実に学んできた。ここやと思うんですよ。例えば湖が見えて、多分暮らしとして精神的にすごく救われてるんじゃないかな。その滋賀ならではの豊かな暮らしを支えている文化がとて分厚いんじゃないかと。

アサダ なるほど。その暮らしやすさの背景にある積み重ね、その部分をこそ文化としてちゃんと語っていかないとあかんってことですよ。なかなか、そこを言語化するようなアクションとかいうか、その問題意識自体をまず持つに至るのに時間がかかるっていうのはありますよね。

石川 例えば滋賀県はしゅっちゅう大河ドラマに取り上げられてますよね。自分たちの身の回りにはそれだけ歴史・文化の積み重ねがあるわけですが、そういうことから、少しずつ学んでいけばいいんじゃないかな

ないかなあ。先日ね、没後20周年の司馬遼太郎さんのシンポジウムがあったんですけど、これなんか全くそうだと思うんです。あの司馬遼太郎さんが近江を一番最初に選んで街道を歩いたわけです。日本人のルーツをひたすら見ておられたようなんですけど、そこを見ていくのに、まず近江から始まっている。

アサダ 司馬遼太郎さんっていう名前はめちゃくちゃポピュラリティありますからね。

石川 そういうところからアプローチすることやなと思います。その文化とか歴史とかっていうと、ちょっと高尚なものになっちゃう。ちょっとお勉強かもしれないけど、自分たちの暮らしの支えを、面白く楽しく知っていく。うわ、自分らの住んでる滋賀県って、こんなに文化性高いんですよ。滋賀にいろんなものが作られる要因があったんだっていうことをみんなが知っていく。

今、京都への観光客がいつぱいで、京都から溢れている人たちが滋賀県の旅館・ホテルに泊まってはりますけど、よう考えたら、「これ滋賀県こそちゃうん？」みたいなね。でも、その滋賀県に住んでる人たちが、余りにも日常の暮らしが豊かなんで、当たり前すぎるんですよ。でも、その豊かさをちょっと意識し出すと変わってくるんじゃないかな。そういうものが渦巻いて集まってきたものが、僕は多分、新しい美術館なん

ちゃうかなと。

アサダ なるほど。美術館の機能ってことで言うと、場所を持ってこそできることってのは、この時代において何なんでしょうね。もちろんある意味では行政的には、もうハコモノどうなんだっていう議論も全国的にはあるわけです。それでも議論を積み重ねて、新しいコンセプトの美術館っていうハコを作ると。でも、それだからこそできることっていうのが、必要だと思える。その辺ってどういうふうに思われますか。

石川 だからね、僕、ちょっとずつ話してるんですけど、まず枠組み作ってる時点で、この枠がはずれ外れてくんだっていうことを、作ってるみんな自身がすでに想像してるんですよ。アール・ブリュットっていうのも、そうやと思う。現代美術だって仮の言葉であって、何が起るかはほんとうは分からへんわけですね。やっている自分ですら、まだ理解できてへんようなことです。でも、みんながそういう気持ちで取り組むべきものなんやないかなあ。

滋賀県の美術館という館は一応あるけど、この近江の国全体を美術として、新しい美術として言おうとすることを、世界みんなが感じてくれるようなことをわれわれが示すことができれば、これ多分、あんまりない。

アサダ 滋賀全体を美として捉える入口として象徴的に美術館っていうのはあるんだと思うんですけど、それが象徴で終わるだけじゃなくて、具体的なプログラムや、機能ということに落とし込んで美術館自体を生かしていくのはすごく必要なことかなと思います。

石川 仏壇のお洗濯の展示の仕方であったり、一方では、ミニマルアートであったり、また片一方では暮らしそのものであったり、そういうものが、なだらかにつながって見えてくるわけです。だから、際立った美

術もあれば、信仰もあれば、そういった暮らしも、全部がこの人たちの文化であり、ひよっとしてこれが美術館なんかになっていうふうには、その新生美術館を訪れる人がそういうイメージができたらいんじゃないかなって思います。だから、僕はもう一つ大きいテーマにみんなで向かっていくべきなんかなって思っています。

アサダ どうもありがとうございます。

アサダポイント

石川さんのお話は、常に「個人の表現と社会のための枠組み」の狭間に焦点があたっている。アール・ブリュットというコンセプトが今の社会に必要で、それを理解しつつも、実は「表現にそもそも境界はない」ということをわかつたうえで、われわれは常に仮の言葉を用いながら、先に進むとする。それはNO・MAの様々な展覧会にこめられてきたメッセージとも通じることなのではないだろうか。

美術館だからこそできる

アール・ブリュットの展示について考えてみる

渡辺亜由美（滋賀県立近代美術館学芸員）



渡辺亜由美（わたなべ・あゆみ）
1984年生まれ、千葉県出身。東北大学美学・西洋美術史研究室卒業、大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻西洋美術史研究室修了。2014年より現職。専門は近現代美術史。

渡辺さんは、東北大学と大阪大学大学院にて西洋美術史の研究をされたのち、東京での出版社勤務を経て、現職に。滋賀県立近代美術館では、近現代美術とアール・ブリュットの担当をしている。その背景には、この美術館が、これまでの近代・現代美術と共に、滋賀の誇る仏教美術やアール・ブリュットも新たな収集・展示の柱に加え、滋賀ならではの多様な美を発信してゆくという「新生美術館」のコンセプトがある。これまで、滋賀のみならず全国各地で、アール・ブリュットをはじめ障害福祉の現場から生まれる表現活動をテーマに放送してきたこの番組として、改めてそもそもアール・ブリュットという言葉のもつ原点にも立ち返りながら、公立美術館という場ならではのアール・ブリュット展示の可能性について、渡辺さんとともに語り合った。

アール・ブリュットとの出会い

学生時代は、フランスの画家アンリ・マティスを研究していたという渡辺さん。滋賀県立近代美術館の学芸員となり、ひよんなことからアール・ブリュットの担当となった。大阪大学大学院時代に、NOMAにも度々訪れ、アール・ブリュットに触れてはいたという彼女は、喜舎場盛也さんなど大量の文字を描く作品などに圧倒され、「ダイレクトに響く表現が、そのときはこわいなあと感じた」と語った。関西に来て、自分の中の作品を観る幅を広げようとしていた時期に、アール・ブリュットに出会ったことが、

どこかで現職とつながっていったのかもしれない。

滋賀の障害福祉から生まれた造形の歴史

放送のちょうど一年前の2015年秋に滋賀美で開催された『生命の徴 滋賀と「アール・ブリュット」展』は、彼女の最初の大きな仕事だ。展示は、まず戦後の近江学園での粘土を使った造形活動などの歴史から、スタートする。渡辺さん曰く、「近江学園や信楽学園などは製品づくりに行くんですけど、田村一二先生が作った一麦寮では製品ではなくてもうちょっと造形活動を重点的にやっていたという流れがあったり。製品と造形っていう二つの流れが発生してできた部分が面白いと思います。こういった歴史に、陶芸家八木一夫さんの存在や、絵本作家で美術家の田島征二さんの存在なども紹介されるわけだが、とりわけアサダも展示会の現場で関心を持ったのが、現代美術家高嶺格さんの作品が展示されていたことだ。

アール・ブリュットの「目撃者」も共に展示すること

高嶺さんは、2004年のNOMAのオープニング展覧会「私あるいは私」静かなる燃焼系」にも出展していた作家だ。また彼は八幡堀とNOMAを使ったとても印象的な結婚式を開いている。その結婚式の記録と、彼自身がパートナーとの間で逡巡し続けたモノログによって成り立つ作品《ベイビー・インサドン》（2004）を発表している。「アール・ブリュット」と名が付く展覧会で、この作品が展示されることは、表面的に見れば「うん？」ってなる人もいるかもしれない。しかし、渡辺さんは、アール・ブリュットが見出されて来た現場（例えばこの場合はNOMA）や、その歴史に立ち会った「目撃者」として、その人物の作品や行為をキュレーションしていたのだ。「滋賀の障害のある方の造形の歴史を見てきた

滋賀と「共に考える「アール・ブリュット」

もちろん彼女の挑戦には、誤解も付いてまわった。「予想されていたこととして、展示されていた作品が、すべて障害のある方の作品なんですよ？」って聞かれましたよね。そこに課題を感じつつも、好意的な意見もたくさんもらったことで、滋賀の障害のある人たちの造形活動の歴史をもっと調べたいという気持ちが高まったと話す。「そもそも日本にアール・ブリュットがあるとしたら、それは何なのか？ みたいな問いを立てるとして、それを考えるきっかけとして滋賀県の取り組みはすごく大事なことをやってきたと思うんです。『生命の徴』の副題に改めて着目すると、まず「滋賀の」ではなく、「滋賀と」であること。そしてアール・ブリュットに「」が付いていることに気づく。滋賀という風土を学ぶことから、世界各地でパラレルに解釈し続けられてきた「アール・ブリュット」というコンセプトを捉えてみる。これは滋賀という土地にある公立美術館に勤める渡辺さんの立場としても、とても誠実な態度なのだと思います。

福祉現場の造形活動 — 作業でもあり表現でもありを

見守るなかから見えて来た地域福祉への道

中島秀夫（社会福祉法人グロー（GLOW）理事）



中島秀夫（なかじま・ひでお）

1979年（社福）しがらき会音楽青年寮に入寮、一年目園芸作業班、1980～1981年施設外就労班、1982～1983年最重度班を経て、1984年から1995年まで陶芸作業班に所属。このころ絵本作家の田島征三氏や陶芸家の鯉江良二氏はじめ若手のアーティストとコラボが始まり、関西、東京などで頻りに展覧会を開催。その後、1995年から甲賀郡心身障害児・者コーディネーター（相談員）として障害児・者の地域生活を支える相談支援体制づくりに取り組む。2001年から滋賀県社会福祉事業団企画事業部に転職し、地域ケアシステム推進担当として、甲賀の仕組みを滋賀県全域に広げる活動を展開。2005年から甲賀地域ネット相談サポートセンター所長、2006年から滋賀県障害者自立支援協議会事務局長。

中島さんは、滋賀県甲賀市にある知的障害者授産施設信楽青年寮にて障害のある方の陶芸作業の支援をはじめ、彼女らの生活を施設から地域へと進めるための様々な事業に関わってきた。現在は、社会福祉法人グローの理事として、また、滋賀県障害者自立支援協議会の事務局長として、地域で暮らす障害のある方の各々のニーズに合ったサービスを提供するための相談支援など、様々な仕組みづくりをしている。放送では、信楽での陶芸活動の現場のエピソードや、現在ではアール・ブリュットとして世に紹介された作り手の方とのエピソードを通じて、福祉現場における造形活動の可能性を探った。

障害者がまちと溶け込む風景

中島さんが11年間携わった信楽青年寮の陶芸作業班では、障害のあるメンバーが粘土で作った作品を焼成するのがもっぱらの仕事だった。信楽は地元ではあったが陶芸経験はなかった中島さんは、信楽窯業技術試験場で1年間勉強。現在では滋賀県を代表するアール・ブリュット作家としても知られる伊藤喜彦さんが生み出す「鬼の面」の制作にも携わったと言う。陶芸班の中には、就職班と寮内作業班があり、就職班は地域に出て寮元で働き、そこで給料をいただく。当時、陶芸班60名のうち30名が就職班だったのだから、地域就労という意味でもこの取り組みはかなり先駆的だったのだろう。その実践が可能だった背景として、信楽青年寮創設者の池田

太郎氏の存在が欠かせない。戦後、糸賀一雄氏、田村一二氏とともに滋賀県から日本の障害福祉の礎を築いてきた池田氏が、障害者をいかにして地域に出し、地域に溶け込ませるか。地域住民に理解してもらうための説得と交流の努力を惜しまなかった池田氏の存在をベースに、彼女らが信楽のまちに受け入れられていった歴史を、中島さんは語ってくれた。これらの実践を形にした西山正哲監督映画『しがらきから吹いてくる風』（1990）の中で、アサダが印象に残っているシーンがある。寮元に働きに行く障害のあるメンバーと通学途中の地域の小学生たちが交わるシーンだ。とても自然な感じで挨拶を交わし合う、その一見何気ない風景ができるまでも、中島さんたちの努力の積み重ねがあったのだろう。多少のトラブルがあったとしてもそれを恐れず、この風景を日常とすることが、とても大切だと感じた。

「手を加えずそのまま出す」という価値転換

「彼らの作品がどれだけすごいのか、すごいのか、正直わからなかった」と、中島さんは少し反省まじりに振り返る。自分の思いを粘土で形にしていくなか、当時の中島さんからすれば「これって意味があるのかな・・・？」と、どこかで思っていた。毎日大量に使う粘土代だってもちろんバカにならない。できあがったものを彼らが帰った後に、「これは残そう。これは土に戻そう」と勝手にやっていたこともあると、正直に語ってくれた。しかし、田島征三さんをはじめとしたアーティストが施設を訪れる中で、作品に対する見方が訪れる。授産施設として、コーヒーカップなど実用品も作り販売していた中で、メンバーがつくるそのギザギサの飲み口のカップを職員が手を加えることなく、「そのまま」出す。すると以前より10倍以上の値段で出しても、作品の魅力ゆえに売れていく様

子を目の当たりに。これまで出会わなかった芸術ならではの価値観を手にした中島さんは、日々共に過ごすメンバーとも出会い直しを果たしたようだった。

今と地続きにあるあの時代

伊藤喜彦さんは素晴らしい造形作家であるのみにあらず、ユニークな「言葉」の作り手でもあった。信楽青年寮がデザインした包み紙には、伊藤さんの代表的な口癖、「全国的に心おさえて」「情けない」などが印刷される中、中島さんはほかに様々な言葉を紹介してくれた。とりわけ素敵なのが、「まもなく夜を輝く 青空を見つけよう」など。中島さんは当時を振り返りつつ、収録の最後に、現在の相談支援の仕事やNOMMAの開設に関わった経緯などを紹介。現在は、相談支援の専門家として全国的に知られる中島さんの歴史の中に、信楽青年寮での造形の営みが今と地続きに存在することを発見できた放送となった。

地域と呼吸するアーツの取り組み、そしてアール・ブリュットの可能性

小暮宣雄（京都橋大学現代ビジネス学部教授）



小暮宣雄（こぐれ・のぶお）
1955年大阪市生まれ。東京大学法学部卒業後、23年間旧自治省に勤務。ふると創生の担当や財団法人地域創造の創設などに関わり、2001年に大学教員となり現在に至る。大学に移ってからは、アーツマネジメント（芸術賞）を中心とした文化政策・公共政策を研究している。著書に『アーツマネジメントみち』（晃洋書房）、「アーツマネジメント学—芸術の営みを支える理論と実践的展開—」（水曜社）など。

小暮さんは、芸術と社会の出会いをアレンジすることを意味するアーツマネジメントの研究に従事し、芸術が地域社会に果し得る役割などについて様々な提案をしてきた。またポータレス・アートミュージアムNOMMAの活動を開館初期から支え続け、様々な地域交流プログラムの企画にも携わってきた視点から、地域社会の中でこれからアール・ブリュットがどのような可能性を發揮しうるかを伺った。

アーツマネジメントを近江八幡で

小暮さんは、関西各地でアーツマネジメントにまつわる現場を、たくさん実践・研究されてきた。勤務大学の京都橋大学では、2005年に「街角アーツ」と題し、山科の街中を移動する紙芝居や演劇を行い、その流れから、障害のある人やアーティスト、様々な背景を持つ市民で作り上げる「めぐるめく紙芝居」の運営も担ってきた。特徴は、アーティストがイニシアチブをとるというよりは、障害のある人もヘルパーも学生も一緒に楽しめる状態をつくる実践であることだ。こういった実践は、小暮さんが命名の段階から関わっているNOMMAの地域交流プログラムづくりにもつながっている。

小暮さんは、近江八幡市の八幡堀りを始めとした水文化に着目。水に親しむことは同時に危険もあり、そこで水に近づくと子どもたちは河童にさらわれるかもしれないという、河童伝説をモチーフに子どもたちとカッパ

を探す「かっぱはどこにいる—八幡堀カッパ探し」（2008）を開催。続けて翌年には、八幡山に着目し、「八幡山に天狗を探せ!」（2009）を開催し、地域の子どもたちと林業関係者とコラボし、天狗をおびき寄せるための住処（小屋）を実際に八幡山で制作したり、その住処をもとに天狗の物語を作り、それを紙芝居にしたり。すべてが最初からあつた筋書きではなく、また子どもたちに対する教育的な側面だけでなく、その時々々の即興性も大切にすることで、「予定にないことを楽しむ」という体験を、地域に運んでいったのだ。

まちのスキマで生の自分になる

小暮さんは、NOMMAで行っている街中企画展「アール・ブリュット☆アート☆日本」（界限展）シリーズにも、多大な関心を寄せている。NOMMA界隈の複数の町屋や商店で行ったこの第2回界限展（2015年2月21日～3月22日）を体験した小暮さんは、2点のお楽しみポイントをあげた。1点目は、普段見過ごす街角に関心を向ける面白さ。小暮さん曰く「（文房具屋さんなど）普段（用がないと）入らないところに入ってゆける、ちょっとドキドキ感」。2点目は、ある高校を卒業したばかりのボランティアの関わり方について。この展覧会は近隣住民を含めた有償ボランティアの方が多く参加しているが、小暮さん曰くある意味それは「まちのスキマ的時間」を経験するいい機会だったのではないかと。と同時に、まもなく大学にある直前にこういった経験をしたかった本人としては、「自分の成長の一つの記念にもなるし、実は全然芸術とか興味ないしこれからもない」ととても素直な発言をしていたとか（笑）。小暮さんはこう語る。「それはそれでいいと思うんですよ。めぐるめく紙芝居をやっている、ヘルパーさ

んは全然興味ないよ」って言っていて、でもそのわりに結構楽しんでました。街の人にアール・ブリュットの理解者になれって言うのではなく、むしろ（その人自身が素でいられるという意味での）ブリュットのまま、生のままの状態がいいし、逆にそうあることが（日常では）難しかったり」。界限展のボランティアという機会が「まちのスキマ」となり、「生の自分」になれる時間を確保していたなら、それは素晴らしいことだろう。

闇と対峙することと日常の些細な気づきが同居する

第2回界限展ではNOMMAの全館を使って、アール・ブリュットの象徴的存在である、アドルフ・ヴェルフリの作品が展開されていた。闇に包まれた空間の中で見出されたのは、アーツというものが、人々がつながったり絆が生まれたりということだけではなく、根源的な孤独に向き合う機会でもある点だ。自分というものに、社会的な役割とかなしで本当に対峙していく。そういった面白さとショーウィンドウにあるような日常の些細な気づきとが同居する界限展では、まさに様々な自己と他者との出会いのアレンジが施されていたようだ。最後に、限界芸術という概念にも触れながら、この展覧会の魅力を語り、2013年に出された著書「アーツマネジメント学—芸術の営みを支える理論と実践的展開—」から、小暮さんが提案したアーツマネージャーの5つの動機を紹介するなど、一貫してアーツマネジメントという視点を持った貴重な収録となった。

④ 第40・41回放送（2014年7月4日、11日）

滋賀の生活美とアール・ブリュット

上田洋平（滋賀県立大学地域共生センター助教）

四季折々の趣を見せる山々と日本一の琵琶湖が奏でるシンフォニー。滋賀ではこうした穏やかで美しい環境の中で、自然と共生する独自の文化が育まれてきた。また、滋賀の福祉の歴史を背景にしたアール・ブリュットの存在も、生活の中から紡ぎ出された美術と考えられるのかもしれない。上田さんと滋賀ならではの生活美を発見しながら、アール・ブリュットについて話し合った。



④ 第94回放送（2015年7月17日）

アール・ブリュットと地域づくり 湖北アール・ブリュットの取り組みから

廣部猛司（湖北アール・ブリュット展推進会議 理事長）

滋賀県長浜市を拠点に活動する廣部さんをゲストにお迎え。長浜市と言えば、長浜曳山まつりや黒壁スクエアの存在、豊臣秀吉や浅井三姉妹などにもまつわる大河ドラマの舞台としても知られている。歴史観光と地域づくりが一体となったこの地域で、今アール・ブリュットが話題になっている。長浜ご出身でもある廣部さんに、アール・ブリュットの魅力と、長浜の地域づくりの関係についてお聞きした。



④ 第102・103回放送（2015年9月11日、18日）

アール・ブリュットとMUSUBU SHIGA

服部滋樹（MUSUBU代表、クリエイティブディレクター）

服部さんは、家具、空間、グラフィック、プロダクトデザイン、アートから食に至るまで「暮らしのための構造」を考えてものづくりをするクリエイティブ集団「MUSUBU」の代表として活躍している。服部さんは2014年より、滋賀県ブランディングディレクターに就任。服部さんの視点から、滋賀県の文化やアール・ブリュットがどのように見えるのかを伺った。



④ 第133・134回放送（2016年4月15日、22日）

まちとアール・ブリュットの幸せな関係 —— 近江八幡をきっかけに ——

井口貢（同志社大学総合政策学部教授）

地域の暮らしの中に根づく文化芸術や観光をテーマに研究されている井口さんは、NOMAがある滋賀県近江八幡市の旧市街地を舞台に、学生たちと様々なまちづくりに関わっている。また、10数年前のNOMAの立ち上げにも尽力され、アール・ブリュットがこの街に根づく様子を見守り続けてきたひとりである。井口さんとともに、地域とアール・ブリュットの間のお話を伺った。



① 第138・139回放送（2016年5月20日、27日）

続・滋賀ならではの美、ってなんですか？ アートの視点から考える

伊熊泰子（新潮社「芸術新潮」編集者）

伊熊さんは小中高と滋賀県大津市で過ごし、大学進学を機に上京。その後、新潮社にて写真週刊誌「FOCUS」、月刊誌「芸術新潮」、隔月刊誌「旅」などの編集者をしてきた。滋賀県とも縁が深い彼女は数年前から滋賀県固有の文化、美の力、そしてアール・ブリュットにも関心を寄せている。そんな伊熊さんと「滋賀ならではの美、ってなに？」というテーマで様々なアートシーンから語っていただいた。



① 第150・151回放送（2016年8月12日、19日）

アール・ブリュットを巡る国際交流 〜日本と欧州の場合〜

齋藤誠一（社会福祉法人グロー（GLOW）法人本部企画事業部次長、アール・ブリュットインフォメーション&サポートセンター（略称・アイサ）所長）

齋藤さんは2006年からこの十年、NO・MAの事業運営を担当され、これまで数々の海外、とりわけヨーロッパのアール・ブリュットシーンとの交流を深めてきた。先日齋藤さんが10日間にわたり、イギリス、フランス、スイス、オーストリアの様々なアール・ブリュットにまつわる美術館やアトリエを訪ねられた際のレポートをお届け。日本のアール・ブリュットは海外ではどのように受け止められているのかの報告をした。



① 第153・154回放送（2016年9月2日、9日）

アール・ブリュットを見つけ出すこと ―国内とタイの作品調査現場から―

安藤恵多（社会福祉法人グロー（GLOW）法人本部企画事業部主任主事）
山田創（社会福祉法人グロー（GLOW）法人本部企画事業部自立生活支援員）

お二人は、これまで日本全国の福祉施設や精神科病院、個人宅やアトリエなどを訪問、アール・ブリュット作品とその作り手の全国調査を手掛けてきた。アール・ブリュットにまつわる展覧会を開催できるのは、やはり作り手や作品の存在があつてのこと。その調査の動きは現在アジアにまで渡り、韓国や台湾、マレーシアやタイにまでおよんでいる。それらの様子、特に最近調査を行っているタイの話を中心に報告した。



① 第188・189回放送（2017年5月5日、12日）

アジアをつなぐアール・ブリュット タイ編 ―Art Brut in Thailand and Japanの取り組みから―

鈴村りえ・山田創（社会福祉法人グロー（GLOW）法人本部企画事業部学芸員）

NO・MAでは2015年からタイにてアール・ブリュット作品の調査を始めている。その成果として、2017年3月に両国のアール・ブリュットの展覧会とシンポジウムをバンコクのチュラロンコン大学ミュージアムで開催した。このプロジェクトを担当している鈴村さんと山田さんから、アール・ブリュットが様々なアジアのネットワーク、そして日本とタイの文化交流から見えて来た、両国の共通点や違いなどをお届け。



① 第190・191回放送（2017年5月19日、26日）

祭礼と表現 写真家 辻村耕司のお仕事から

辻村耕司（写真家）

滋賀県在住の辻村さんは、長年滋賀県の各地をくまなく歩き回り、人間の営み、生活文化と密接する祭りや習わし、自然を撮影し続けてきた。不可思議な魅力を放つ祭礼。祭りのルーツには、祈りや感謝、慰霊などがあり、辻村さんのレンズは、そうした古来から続く人々の営みとともに、そこに流れる感情や思考そのものを捉えている。NO・MAで開催された企画展「三田開眼」にも出展した辻村さんから、滋賀県の祭礼の話題を中心に、そこで生まれてきたデザインや表現を、アール・ブリュットの魅力とも絡めながらお話しした。



① 第216・217回放送（2017年11月17日、24日）

2017 ジャパン×ナントプロジェクト アール・ブリュットと国際交流を振り返って

西川賢司（社会福祉法人グロー（GLOW） 法人本部企画事業部文化芸術推進課長）
原田綾子（社会福祉法人グロー（GLOW） 法人本部企画事業部自立生活支援員）

2017年10月末からフランスのナント市で開催した「2017 ジャパン×ナントプロジェクト」の話題をお届け。世界的な文化芸術創造都市であるフランス・ナント市で、アール・ブリュット展や、滋賀県の湖南ダンスワークショップグループのダンス、長崎の瑞宝太鼓の演奏など、ワークショップやバリアフリーの映画上映などが開催された。この様々な文化プログラムの開催を通じて、障害の有無や国境を超えて、文化で創造的な社会を発信してゆく取り組みを報告した。

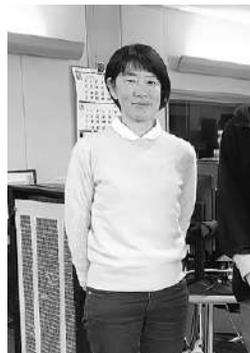


① 第218・219回放送（2017年12月1日、8日）

映像表現から見えてくる滋賀の美 ― 伝統文化やアール・ブリュットに携わって ―

長岡野亜（映像作家）

長岡さんはこれまで滋賀県近江八幡市を舞台に、農村再生ドキュメンタリー映画「ほんがら」や市民制作ドキュメンタリー映画「結い魂」などを制作してきた。映画の特徴は、ある出来事を記録するに留まらず、その地に暮らす住民の皆さんが自らの伝統文化の継承や地域再生の道を切り拓いていき、そういう市民活動を後押しするような映像制作の可能性だ。障害のある人たちとダンサーによる「湖南ワークショップグループ」の記録を撮ったり、NOMAの展覧会でも上映会を行なってきた長岡さんにお話を聞きした。

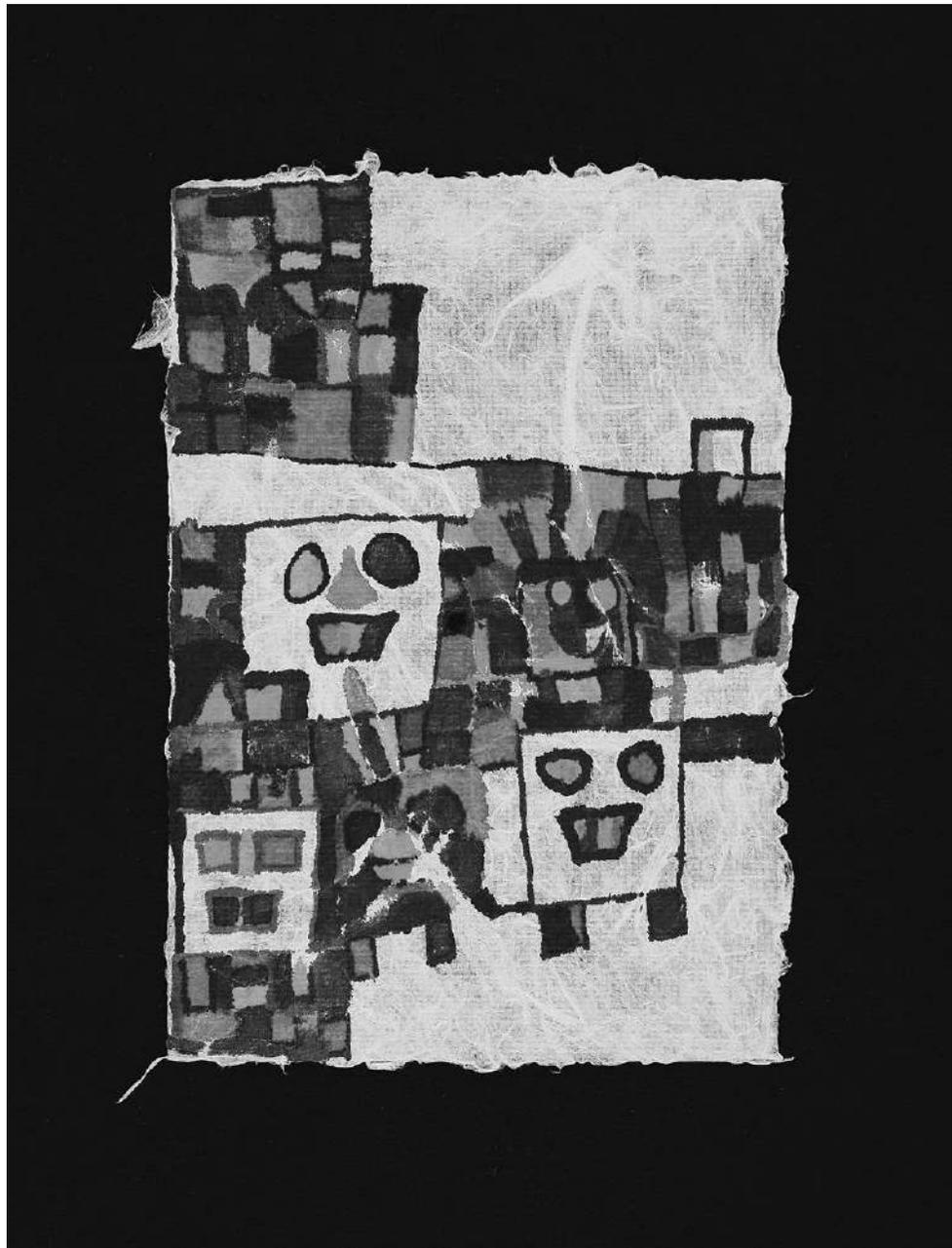


① 第227回放送（2018年2月2日）

新たに生まれ変わる美術館 ― 滋賀の多様な美の魅力から ―

木村元彦（滋賀県新生美術館整備室）

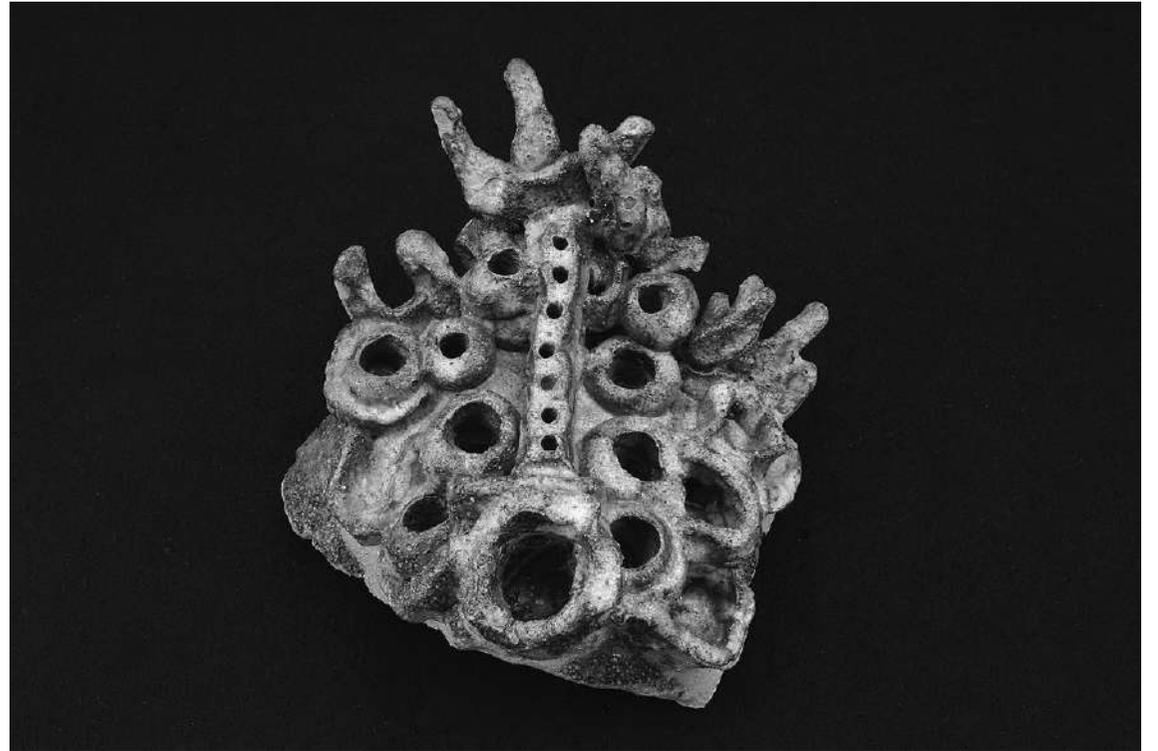
滋賀県では滋賀県立近代美術館のリニューアルオープンに向けて、様々なプログラムが検討、実施されている。この新たな美術館のコンセプトは、従来からコレクションされてきた近現代美術作品、そして滋賀県の仏と神の美、そしてこの番組で語ってきたアール・ブリュット、この3つの柱のもと、地域に開かれたこれまでにない美術館が生まれる予定だ。そのコンセプトの話から、この美術館が何を目指して立ち上がってゆくのかをお聞きした。



村田清司
無題
制作年不詳

6

アール・ブリュットの切り開く未来



伊藤喜彦
《鬼の顔》
制作年不詳

番組200回記念対談・田島征三×北岡賢剛／ アール・ブリュットがつかないだ二人の出会いと これまでの25年間を振り返る。

いよいよ番組200回突入ということで、3年半以上毎週福祉と芸術にまつわる話題、そしてアール・ブリュットの魅力を伝えてきました。そんな記念として、アール・ブリュットがきっかけとなり25年間交遊を続けてこられた、美術家で絵本作家の田島征三さんと、社会福祉法人グロリー理事長の北岡賢剛さんにご出演いただいた。二人の出会いを振り返ることから見えてくるのは、日本の障害福祉現場から生まれた造形活動の可能性だ。

北岡賢剛（きたおか・けんこう）
1958年福岡県生まれ。筑波大学院障害児教育研究科終了後、1985年から滋賀県甲賀市の知的障害者施設「信楽青年寮」のスタッフ～副寮長を経て、社会福祉法人「オーブンスペースれがーと」理事長。2001年に現在の社会福祉法人グロリーの前身、滋賀県社会福祉事業団企画事業部部長、2007年に理事長に就任。障害のある方が地域で当たり前に暮らせるシステムづくりを進め、近江八幡市「ボーダレス・アートミュージアムNO-MA」の企画運営など、福祉と様々な芸術文化をつなぐ活動も積極的に展開。

田島征三（たしま・せいぞう）
1940年大阪府生まれ。幼少期を高知県で過ごす。1965年初めての絵本「ふるやのもり」出版。1969年、東京都西多摩郡日の出村（現日の出町）に移り、タプロー・版画・エッセイ・絵本などを創り続ける。1998年、伊豆半島に移住。2009年、新潟県十日町市の廃校になった小学校を丸ごと絵本にした「空間絵本」を制作、「絵本と木の実の美術館」とし、現在も開館中。2013年、香川県大島で、ハンセン病の元患者の療養所で、入所者が暮らしていた建物を丸ごと「空間詩・青空水族館」にした。



土鈴が導いた運命的出会い

アサダ よろしくお願ひします。まずは、お二人の出会いからお聞かせください。

北岡 どれが最初かも忘れたよね。ただ忘れた中でも印象に残ってるのは、三重県四日市にあるメリーゴランドという子どもの図書専門店で、征三さんが小室等さんの歌に合わせて絵を描いていた話かな、いや、もっと前かな。そこへ僕が伊藤喜彦さんの土鈴を持って征三さんを訪ねたというのが、やっぱあれが最初かな。

アサダ 伊藤喜彦さんは信楽青年寮におられた方ですかね。

北岡 そうですね、信楽青年寮がスタートした時（1955年）からずっと暮らしてる人で、信楽の土を使っって土の鈴を作ったり、いろんな創作物を作ってた人なんです。

田島 伊藤喜彦さんに関してはもうほんと一冊本が書けるくらい思い入れがあるんだけど、北岡賢剛との出会いというよりか、伊藤喜彦の土鈴との出会いの瞬間なんです。僕は絵本作家と言われてるんだけどあまり絵本のことは興味ないの。全くと言っていいくらい。

1 1943、フォークシンガー・音楽家。1980年代後半から信楽青年寮を訪れるようになり、以降も長年にわたり滋賀での活動を続けている。糸賀一雄記念賞音楽祭では第十一回から総合プロデューサーとして参加。糸賀一雄生誕100年を記念して制作された「ほぼえむちから」の作曲を担当。

むしろ絵本嫌いなんだよね。自分の絵本は好きだよ。何人か好きな絵本作家はいるんだけど、ほとんど99%かつかんだよ。だから絵本見てないの。けど、それはいけないだろうから人の絵本も見ましようということ。そこは絵本屋さんですよ。

アサダ メリーゴーランドですね。僕も行ったことがあります。すごい絵本屋さんですよ。公民館みたいにいるんなこともやってて。

田島 絵本だけじゃないんだもんね。だから見なきゃと思っただけじゃなく、その土鈴からクワーツとオーラが出てんの。本を平積みにした棚からね、何だろう、手ももうそこへいっちゃうんだよね。だから絵本じゃなくて結局土鈴なんです、なんか土の塊が置いてあるだけなんです。なんだこれはーっていう感じで見たら500円で書いてあった。

アサダ 売ってたんですか。

田島 北岡さんは色んな所へ営業に行ってたんだね。要するに作業主任だから、陶芸班とか和紙漉き班とかいろんな作業してる人の作品を買ってもらおうと、方々へ製品を置いていった。その一つにメリーゴーランドがあった。でも見た感じもうすごい、何て言うの圧倒的な力。僕の描いている絵の根本はね、縄文時代なん

ですよ。縄文の土器に僕は二十歳のときに出会ってもうその虜になって。そこから僕の絵が始まったんだけど、同じ光というかオーラがそこからパワッと出て、うあーって感じでね。それ持って500円払わなきゃと思っただけ。とにかく持って帰ろうと。

北岡 あーそうかそうか、そこで俺がお礼を言ったんだ。

アサダ 田島さんが伊藤喜彦さんの土鈴を買う時に立ち会っていたというか、その時にお二人は出会ったんですね。

田島 そこでほら、北岡が「ありがとうございます」とかお礼を言うから「なんだよー、俺に。」みたいな。

北岡 そういうことありましたね。だからやっぱり征三さんとはあそこが初めてじゃないんだよね。もうどうでもいいな。

アートでしか与えられない感動を信じる

アサダ 30年前ぐらいの話なんですよね。そこから現在まで続いている交友だと思えますが、それから何か一緒に活動されたりしたんですか。

田島 旅、いろんな旅をしましたね。ちよつとね、その後はほとんど信楽青年寮っていう施設にのめり込ん

でいって、まあそこには伊藤喜彦だけじゃなくいろいろな人たちがいて、それでその人たちがやってること

が凄い。僕には初めての体験だからね。知的障害の人たちと付き合いはなかったんだけど。その時の寮長さんの林さん²、その方の方針とか良かったんだと思うね。物を作ることをやっているということが。最初に行った時、池田先生がいたんだよ。

アサダ 池田太郎さんですね。

田島 そんなんで池田先生の話の聞いたり、林寮長の話を聞いたりしながらいろんな入所者の人たち、村っちゃん(村田清司さん)、きよしさん(酒井清さん)とかね、村田さんは絵を描く人なんだけどそれで絵本作っちゃったりね、まあいろんなことをしたんだけど、その結果を本にまとめたんですよ。

僕はのろいんだけど、それをまとめてくれる非常に魅力的な編集者がいて、そこへ北岡がよしやろうと、まあ結局その編集者がいくら熱心でも、会社にこんな本出しても駄目だぞと言われるといけないから、北ちゃん(北岡)がそれ売りますみたいなき感じだった。

北岡 「ふしぎのアーティストたち」ですね。それは責任を持って売りますからとか言ってるね。2000冊くらい売ったよね。

アサダ あーなるほど、それを売るためのツアーって

ことですよ。それで全国各地回られた。

田島 牛しかないような町にも行ったよ。

北岡 北海道。

田島 牛しかないのね。「ふしぎのアーティストたち」これはヨーロッパでも精神障害の人たちの芸術について書いているいろんな本があるけど、それは例えば日本で言えば山下清の何だっけ・：⁵ 式場隆三郎さん。あの人は治療・教育の面で。

アサダ 精神科医でもありますもんね。

田島 だいたい治療の面と教育の面、福祉の面どっからそれを書いている。芸術そのものについては書いてないんだよね。「ふしぎのアーティストたち」って本は彼らの作ったものを芸術として書いている。アートの面で光をあてているだけで、福祉のことなんか蹴っ飛ばし、治療のことも蹴っ飛ばし、あと何だっけ、教育のことなんて全く関係ないって書いてあるから、ある意味批判的に思う人も多かったと思うんだよ。だけどそのことを評価してくれた人もいた。

北岡 「ふしぎのアーティストたち」の本を作るプロセスで、僕ら、というか私自身ももちろんそうですけど、この作品の面白がり方や味わい方、素晴らしさの感じ方とかそういうものを征三さんがどんどん言葉にした。すごく真面目な話なんだけど、最初は、征三さんのあ

2 現社会福祉法人しがらき会理事長 林晋

3 1908・1987 1946年、糸賀一雄、田村一二と近江学園を創立。1952年信楽寮(現信楽学園)、1955年信楽青年寮を開設。知的障害児・者の療育に力をそそぎ、全国初の成人を受けとめる信楽青年寮の開設、現在のグループホームにあたる民間下宿の開拓、事業者の協力を得ての就労など、地域を取り込んだ先駆的な福祉を实践した。

4 「ふしぎのアーティストたち」信楽青年寮の人たちがくれたもの」田島征三著 労働旬報社1992年10月発行

5 1898・1965 精神科医。1936年千葉県市川市に精神科病院(式場病院)を開設。また同市の知的障害児施設であった八幡学園の顧問となり、そこで山下清と出会い、彼の作品を世に出した。また、美術に深い関心を寄せ、ゴッホやロートレック、ゴーギャンといったヨーロッパの画家たちを先駆けて紹介し、精神科医の立場から研究して伝記を書き上げた。

種の優しさとしてこれらの作品に対する評価は出て
るのかなーって思っていた。僕たちそういうアートと
しての評価と出会ったことがなかったからね。

したりとか人の畑のもの盗んできたりとか、そういう
こと全く平気で正しいこととしてやってるわけだ。そ
ういう人を尊敬できないと。あー喜彦君またいらんこ
とやって、みたいなそういうふうには見えない。け
どこの人、大芸術家なんだよ。大芸術家がそういうこ
としてんだよ。例えばピカソなんてやってることがめ
ちゃくちゃですよ。ミロなんかうんこで絵描いたりし
てるんだよね。あのルノールなんてね、おちんちん
の先に絵の具つけて描いてるんだよ。女中さんが目撃
してんだよね。そういう奇行というかね、明らかに常
識人としてはいけないというか、間違ってるというか。

北岡 まあ感動はしてても、そこまで感動してんの？
ちよっと優しさが入り込んでるんじゃないの？ っ
思ってた。それは征ちゃん(田島)も、多分僕がそん
なふうには最初は思ってたことを感じてたと思うんだ
けど、いよいよ本ができて全部読んだ後、僕らが障
害のある人たちを見てきたり考えてきたというか捉
えてきた、そういうことを本当に根こそぎひっくり
返されたっていう感じが僕は強くあった。それから
征三さんの優しさとさっき言ったけれど、はるかに
それを超えて本気でこの人は彼らの作品に惚れてん
だ、評価してるというかもっと言えばライブルって
いうかこの人たちに負けたくないって思ってる感じ
がした。

うね。それに対する怒りというのがあって、あの本の奥
には怒りがあるんだ。何で認めてやらないんだ、こん
なすごいのに何でこれをちゃんと評価しないんだとい
うね。

田島 僕は一番腹が立ったのは、色んな人がいいわね
これ、かわいいわねって言うてるけど、尊敬の念がな
いんだよ。例えば伊藤喜彦って大芸術家だよ。けどな
んか彼はうんこをそこらじゅうでしたりとか、物を壊

北岡 そのうち征三さんは、以前僕が勤めていた信楽

青年寮の今で言うと日中活動、昼間の活動の在り方に
も意見を言うようになってきた。それは全く面白い。
絵を描くっていうのは余暇時間でしょうというのが施
設の中であって、それを征三さんは何言ってるんだと言
って、朝から夕方までこんなつまらない作業させるん
じゃなくて、絵を描いてもらったらいいじゃないかと。
俺なんかずーっと絵描いてんだ、現場で働いている君
たちの方が堅いんじゃないかというような主旨のこと
を言ったよね。そして新しい作業班ができたり、僕が
作業主任になって。征ちゃんが影響を受けて、じゃあや
りましょうって言ったんだよね。

安く売っちゃったんだもん。
アサダ 売れちゃったけどもちゃんと値をつけてなか
ったって感じなんですか。
田島 そうだね。僕、好きで信楽青年寮へ行ってい
て、そこには村っちゃんやマッちゃん(松本孝夫さ
ん)のようなおっちゃんたちもいたりして、そんな
は、喜彦さんが「わしの人生情けない」ってそういう
口癖を言ってる、結局その口癖で歌まで作っちゃっ
たんだね。

田島 それはね、僕も感動したね。具体的にいうと村
田清司さんにしもやけができたって話。彼は紙すきが
好きで紙すき班にいたんだけど、本当は素晴らしい絵
を描いてるわけだから紙すきは好きかもしれないけど
絵を描いてほしいじゃないか、と。村田さんは心臓
が悪かったんだね。紙すきは血行が悪いからしもやけ
になりやすいでしょ。そういう欠点があるんだったら、
こんな素晴らしい絵をどんどん描けばいい。でも絵な
んか描いたってお金にならない。紙はまあ安くても買
ってもらえる。絵を買ってもらうのは大変だって。じ
ゃあ俺売ろうよって、絵を売ったんだよね、村ちゃん
(村田)の。でもあれは間違いだったね。だってすごい

アサダ 聞きました。「信楽から吹いてくる風」の主題
歌で。
田島 僕はそんなことしながらね、障害者を利用して
何かやってる自分っていうふうに思えたりして。実際
にはそれは違うという結論にはなったんだけど。何か
いろんなことやってた。
この施設は国から何か少しだけ金とかもらってるん
だよな。
北岡 運営費。
田島 それが、粘土もただじゃないんだからお金を稼
がないといけないとか、そういう問題があるじゃない。
伊藤喜彦なんてアーティストのすごい奴は、作るもの
も大きいしガンガン創るんだよね。だったらもうそん
なもの売れないし、邪魔なだけだ。そういうものに金

6 映画「信楽から吹いてくる風」
1990年 製作・シグロ、監督・
西山正啓

かけたくないか、そういうのが見え見えなんだよね。だからそれを、説得するには売るとか売れるようにするとか。

北岡 銀座のギャラリーで展覧会やろうって話になって、征三さんがまとめてきてそれで展覧会やったんだよね。そしたらすぐ売れてね。

田島 結局ね、福祉関係の人たちが施設に見学にきたりして、この紙一生懸命作ってるけど汚いわね、もつときれいにできないんですかって言ってるじゃん。ところがその汚さが銀座のOLたちにうけたんだよ。それでボンボン売れちゃって。宅急便で段ボール1つ送ってもらったり。最後は新幹線で運んだくらい。だから銀座っていう言ってみればこの時代が一番最先端っていうか、それがどうか分かんないけどそこに住んでいる人たちにとって、この信楽っていう田舎の施設で一生懸命漉いた紙がどんなに人々の心を感じて満たしたか、これまで気がつかなかったよ。

北岡 コーヒーカップも売れたよね。障害のある人たちが作るカップだからなんていうか揃ってないというか。それを職員がギザギザを揃える仕事をやって200円で売る。そうやって売ってたよ、当時は。でも、それを征ちゃんが職員のその仕事は無駄じゃないかって言いだして、そのまま1500円で売ろうという話にな

った。現金の話でいだけどね。また東京で。

田島 全部売れて予約が一杯。まあ要するに福祉っていう狭い、って言ったら失礼かもしれないけど、やっぱり限られた場所での判断を大事にしちゃダメだっていうことをね、そういう垣根・ボーダレスってことは本当の意味でそうだと思うんだよね。そこを取っ払うことで、この人たちは実はすごい人たちなんだって。

うんこ垂らすかもしれないけど、こんな素晴らしい人がいたんだってということが世間で分かってもらえようになるんだってたら、アートっていうのはそういう力を持つているんだと、あの本で言いたかったんだよね。福祉とか教育とか治療とか、そういうものをすっ飛ばしてアートっていうものが人の心にどんな大きな力を与えるか。銀座でOLやって、私は最先端のOLよ、みたいな人もいるかもしれないけども、心の中には淋しい風が吹いているのね。それが村っちゃんに漉いた紙に夢中になっている。私今、財布持っていないでこれは置いといて下さい！ って飛んで行って財布持って帰ってきて買っているうね、あの姿見ててアトトが与える感動っていうものが、人々を救ってる、人々に大きなパワーを与え栄養になってその人が生きる力をかきたてているかっていうね、そこに気がついたっていうか、そういう大事な仕事を彼らはやってた

んだよね。

北岡 この話は征三さんよく言ってたのよ。会う度に言ってた。それがやっとな僕たちの体の中、心の中、そこうかもしれないなあ、段々そうだからって自分の心と合致する。

アサダ 理屈じゃない所におちてくる。

北岡 そこまでたどり着くのによつと時間がかかっているけど、それを本当に自分たちのものにした瞬間に僕らの活動も大きく変わってくるのがあった。30年ぐらいい前だよ。信楽青年寮に征三さんが来るようになって30年経ってるんだけど、あの頃そういう話ってね、本当に田島征三しかしてなかったかもしれないくらい。

田島 俺ってちょっと早すぎるんだよ。今だったら普通だよ。あの頃ってそんなことを言うと、いろんなことと言われたね。

北岡 施設の職員から売名行為だとか。征三さんにそのことは正直に伝えて。そんなことやってたよね。

田島 まあね、冷たい目はあったね一部。

その心は本当に踊っているのか？

アサダ 2013年に「踊る細胞」っていう展覧会を

NOMAでやられてたじゃないですか。「踊る細胞

田島征三とアール・ブリュットたち」という展覧会のサブタイトルもついてたんですが、あらためて展示された時に、今と昔と、障害のある方の作品に対する捉え方や感覚が変わったことってありましたか。

田島 かいつまんで言うと、喜彦さん、村田さんもね、あの世に行った、そういう時間の経過はあるけど僕の中での空間の経過っていうかね。何か一つ片隅に、福祉や教育や治療と関係ないアートっていうすごいもんがあるんだぞっていうことに気がついた。

今もつと別のことに気がついてる。それは何かと言うと、なんでくだらない絵に何千万円とか何億円とかで買う人たちがいるのか。例えば教育者としても優れていて、画家としてもたくさん絵を描いているんだけど、何でこんなにくだらない絵が何億円もするの。あれは技術だけでしょ。技術だけで岩絵の具をたらしこむ、技術というのは大変で僕にはできない。けども、じゃあ村田さんの絵と比べてどっちがいいの。伊藤喜彦のあのオーラが出てないじゃん、何にも。そういう問題に気がついた。例えば、僕には尊敬する熊谷守一さんという画家がいるわけ、上手な絵を描くんだよ。すごく上手な絵を描くんだけど、ある時からそういうものも投げ捨ててね。そこでもデッサン力があるか

7 2013年2月1日〜3月30日
ボードレス・アートミュージアム
NOMAで開催された企画展。出展
者は田島征三、伊藤喜彦、酒井清、土
屋雅頭、高岡源一郎、谷口ちよ子、富
士川義晃、昆弘史、齋藤裕一、池田潤
哉、西村真智子、村田清司、国保幸宏、
南保孝、舛次崇、梅本良純。

8 18801977 画家 明る
い色彩と単純化されたかたちを持つ作
風で知られている。晩年は、花や虫や
鳥など身近なものを描き、多くの作品
を生み出した。

らしいんだみたいなこと言うバカがいるけども、評論家なんてほとんど必要ないからね。そういう必要のない人たちがデッサン力とか、構成力とかいろいろ言ってるけど、そうじゃないんだよ。守一さんの持っている心ね、心の中にできてる渦巻きなんだよ。それがああいふ絵を描かしてるんだよ。これは全く喜彦さんの心の中の渦巻きと同類なんだよね。何て言うか人の根本的な命の蠢きみたいなものが、そのまま絵になる、これが生の芸術ですよ。アール・ブリュットなんですよ。

お金のことしか考えないで絵を描いてるやつらとどう違うの。違うどころじゃないでしょ。まったく違う世界。そのことを今言いたいんだよ。だから村っちゃんや喜彦さんだけじゃなくて、守一さんのほかにも本物の芸術家がいるんだよ。この世の中には。その人たちのやろうとしていること、そして、普通に経済的なことを考えながら平穏な生活の中でこんな絵はどうかかって考えてる人との違いを今考えてて、この展覧会になったんだよね。

アサダ なるほど。「踊る細胞」展の背景には、そんな征三さんの怒りがあつたんですか。

田島 やっぱり、細胞が踊ってなきやダメなんだよ。

だから上手に描いてる人の細胞は踊っているか、とい

が溶けようとしているんだよ。そのことを小さな記事でしか書かないし、そしてそういうことがあるうともやっぱり今大事なことは経済でしょ。そら違うだろうと僕は思いますね。

うことだよ。村田清司とか伊藤喜彦の細胞はぐるぐる踊ってるよ。とんでもない踊り方してるよね。それがどーっと出てあの作品になってるわけ。それが信じられるんだよ。それを見たらやっぱり見た人の心も踊る。命が踊るんだよ。生きる力が息づいてくるんだよ。一方、これが5億円もするのかっていうことで観てる人はね、実は心は踊ってないんだよ。感心して。私は心が洗われましたとか言ってるけど、どこも洗ってない。

北岡 僕ある時、美術館に勤める研究者から聞いたことがあるんだけど、例えば著名な方の展覧会をやるというんな人が見に来る。質問で多いのは、どの絵が一番高いんですかってことだ。例えば、ゴッホの展覧会のどれが一番高いんですかって聞かれる。こういう見方をする人がいるんだなって思う。

アサダ それは結構ある一定数いますね。

田島 僕は今、新潟県の十日町で廃校を作品にしてすぐ一杯人が来てくれてる。本当に嬉しいんだけど、すぐに経済効果がどうだったみたいないことで評価する。経済効果がなかったら、評価できないの。そういう見方を人々がずっとやってる限り人類は地球を含まめてどんどん谷底へ落っこっていくね。もうすでに落っこちていつてるじゃん。三重県と同じ大きさの氷山

アサダポイント

このラジオを200回以上やってきて、一番迫力があつた放送だと思ってる。「なんで彼らの存在のすごさが伝わらないんだ」という怒りの感情が、これほどストレートに言葉にされたことがあつたろうか。正直、この放送は「テキスト」で伝えるのがもつとも難しく、だからこそ「声」のメディアであるラジオが相当向いている内容だっと思う。ぜひ征三さんの感情の蠢きも捉える意味でも、バックナンバーを聴いてほしい。

「公開収録」きたやまおさむ特別講演・特別インタビュー

「生々しい何かと強迫くなぜ、作品に巻き込まれるのか」

きたやまおさむ（精神科医、作詞家）



きたやまおさむ
1946年生まれ、兵庫県淡路島出身。精神科医、臨床心理士、作詞家。九州大学大学院教授を経て、現在白鷗大学副学長。1965年、京都府立医科大学在学中にフォーク・クルセダーズ結成に参加し、67年「帰って来たヨッパライ」でデビュー。68年解散後は作詞家として活動。71年「戦争を知らない子供たち」で日本レコード大賞作詞賞を受賞。その後、精神科医となり、現在も臨床活動を主な仕事とする

2015年2月6〜8日に大津プリンスホテルでのアメニティーフォーラムで開催された「アール・ブリュットユートピアの創造主たち」展。それに併せて行われたきたやまさんの特別講演「生々しい何かと強迫くなぜ、作品に巻き込まれるのか」を皮切りに、楽屋でのインタビューも行なった。精神科医で臨床心理士、作詞家でミュージシャンとしても著名なきたやまさんは、かねてよりアール・ブリュットの織りなす世界観や作家の衝動的な表現行為に関心を寄せていたと言う。インタビューではさらに、ミュージシャンとしてのきたやまさんのお立場から、美術ではなく音楽におけるアール・ブリュットの可能性も語っていただいた。

「私」にとつての未知なる経験として

きたやまさんはこの数年、アール・ブリュット作品に深い関心を示し、作り手の制作現場や自宅などを訪ね歩いてきた。例年のアメニティーフォーラムや全国各地の展覧会にも足を運び、また精神科医として長年臨床現場で「なんとなくそういつたものは見てきた」と語る。作品を観る動機の一つにあげるのは、「その経験が『私』にとつていい経験をしたかどうか」だ。作品の生まれ方や作者の生活背景を知るのももちろん良い。しかしさらに、そのことで「自分という存在がわかる」、「自分が何を考えているのかよくわかる」ことにつながれば、それは全国各地で行う自身の講演活動においても同じ動機で、つまり「私自身が私を知りたいか

ら講演をやっている」という発言とも一貫する。

分からないものを「置いておける力」

アール・ブリュットの作品群に出会ったとき、きたやまさんが感じてきたのは「分類不能である」ということ。何と呼べばいいのかよく分からない作品群を前に、私たちはつい言葉で意味を探ろうとする。それは「名前がないことで私たちはしんどくなるから」だときたやまさんは言う。でも、「そのしんどさを通じて巻き込まれていったら、やがて皆さんや私の中に何か理解が生まれてくると思う」と述べつつ、分類できないものを「置いておける力」を持つことを奨めるのだ。

アール・ブリュット作品が放つ強烈なインパクトは時として、われわれに「吐き気」のような感覚をもたらす。吐き気は未消化物から来るもので、これが徐々に消化されれば、やがて血となり肉となってくれるだろう。吐いてしまう、つまり、観ないでおくとか無駄なものとして唾棄すれば、消化する機会を失ってしまう。しかしながら、作家たちの見事な才能のおかげで、その消化は「美的な体験」へと転じ、われわれの「心の胃袋」はじわじわと鍛えられるのだ。きたやまさんは改めて、アール・ブリュットと出会うことの意義をこう語ってくれた。

「皆さんの心の中に、展覧会を観て帰るときに何かが生まれる。物語が生まれると言つてもいい。理解や対話。『ああ、あれはああいうことだったんだ！』とじわじわ感じる。それが、私たちの心の中の包容力を大きくしてくれているんです。これが、私たちがアール・ブリュットと出会って得る最たるものですよね。『置いておける力』ができる、分からないものを置いておける力がね、私たちに与えられることがとても貴重なことなんです。」

造形は逸脱に寛容である

ミュージシャンとしても著名で、音楽療法の現場でもよく講演されるというきたやまさんからすれば、音楽という側面からは、アール・ブリュットをどう感じているだろう。返ってきた答えは「音楽は狂うことに対して非常に冷たいメディア」というもの。音程が狂っちゃだめ、リズムが狂うなど、子どもの頃からそう教育されることの多い「音楽」。「だから音楽の先生って嫌いだっただ」って語るきたやまさんは、「絵画、造形活動のほうが逸脱していることに非常に寛容ではないか」という持論を語ってくれた。

「通訳者」として立つ

きたやまさんは「言葉」を扱う作詞家としても、アール・ブリュットという「名付け」に対する考察を行った。アール・ブリュットは言語のようなコミュニケーションツールをその作品の中に内包してないがゆえに、誰かが「通訳者」となつて、作品と他者を橋渡しする必要があると語る。異文化を持つ人、外国語を語る人に対してそうするように、通訳なしではなかなか出会えない世界をつないでゆく。アール・ブリュットという概念には、その通訳としての役割という意味を感じているようだった。

最後に、きたやまさんのアール・ブリュットにまつわる講演録としては、ラジオとともに、ぜひ、NOMAのホームページの「アーカイブ」にある『平成26年度アール・ブリュットへその道程と幸福について』のPDFも参照いただきたい。

「公開収録」「作品」として社会化すること、選ばれないということ、選ばれるということ

青柳正規（前文化庁長官、山梨県立美術館館長）
小室等（ミュージシャン）
北村成美（ダンサー、振付家）
聞き手 田端一恵（社会福祉法人グロー）



青柳正規（あおやぎ・まさのり）
1944年生まれ、満州出身。1967年東京大学文学部美術史学科卒業、1969～1972年ローマ大学に留学。考古学者。日本における古代ギリシャ・ローマ研究の第一人者として知られる。40年以上にわたり地中海遺跡の発掘調査に携わる。東京大学副学長を経て国立西洋美術館館長、文化庁長官を歴任。現在、2020東京オリンピック・パラリンピック文化教育委員会委員長、東京大学名誉教授、山梨県立美術館館長、東京藝術大学特任教授などを歴任。

小室等（こむろ・ひとし）
1943年生まれ、東京都出身。1968年グループ「六文銭」を結成。1971年第2回世界歌謡祭にて「出発の歌」（上條恒彦と六文銭）でグランプリを獲得。1975年泉谷しげる、井上陽水、吉田拓郎と「フォーライフレコード」を設立。現在は、自身のコンサートを中心に活動するなか、谷川賢作（pt）とのセッション、さがゆい（vo）との「ロニセラ」、娘であるこむろゆい（vo）との「Lagniappel」、「六文銭'09」（小室等、及川恒平、四角佳子、こむろゆい）などのユニットでライブ活動を行っている。2012年度～現在まで、「糸貫一穂記念賞音楽祭」総合プロデューサー。

北村成美（きたむら・しげみ）
1971年生まれ、大阪府出身。現在は滋賀県草津市在住。通称、なにおのコレオグラフィアー・しげやん。6歳よりバレエを始め、英国ラバンセンターにて学ぶ。「生きた喜びと痛みを謳歌するたくましいダンス」をモットーに、国内外でソロダンス作品を上演するほか、小・中・高校・特別支援学校・福祉施設はもちろん、居酒屋、ご家庭の居間、電車、水上バスなど、いつでもどこでもどなたでも踊ることをライフワークとし、日本各地でコミュニティダンス作品を発表している。平成15年度大阪舞台芸術新人賞、平成22年度滋賀県文化奨励賞を受賞。2004年度より「糸貫一穂記念賞音楽祭」振付および身体表現・湖南ダンスワークショップディレクター。

2018年の2/9～2/11までびわ湖大津プリンスホテルで開催されていた障害福祉の一大シンポジウム「アムニティフォーラム22」の会場での鼎談公開収録。テーマは、アール・ブリュットをはじめとした障害福祉現場で営まれる造形活動、また滋賀県の湖南エリアで取り組まれてきたダンスと音楽による湖南ダンスワークショップグループなどいわゆるパフォーミングアーツの取り組みも含めて、どこからどこまでが「作品」と呼ばれ、そこに「障害」ということがどのように関わり、また展覧会や舞台に選ばれる、選ばれないとはどういうことなのか。青柳さん、小室さん、北村さんによるとも率直な議論が展開された。聞き手は番組現地リポーターの田端一恵。

「作品」として価値つけることの意味

まず冒頭、田端さんより「行為の結果としての造形物を『作品』と呼ぶこと」について、三者に意見を求めるところからスタート。青柳さんは、マルセル・デュシャンの作品を例に語りながら、そもそも「作品概念そのものが時代とともに多様化している」ことに触れる。一方、小室さんは、坂田明さんや谷川賢作さんなど、この番組にも登場した名だたる音楽家の皆が、障害のある人たちの身体表現に虜になり、ミュージシャン同士では得られない、言葉以前の「何か」の存在を指摘。そして、しげやん（北村さん）は、15年前に彼女らと初めて出会ったとき、ただ立っている姿、

何気ない行為のすべてが「すでにダンスである」ことに衝撃を受けたと語る。「彼らは全身全霊で命をかけて舞台上に立っている」と気付かされたしげやん。実際に本番中にてんかんの発作が起こったりすることも含めて、すべてを「ダンス」として成立させてしまうそのあり様。「私は彼らとはダンサーとしてお付き合いしているの、実はあまり『障害者』として捉えられない」と語り、ダンサーとしての自身のパッションや気合を受けて動いてくれる彼女らを心底リスベクトしている様子が窺えた。

職員のサポートもすべてが「ダンス」

しげやんは、表現活動中での「職員の存在」についてのユニークかつ鋭い持論（かつ実践）を紹介した。ワークショップの現場を、常に真剣勝負の「本番」として捉える中、踊るでもなく、お客さんとしてしっかり観るでもなく、「サポートしよう」とする職員たちの行為は、時として「『ダンス』としてはカッコ悪い」と指摘。舞台のうえで相手に「やりや！」と言う職員も、その手を持たれているメンバーも「ダンス」としてはいかがなものか。だからそのお手伝いが「ダンス」として成立するにはどうすればいいか。例えば、相手が手をあげないなら、逆に職員自身が目一杯手をあげて、相手との差を思いっきり作った方が、コントラストが生まれてかっこいいだろう。だからこそ、結局「職員さん目一杯踊らないといけない」わけなのだ。そのうえで、福祉の専門家として「この人、お手洗いに行きたいかも」となれば、ダンスを中断することなく、見事に車椅子に乗せてスリットと退場してまた戻る。しげやんはそうやってお互いの立場を超えて包括的にダンスをつくってきたのだ。

すべては「つながっている」という意識を持つこと

青柳さんは、小室さんやしげやんの話をうけ、「実は障害の『ある／なし』ではなく、すべてがグラデーションでつながっている」と指摘。収録当時74歳の青柳さんは自身もあと数年で歩行が困難な「障害者」となる可能性や、海外に行った際にその国の言語が喋れなくて困る経験を引き合いに、誰もが時間的に、空間的に「障害」を持つことはありえると言語。また舞台芸術では、プレイヤーとオーディエンスに分かれているように見えるが、そこにはお互いにインタラクティブがあり、また湖南ダンスワークショップグループは、さらに「両者の間をつなぐようなサポーターとしての職員の存在」があることで、実は一層多様なグラデーションが存在していると指摘。「私たちは、彼女ら彼女らとつながっているんです。このつながりをみんなが認識することが、社会の幅を広げ、奥行きを生むんです」と、語り締めくくった。

「何か」というもの

最後に小室さんからのメッセージを紹介したい。私たちは「名付ける」ことによって安心して生きていける。名付けたその言葉を使って通じ合おうとする。しかしそれは他者とのコミュニケーションとして楽をしすぎないだろうか。着目すべきは、言葉が言葉である以前、「何か」としてしか言いようのないこと。障害のある人たちが、言葉を返さずにその「何か」を表現を通じて発露しているのではないか。そう考えたとき、私たちは音楽やダンスを通じてその「何か」を軸に彼女とコラボレーションができてくるのかもしれない。アール・ブリュットが教えてくれるのは、名付けの前に存在する、この「何か」に対するイマジネーションを持つことの大切さ、なのかもしれない。

2017ジャパン×ナントプロジェクト特集第一弾

—アール・ブリュットと国際交流の進行形—

小林瑞恵（社会福祉法人愛成会アートディレクター、副理事長）
渡邊芳樹（元駐スウェーデン特命全權大使、国際医療福祉大学大学院教授）



渡邊芳樹（わたなべ・よしき）
1953年生まれ、北海道岩見沢市出身。75年厚生省に入省し老人保健医療対策本部事務局を結成後、84年外務省に転出。在スウェーデン日本国大使館書記官を務める。87年大臣官房総務課長補佐（政府委員室）として厚生省に復帰。大臣官房政策課長補佐、保険局医療課保険医療企画調査室長、大臣官房広報室長、保険局保険課長、高齢者介護対策本部事務局次長などを歴任し、95年には内閣官房内閣審議官となり、児童家庭局家庭福祉課長、保険局国民健康保険課長、保険局総務課長、大臣官房審議官、年金局長、社会保険庁長官などを経て、2010年在スウェーデン日本国特命全權大使となる。帰国後の13年から国際医療福祉大学大学院教授。

小林瑞恵（こばやし・みずえ）
1979年生まれ、長野県松本市出身。ルーテル学院大学社会福祉学科卒業。社会福祉法人愛成会アートディレクター、副理事長。2004年、東京都中野区で障害のある人たちが創作活動を行う「アトリエPangaeta（ばんげあ）」を立ち上げ、2007年に滋賀県社会福祉事業団企画事業部（現在のグロー）に入職、ボダレス・アートミュージアムNO-MAを担当された後、2008年に愛成会入職。近年では、ヨーロッパ巡回展「Outsider Art from Japan (Art Brut from Japan)」や「ART BRUT JAPAN SCHWEIZ」展の日本側事務局およびキュレーターなどを担当。

小林さんと渡邊さん、二人は職業的背景も世代も違うが、日本のアール・ブリュットを国外、主に欧州において広げ、発信してきた方々だ。小林さんは福祉現場発のキュレーターとして、また渡邊さんは社会福祉に造詣が深く、かつ国際交流のプロフェッショナルとして、活躍している。そんな二人は2017年にフランスのナント市と共同で取り組んだプロジェクト「2017ジャパン×ナントプロジェクト」に関わってきたが、放送ではその話題をメインに、アール・ブリュットが様々な国際的なネットワークの可能性について、存分に語っていただいた。

アール・ブリュットとの出会い

両親が芸術好きで、いろんな展覧会によく連れて行ってもらっていた小林さん。また母親がソーシャルワーカー、叔父が知的障害者の施設を経営していたこともあり、4歳くらいからその施設に遊びに行くこともあった。そこで障害のある人が描く絵を観るなど、アール・ブリュットに通じる世界にいつの間にか親しんでいたと言う。23歳の頃に、スイスのローザンヌにある美術館（アール・ブリュット・コレクション）の存在を知り、自分が観てきた世界を語る一つの言葉として、「アール・ブリュット」を初めて知り、そういった作品群が集まる場所を訪ね、自らもその企画に携わりたいと思うようになったのだ。

一方の渡邊さんは、2014年の大津プリンスホテルで例年行われる「アメニティーフォーラム」に招かれた際、スウェーデンの（福祉の）現在を語る講演も、このことに関心を持って調査し、しかも多分野の人が連携して事業を展開している。この国をあげての大きなうねりについては、「日本モデル」として注目されていると言うのだ。

渡邊さんは官僚経験者としてこのことに言及する。「障害者の芸術活動を支援する福祉や医療関係者、地方自治体、中央省庁、国会議員がみんな関わって社会全体の中で重層的かつ強靱な構造で未来に向けて動いている。なぜ日本がそれをできるかというと、このアクションに何か「新しい福祉モデル」の示唆をみんなが感じるからではないか」と。過去30年くらい、ノーマライゼーションを標榜しながら障害福祉行政を開拓してきた日本としては、アール・ブリュットがノーマライゼーションというコンセプトをもう一歩超えて、「強い突出した個性と能力」を障害のあるなしに関わらず社会的に認め合っていく、つまりその個性が「みんなの喜び」につながるという感覚。そう、この感覚こそが、新たな「芸術と福祉の融合」として、スウェーデンをはじめとした福祉先進国にとってもこれまでなかった着眼点だったのではないだろうか。

「文化の多元性」を体現するアール・ブリュット

国際交流という観点からは、福祉や芸術サイドからだけでなく、より大局的な視点でアール・ブリュットの可能性を見ないといけないと語る渡邊さん。グローバル化やIT革命が進展し、一部に分断と排除の問題がみられる中、「文化の多元性」、すなわち異なる文化を持つ人々たちに対するリスペクト、違いを認めながら包摂するという哲学を、アール・ブリュットは体現しているのではないかと。その哲学を素晴らしい作品群の力を借りながら、ヨーロッパのみならずアジアにも出かけて伝えていく。アール・ブリュットならではの日本発の国際交流の可能性をじっくり感じることでできる放送内容となった。

演会場の横で開催されていたアール・ブリュットの展覧会にたまたま遭遇。さらに渡邊さんは、以前スウェーデンでも同じような作品を観たことがあることに気づく。それは、2012年にスウェーデン人と日本人の HALF で、ダウン症の当事者でもある Monoko Takamatsu さんの個展。「もうすでに、どこかでアール・ブリュットに出会っていた」という渡邊さんは、もともと父と姉が画家で幼少期から美術に触れる生活環境にある中で、とりわけアール・ブリュット作品の持つ爆発力、凄まじいアピール力にすっかり虜に。そこで、馴染み深いスウェーデンで何か展覧会が開催できないかと考えるようになった。

強い個性が「みんなの喜び」につながる感覚

アール・ブリュットは、人間の創造（想像）の可能性がテーマだと感じて来た小林さん。そのテーマゆえに、国や人種の違いを超えても根底に通じるものがあるという確信のもと、海外のアール・ブリュット作品の調査や、現地での展覧会を数多く企画してきた。そんな中、今回お二人が関わったのが、「2017 ジャパン×ナントプロジェクト」だ。渡邊さんは、この取り組みが、芸術文化で大きな再生を遂げて来たナントという都市で行われることの意味として、日本のアール・ブリュットや障害者によるパフォーマンスが、文化創造都市というコンセプトとつながることを通じて、「日本国内においても地域創造の一つの切り口としてアール・ブリュットの可能性を深く考える機会となる」と語った。

なぜここまで日本のアール・ブリュットが海外から注目されるのか。小林さんによればその理由は、「新たな作家が絶え間なく紹介される」、「しかも個々の作品のクオリティが非常に高い」、「内容も実に多様」かつ「存命の作家が多い」ということなどをあげる。さらには、日本は福祉現場もアート関係者も行

① 第69・70回放送（2015年1月23日、30日）

「公開収録」 アール・ブリュットへ その道程と幸福について

田口ランディ（作家）
嘉田由紀子（前滋賀県知事、びわこ成蹊スポーツ大学学長）

2014年12月14日にパルコ大津店にて開催された公開収録トークの様子をお届け。アール・ブリュットに深く魅了され、広い視野から支え続けて来た作家の田口ランディさんと前滋賀県知事の嘉田由紀子さん。作品そのもののみではない、それを取り巻くあらゆる環境も織り交ぜられたアール・ブリュットの哲学について紹介した対談。



① 第73回放送（2015年2月20日）

青柳正規文化庁長官 特別インタビュー

青柳正規（文化庁長官）

2015年2月7日に大津にて開催されたアメニティフォーラムにて講演された青柳正規さんにインタビュー。様々な文化政策を司り、アール・ブリュットの普及にも力を注ぐ青柳文化庁長官に、展覧会の率直な感想や、2017年に開催予定のフランスナント市との文化交流事業について、また「アール・ブリュット」という言葉のもつ力について、独自の見解を伺った。



① 第100・101回放送（2015年8月28日、9月4日）

GLOW 生きることが光になる 放送100回&101回記念放送 アール・ブリュットと日本の未来に ついて語り合う

野澤和弘（毎日新聞論説委員）
北岡賢剛（社会福祉法人グロ（GLOW）理事長）

番組100回目の記念放送。現場でアール・ブリュットを支えてきた北岡さんと、様々なメディアで言葉を使ってアール・ブリュットを広く紹介している野澤さん。お二人の出会いからアール・ブリュットとの出会い、作品の魅力などを幅広く話し合った。



① 第125回放送（2016年2月19日）

青柳正規文化庁長官に聞く、 アールブリュットの魅力と多分野と のつながり

青柳正規（文化庁長官）

2016年2月5日〜7日に大津にて開催されたアメニティフォーラムにて講演された文化庁長官青柳正規さんにインタビュー。様々な文化政策を司り、アール・ブリュットの普及にも力を注いでいる青柳文化庁長官に、会場で開催された「Images展―アール・ブリュット、芸術の地平を開く―」展の感想や、アール・ブリュットにまつわる話を伺った。



① 第184・185回放送（2017年4月7日、14日）

「公開収録」アール・ブリュット 〜多様な表現が広がる新たな社会〜

青柳正規（美術史学者、前文化庁長官）
きたやまおさむ（精神科医、作詞家）
野澤和弘（毎日新聞論説委員）

2017年2月に大津で開催されたアメニティフォーラムにて行われた青柳正規さんときたやまおさむさんの対談の様子をお届け。アール・ブリュットを持つ「包容力」、社会において経済や合理性だけに縛られない「心地よい停滞」。様々な言葉が編まれては時にぶつかり、時に混じり合うスリリングなセッションとなった。進行役は毎日新聞論説委員の野澤和弘さん。



[番外編]

現地リポートなど



大井康弘
《ガネーシャ》
2013年

『誰もやっていないような面白いことをやろう!』

『快走老人録II』 出展作家 小西節雄インタビュー
東近江市在住の小西さんの自宅アトリエよりレポート

小西節雄(出展者)

「快走老人録II」ではかかし9体を
出展した小西さん。取材時は67歳
で、引退されるまでは精密マスクを
作る仕事をされていたそうです。か
かし作りのきっかけは、夏に畑で作
っていた西瓜とトマトがカラス被害
にあい、そこにかかしを3体つくっ
たこと。近所の人に本物の人間と見
間違えられたそう。その反応が面白
く、もっと増やしたら、今度はカラ
スではなく人が見学にたくさん見に



来るようになったと笑いながら話さ
れました。
かかしの素材は木で、関節はボル
ト、身体はプチプチ(エアキャップ)
をまいて作っているそうです。お婆
さんだったら、腰が曲がっている角
度をイメージして作り、何度も調整
しています。畑には秋ならではの、運
動会でパン食い競争をしている子ど
ものかかしもいました。アトリエの
一角にはかかしの衣装コーナーがあ
り、コンテナに分類され
て様々な服がおいであ
りました。
もともと面白いこと、
創意工夫をしたもの作り
が好きだと話す小西さ
ん。仕事をしているとき
もいつも面白いものを作
りたいと思っていたそう



です。退職した後には時間ができて、
のびのびと制作することができるよう
になったとのこと。
NOMAから展示について話が来
たとき、なんで自分のかかしが?
と思ったそうです。こんなかかしで
良かったら展示してくださいと言っ
たそうですが、その出会いで一気に
いろんな人が見にくるようになりま
した。展示では、展覧会の受付にも
かかしを置き、本当の人かと間違っ
てチケットを出したり、声をかける



来館者もいらっしやるほど。
小西さんは、展覧会について、ま
た歳を重ねることについてこう話さ
れました。「誰でも歳とっていき、ひ
きこもる人もいれば活発に活動する
人もいます。健康で歳を取っていく
ために、一日一日が楽しかったと満
足し、何でもプラス思考に考えてい
ます。かかしを作っていて、喜ぶ人
の顔を見ると自分も笑顔になりま
す。それがとても楽しいし、作って
良かったと思います。」

『糸賀一雄記念賞第十三回音楽祭・湖南ダンスワークショップ
グループ』本番2日前におこなわれたリハーサルからレポート

北村成美(ダンサー、振付家)、後村英治(松尾慎一郎)田中徹(湖南ダンスワークショップグループ)
谷川賢作(ピアニスト)、小室等(ミュージシャン/糸賀一雄記念賞第十三回音楽祭総合プロデューサー)

湖南ダンスワークショップグループ
は県内7つの打楽器、ダンス、合
唱の活動をしているグループの一つ
です。
ナビゲーターの北村成美さんこと、
しげやんにインタビューしました。

「ずっと集団で踊ることを重ねてきた
のですが、今年はソロが交代してい
く方法を取りました。帽子を使い、
それとったり被ったりしてソロダ
ンスを交代します。後村さんが帽子
を投げるところからスタートです。



彼はいつも最初に音を出してくれ
て、皆の動きの始まりをサポートし
てくれていたので、自然と彼が帽子
を投げ入れることになりました。」
リハーサルの合間にグループのメン
バー2人にも伺いました。松尾慎一
郎さん、田中徹さん。松尾さんはに
っこり作業所の支援員です。
「最初は利用者さんの送迎だけで
踊らないと決めていましたが、ある
時、私ひとりで介助の手がまわらな
いときにしげやんがお手伝いしてく
ださって、とても温かい気持ちにな
りました。それで、しげやんの要求
にも答えないと思うようになり、わ
からないながらも少しずつやって現
在になります。最初、私たち支援員
は表に出るということは学んでおら
ず、それはナンセンスでした。です
が、しげやんから『利用者さんへの
促しはしないで、松尾さん自身が一
生懸命踊ってください』、と言われま
した。ケアされるという区別が
ないことを意識してやっています。」
田中さんにはっこり作業所に通っ



ています。今回発表するダンスは今
までとはちょっと違いを感じるそう。
ひとり一人踊るのが初めてなので緊張
しているとのこと。「松尾さんのダン
スは気合がすごくて、せっかく僕た
ちが出たのには、松尾さんがでてく
る」と話していました。湖南WSG
の魅力は「全部」だそうです。
参加ミュージシャンの谷川賢作さ
んと総合プロデューサーの小室等さ
んにも今回の音楽祭が非常に楽し
みだというコメントもいただきました。

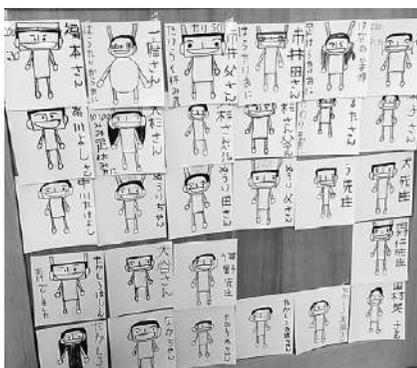
※WSG……ワークショップグループ

『第11回滋賀県施設合同企画展』の進行形

中川猛義(出展者(きりり庵)、櫻井真実/橋本悦子(きりり庵支援員)、山本サユリ(出展者(しあわせ作業所)、百々隆久(しあわせ作業所支援員))

今回の展覧会の参加施設は滋賀県内の30施設、出展者は28名です。出展者お二人のアトリエを訪問しました。

まずは中川猛義さんが通う東近江市のきりり庵を訪問。きりり庵は生活介護事業所で11名の方がそれぞれ得意な活動や創作活動、音楽活動、車で野菜配達などもしています。

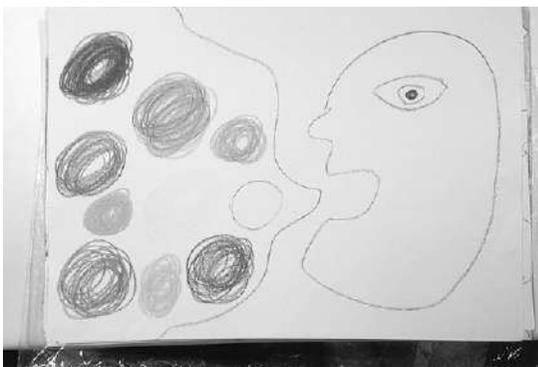


中川さんは粘土でコップとお寿司とアンパンマンとハイエースと鬼、団子を作っていました。展覧会には鬼の陶芸作品と鬼のイラストを出展しています。中川さんはコップやアンパンマン、鬼を特に作っているそうです。収録現場では、田端リポーターと、GLOWラジオの永田ディレクターの似顔絵を描いてくださいました。

中川さんは施設の職員と一緒に通っていらっしゃる方の似顔絵を描くと、施設の壁に掲示しているそうです。



次に山本サユリさんが通う湖南市のしあわせ作業所を訪ねました。しあわせ作業所は25名の方が通う就労継続支援B型事業所です。内職している班と、外へ出て行って様々な企業さんと仕事をやる班があります。山本さんは休憩時間やご自宅で制作されています。絵は鉛筆やものさし、コンパスを使って描き、色はクレヨンで塗っています。作品のテーマは「言葉の色と声」。横向きの人



から吹き出しが出ていて、色々な色で描かれています。人の声には色がああると思っている山本さん。赤色は勇氣。嬉しいことはオレンジ色っぽく。白は何も言うことがないことと話していました。いつも音楽を聴きながら描いています。山本さんは絵だけでなく、ご両親がブラジルの方ということで、サンバも踊れるのだそうです。



『美術の授業でアール・ブリュット 滋賀県立膳所高等学校』年間通して行われる授業について、担当の山崎先生と生徒二人に聞きました

山崎仁嗣(滋賀県立膳所高等学校教諭)、松村佳奈/安松日菜(滋賀県立膳所高等学校)、横井悠(社会福祉法人グロー(GLOW) 法人本部企画事業部学芸員)



大津市にある膳所高校では、2年生の美術の授業でアール・ブリュットを学ぶ授業があり、外部から様々な講師を招いています。2回目の授業では講師はボードレス・アトミュージアムNOMAの横井学芸員が講義しました。「アール・ブリュット」の言葉の説明とともに、実際に作品を見てもらっていました。

生徒さんお二人に感想をお聞きしました。松村さんは、「アール・ブリュットという言葉は知っていたが、作品を見るのは初めてだった。」「衝撃的だったのはコガネムシ、生き物を材料に使った作品。」「いろんな作品があった、今まで知らなかったので面白い。」と話し、安松さんは、「佐和山城の泉巖さん。自分の家の近くだったので驚いた。個人の力で作りだしているのがすごい。」「自分の胸が熱くなりました。」と話していました。

また、授業を担当した横井学芸員は、「普段高校生と触れ合う機会がないので、彼らの素直な感想が聞けて楽しかった。」と、担当の山崎先生

は、「作品から感じたことを、その子なりの視点や考え方で率直に話している面白かった。」とそれぞれ感想を話しました。

アール・ブリュットを授業のプログラムとして取り入れたのは10年ほど前からだそうです。先生自身のおすすめの作品を紹介しているだけでは限界があると感じ、いろんな講師を招き、生徒たちには授業を通して自分の考えをまとめてもらっているんだそう。年間通じて14回の授業の中で、今後は大学の先生、施設の支援員、美術館の方、滋賀県の行政の方を講師に招く予定とのこと。

過去に授業を受けた生徒さんで、「自分はアール・ブリュットが好きだと思っただけで、嫌いだと思っ人もいて、でも授業を受けるうちにそういうふうには違ってくると思う人もいます」ということを受け入れられるようになった」とコメントを残した人がいて、とても印象深かったというエピソードも山崎先生からお聞きしました。

『吉田季平流NOMAの楽しみ方、アール・ブリュットとの出会い方』 NOMA開館当初からひそかなファンという吉田季平さんと、近江八幡市内を歩く

吉田季平(NOMA友の会会員)



NOMAの企画展はほぼすべて見てくださっている滋賀県在住の吉田さん。スタッフともすっかり顔なじみです。吉田さんのスタイルに倣って、近江八幡駅からNOMAへ歩いて向かいながらお話を聞きました。

元々美術展を見るのが好きな吉田さんは、若い頃から今までたくさん展覧会を見てこられました。気になった展覧会があれば遠出してでも行き、同じ美術館へ何度も通うこともあるそうです。

NOMAを訪れたきっかけは、2005年春の企画展「縫う人」に展示された上前智祐さんから案内をいただいたこと。県外の作家さんから自分の住む滋賀県の新しい美術館のことを知らせていただき、これは行かないと！ と思ったそうです。そこから今までNOMAの展覧会は

欠かさず見ておられます。美術作品の楽しみ方として常設展を一日かけてじっくり見たり、同じ作品を何度も追いかけることもあるそうです。また、ご自身が若い頃に見た作品を別の美術館で久しぶりに見ると、まるで自分が預けていた作品を再び見ているという感覚になり、それも楽しんでいくとのこと。

きの変化はあったかという質問には、「どんな作品でも、横一線どれも同じように見えていますね。感動する作品に出会えた時は、生きてきて良かったと思えます。アール・ブリュットは、発掘された方のことや、日頃作者を支援されていることを考え

ると別の感動があります。作品は、緻密さ、集自力、根気などつくづく感動します。これからもNOMAで面白い作品を拝見できることを楽しみにしています。」と話されました。

『糸賀一雄記念賞第十六回音楽祭 湖のまどろみ』 滋賀県内で活動する6つのワークショップグループについて

清水美紀、林美紀、北村成美、中路友恵
(糸賀一雄記念賞第十六回音楽祭ワークショッププロデューサー・ナビゲーター)

湖東・大津WSGの清水美紀さん
湖東WSGは、和気あいあいとした雰囲気があります。今回は音楽で桃太郎のお話を表現します。お話にそって、声を出したり歌ったり、チャンバラをしたりします。

大津WSGは個性がとても際立っています。最初はソロで演奏し、

その後全員で演奏します。今日の前日リハーサルはとても上手だったのですが、明日の本番は彼らも今日を踏まえるので、どうなるか楽しみです。

湖西・甲賀WSGの林美紀さん
湖西WSGは多い時で80名います。皆さん歌が好きなので、前奏を弾き出すと身体でリズムを取り出す方が多いです。身体の動かない方も音楽が好きそうなのが見ていて感じられます。



湖南WSG 北村成美さん

先日のフランス・ナントでの公演は、大成功で大盛況でした。今回はナントで発表したグループとほかのグループが一緒になった完全版です。湖のトリックスターというテーマで、メンバーそれぞれが狂言師や道化師という存在になります。毎回段取りや構成は決まっていますが、それが現場で感じながら塗り替えてくれ、新しい舞台になっています。

近江学園WSG 中路友恵さん

普段、学園内では年齢や障害の程度で5つに分かれています。大事にしているのは、WSGでは一緒になってコミュニケーションをとるから進めていくことです。音楽を通して目標を持ち、グループの中での役割を自分たちで作っていくこと。チームの絆が音楽のエネルギーになっていけばいいと思います。



甲賀WSGは15名ほどで、バンドスタイルで演奏します。打楽器、ボーカルなど、皆の良いところが出るようにしました。毎回やるたびにナビゲーターとか肩書きを超えて、自身の音楽を引きだしてもらっている気がします。一人ひとりの輝きを自由に見て感じていただきたいです。

※WSG……ワークショップグループ

現地レポートリスト

回数	放送日(毎週金曜日)	放送タイトル	出演
104	2015年9月25日	『展覧会「これ、すなわち生きものなり」』	横井悠【社会福祉法人グロー】
117	2015年12月25日	『「第12回滋賀県施設合同企画展」 滋賀県立三雲養護学校』	羽賀詢【出展者（滋賀県立三雲養護学校）】、 筒居正幸【滋賀県立三雲養護学校副校長】、 村尾敬則【滋賀県立三雲養護学校教諭】
119	2016年1月8日	『「第12回滋賀県施設合同企画展」 滋賀県立信楽学園』	谷本達哉【出展者（滋賀県立信楽学園）】、 湧井康貴【滋賀県立信楽学園児童支援員】
128	2016年3月11日	『「アール・ブリュット☆アート☆日本3」 ～ボランティアスタッフのおすすめ！ 展覧会のみどころ～』	木元聖奈【社会福祉法人グロー】、 岩崎義雄／久木茂／川村嘉男【ボランティアスタッフ】
129	2016年3月18日	『「ingスーパーリサイクル」 田中佑芽アコースティックライブ』	田中佑芽（ユメコ・パデセント）【きらり庵】
140	2016年6月3日	『美術の授業でアール・ブリュット 滋賀県立膳所高等学校』	横井悠【社会福祉法人グロー】、山崎仁嗣【滋賀県立膳所高校教諭】、 松村佳奈／安松日菜【滋賀県立膳所高校】
141	2016年6月10日	『いのちについて考える 東近江市立山上小学校 命の授業について』	花戸貴司【永源寺診療所所長】、 園司清美【東近江市立山上小学校養護教諭】
144	2016年7月1日	『鮎万里絵展オープニングトーク』	鮎万里絵【出展者】
145	2016年7月8日	『鮎万里絵展オープニングトーク』	鮎万里絵【出展者】
146	2016年7月15日	『吉田季平流NO-MAの楽しみ方、アール・ブリュットとの出会い方』	吉田季平【NO-MA友の会会員】
157	2016年9月30日	『シガラキ・アートコミュニケーション 一信楽の新しいエリアイメージを発信～』	石野啓太【ROOF代表】、林晋【社会福祉法人しがらき理事長】、 山田晃嗣【ROOF】
158	2016年10月7日	『シガラキ・アートコミュニケーション 一信楽の新しいエリアイメージを発信～』	佐々木翔【滋賀県立陶芸の森】、大杉和夫／酒井清【信楽青年寮】、 石野大助【信楽青年寮支援員】、田尾晃／藤原純【陶芸家】
170	2016年12月30日	『目の見えない人との作品鑑賞プログラム～作品を言葉にして、手で見て、鑑賞しよう～』	光島貴之【美術家／ミュージアム・アクセス・ビュースタッフ】、 三浦弘子【滋賀県立陶芸の森専門学芸員】
171	2017年1月6日	『「第13回滋賀県施設合同企画展」 彦根学園』	徳山彰【出展者（彦根学園）】、本郷明日香【彦根学園生活支援員】
175	2017年2月3日	『「第13回滋賀県施設合同企画展」 杉山寮』	柿本健【出展者（杉山寮）】、玉木敦子【杉山寮生活支援員】
179	2017年3月3日	『田中みゆき・安藤恵多「大いなる日常」展 オープニングトーク』	田中みゆき【キュレーター】、安藤恵多【社会福祉法人グロー】
180	2017年3月10日	『田中みゆき・安藤恵多「大いなる日常」展 オープニングトーク』	田中みゆき【キュレーター】、安藤恵多【社会福祉法人グロー】
194	2017年6月16日	『「HELLO 開眼」 関連イベント「バスツアー ワズミさんと巡る滋賀不思議スポット 湖北編」』	和澄浩介【滋賀県立近代美術館学芸員】
195	2017年6月23日	『「HELLO 開眼」 関連イベント「バスツアー ワズミさんと巡る滋賀不思議スポット 湖北編」』	和澄浩介【滋賀県立近代美術館学芸員】
198	2017年7月14日	『展覧会「HELLO 開眼」 ボランティアスタッフの声を訪ねる』	久保美代子／谷諒次【ボランティアスタッフ】
215	2017年11月10日	『糸賀一雄記念賞第十六回音楽祭 湖のまどろみ』	清水美紀／林美紀／北村成美／中路友恵【糸賀一雄記念賞第十六回音楽祭ワークショッププロデューサー・ナビゲーター】
220	2017年12月15日	『「第14回 滋賀県施設・学校合同企画展」 オープニングイベント』	高山円【社会福祉法人グロー】、太田諒輔【能登川作業所支援員】
221	2017年12月22日	『「第14回 滋賀県施設・学校合同企画展」 オープニングイベント』	上林一生【出展者（いまいき）】、外山聖【いまいき支援員】、 福山かおり【放課後等デイサービス第2ももスマイル】
228	2018年2月9日	『キュレーター公募企画展「アール・ブリュット 動く壁画」辻智彦インタビュー』	辻智彦【キメラマン／本展キュレーター】、山田創【社会福祉法人グロー】

回数	放送日(毎週金曜日)	放送タイトル	出演
29	2014年4月18日	『展覧会「アール・ブリュット☆アート☆日本」』	齋戸さゆみ【社会福祉法人グロー】、久木茂【ボランティアスタッフ】
30	2014年4月25日	『展覧会「アール・ブリュット☆アート☆日本」』	宮村勲【まちや倶楽部代表】、巽弓枝／巽朱里【ボランティアスタッフ】
33	2014年5月16日	『細馬宏通と訪ねるアール・ブリュットが生まれる現場その1（やまなみ工房編）』	細馬宏通【人間行動学者／滋賀県立大学人間文化学部教授】、 早川弘志【やまなみ工房主任支援員】、 竹中克佳／吉川秀昭／井上優【やまなみ工房】
34	2014年5月23日	『細馬宏通と訪ねるアール・ブリュットが生まれる現場その2（古久保憲満さんアトリエ編）』	細馬宏通【人間行動学者／滋賀県立大学人間文化学部教授】、 古久保憲満【アール・ブリュット作家】
38	2014年6月20日	『美術家 椎原保と語る、展覧会「Timeless 感覚は時を越えて」の見所』	椎原保【美術家（出展者）】
39	2014年6月27日	『美術家 椎原保と語る、展覧会「Timeless 感覚は時を越えて」の見所』	椎原保【美術家（出展者）】
42	2014年7月18日	『特養で双六!? 記憶と語りが織りなす地域文化の可能性 特別養護老人ホームふくらより』	上田洋平【滋賀県立大学地域共生センター助教】、 山口美由樹【特別養護老人ホームふくら所長】、 今村たまえ【特別養護老人ホームふくら生活支援員】
43	2014年7月25日	『特養で双六!? 記憶と語りが織りなす地域文化の可能性 特別養護老人ホームふくらより』	上田洋平【滋賀県立大学地域共生センター助教】、 山口美由樹【特別養護老人ホームふくら所長】、 今村たまえ【特別養護老人ホームふくら生活支援員】
44	2014年8月1日	『精神科病院で写真展!? 患者、職員、写真家による新たな関係性』	大西暢夫【写真家】、小川貞子【淡香山病院副院長／看護部長】、 八野緑／東武司【写真展参加者】、山口仲二【茨木病院看護部長】
48	2014年8月29日	『リアリティーこそアート。「快走老人録IIー老ヒテマスマス過激ニナルー」折元立身インタビュー』	折元立身【現代美術家】、はたよしこ【NO-MAアートディレクター】
51	2014年9月19日	『すまいるほーむ納涼祭～思い出の味作り、すまいる音頭～』	六車由実【デバイス「すまいるほーむ」管理者、民俗研究者】、小川ハルコ／秋山ひで／百澤静枝【すまいるほーむ】、村松健【すまいるほーむスタッフ】
52	2014年9月26日	『すべてはもったいないから始まった～「快走老人録II」 出展作家 白井貞夫インタビュー～』	白井貞夫【出展者】
53	2014年10月3日	『誰もやっていないような面白いことをやろう!～「快走老人録II」 出展作家 小西節雄インタビュー～』	小西節雄【出展者】
54	2014年10月10日	『大合唱隊も参加した～「ほほえむちから」レコーディングレポートと小室等さんインタビュー～』	塚本ひらき／西川真帆【さくらジュニアオーケストラ】、 西川好信／大原裕介／小田泰久【合唱参加者】、 小室等【ミュージシャン】
62	2014年12月5日	『糸賀一雄記念賞第十三回音楽祭・湖南ダンスワークショップグループ』	北村成美【ダンサー、振付家】、 後村英治／松尾慎一郎／田中徹【湖南ダンスワークショップグループ】、 谷川賢作【ピアニスト】、小室等【ミュージシャン】
65	2014年12月26日	『第11回滋賀県施設合同企画展 ing… ～障害のある人の進行形～』	櫻井真実／橋本悦子【きらり庵支援員】、 中川猛義【出展者（きらり庵）】、百々隆久【しあわせ作業所支援員】、 山本サユリ【出展者（しあわせ作業所）】
74	2015年2月27日	『アール・ブリュット☆アート☆日本2』	齋戸さゆみ【社会福祉法人グロー】、 内山幸子／中島清／小谷理佐子【ボランティアスタッフ】、 喜多重夫【丸重商店】
87	2015年5月29日	『「鳥の目から世界を見る」展』	はたよしこ【NO-MAアートディレクター】
95	2015年7月24日	『「鳥の目から世界を見る」展 出展作家山田美智子の制作現場』	山田美智子【出展者（やまなみ工房）】、 神山精二／神山よりへ【山田さんご家族】、 牧原里佳【やまなみ工房支援員】
99	2015年8月21日	『創作ビレッジこりり村 西村一幸の制作現場』	西村一幸【創作ビレッジこりり村】、 島田和典【創作ビレッジこりり村施設長】

創造と思考の相互行為

番組最多出演者

細馬宏通（早稲田大学教授／滋賀県立大学名誉教授）

気がつけばグローラジオにはずいぶんと出演させていただいた。

わたしは、普段人と人との相互行為に関心を持っていて、それもあって、様々な美術作品を見ても、作品そのものだけでなく、それが生み出されるプロセスの方に関心を寄せることが多かった。アサダワタルさんが編集された『アール・ブリュットアート日本』（保坂健二郎監修、平凡社2013）に収められているトークでも、アール・ブリュット作品が描かれる過程についてあれこれ話したが、それを覚えていたアサダさんが、では実際に作品が生まれる現場に行きましよう、と誘って下さった。それで、やまなみ工房と古久保憲満さんのお宅におじゃましたのが、グローラジオに出演した最初だった。2014年5月のことで、これは4回連続の放送になった。

わたしはポーターレス・アートミュージアムNOMAで見た井上優さんの描くのはほとんどした絵が好きだったので、やまなみ工房で井上さんがどんなふうを描いておられるのか知れたかったのだが、実際に目の当たりにすると、色の塗り方がちよつと予想外だった。井上さんは、白い画面にここからここまでという囲みを作ってはその内側を丁寧塗っていくという作業を積み重ねておられる。造形

で人を驚かしてやろうという野心がなんだか希薄で、なんだか絵を描いているというよりは、土地を区切ってから田畑を耕しているようだった。それでわたしは井上さんの絵に惹かれたのかもしれないと思った。

古久保さんは、細い線で区切られた地図のような絵の中に、線路、ビル、店舗などたくさん建物や事物を描き込んでいく。それはテレビやインターネットのmapサイトで見たものから古久保さんは気になるものを拾い上げ、街に埋め込む。鉄道駅のそばに、世界の様々な場所からサンプリングされた建物が、新たな街を作っていく。古久保さん自身にこの店は何で、この店はなぜここにあつて、といった説明をうかがっているうちに、これは絵でもあるのだけれど、世界を作る計画のようなものかもしれないと思った。

このときの収録がきっかけになって、グローのスタッフの方々と一緒に滋賀県下の施設に定期的にお邪魔して、利用者みなさんの創作活動を拝見する機会を得た。観察を通して、次第に浮かび上がってきたのは職員の方々の創作への関わりだ。どの作家の場合も、職員の人たちは筆をとったり粘土に触れたりすることはない。しか

し、キャンバスの位置を設えたり、特定の画材をそばに置いたり手渡したり、その日の作業が一区切りついたところで一緒に出来映えについて語り合ったり、そこにどんな意図がこめられているのかを作家にきいたり、といった具合に、利用者と職員の間には、作品を前にした相互行為が頻繁に行われている。展示する作品の選択やディスプレイ作業にも、しばしば職員さんの協力が入っている。こうした職員の方々の活動は、しばしば一人一人の作家が創作をする動機づけになっていたりと、作品の手法や表現の方向を決める重要な手がかりになる。

そういえば、やまなみ工房でも、井上さんに声をかけて、画面の大きさの相談をしたり、次にどこをどんなふう塗るかをたずねる職員さんたちの姿が印象的だった。古久保さんの場合は、学校の先生のアドバイスが今のスタイルを決める大きなきっかけだったときいた。

わたしは、アール・ブリュット作品の作家性を否定したいのではない。わたしたちは作品の「作家」について当たり前のように語り、作品から作家の個性を読み取ろうとするけれど、本当は、美術作品を一から十まで一人の力や性質の表れとするよりも、ある作家と誰かがやりとりした結果だと考えればよいのではないか、と言いたいのだ。これは、アール・ブリュットの世界に限ったことではない。美術界全体を見渡しても、一人の作家が誰かとの語らいややりとり

から作品を創ったり、誰かをモデルにしたり、誰かの依頼からアイデアを得ることは必ずしも珍しいことではない。

何かが一人の力ではなく、複数の人の相互行為によって達成されるという考え方は、わたしが2016年にまとめた『介護するからだ』という本の主張でもある。介護は、介護職員から利用者への一方的な行為ではない。様々な職員さんの介護活動を観察していくと、ただ自分のやり方を押し通す人よりも、利用者のそのときどきの身体を使い方をよく観察してそれを手がかりに介助を行う人の方が、様々なトラブルをうまく切り抜けていることがわかる。『介護するからだ』はそうした利用者や職員の方々のやりとりの事例集という性質を持っているのだが、この本を出したときも、グローラジオで連続で取り上げていただき、三週にわたって本の内容を話させていた。

グローラジオの放送された2014年から2017年は、ちょうどわたしが介護研究の成果を発信し出した時期と重なっていた。ゆるやかなテーマのもと、その場で考えたことをアサダさんや田端さんと話すうちに、自分の思考はこんなことばになるのかと我ながら驚いたことが何度かある。考えることもまた、ある種の相互行為なのだ。グローラジオに出演したことで、そういう思考の機会を何度もいただいた。本当にありがとうございました。

アール・ブリュットを ラジオで発信することについて

現地リポーター

鈴村りえ（社会福祉法人グロー（GLOW）法人本部企画事業部学芸員）

グローラジオを通じて、初めてアール・ブリュットという言葉を知った人は多いのではないだろうか。自身の内側から湧き上がる衝動により生まれたアール・ブリュット作品の大半は、誰に見せるでもなく自分自身のために作られており、作者にとっては生活をするうえで切っても切れない日常の行為と密接に関わった表現である。

このラジオでは、アール・ブリュット作品を眼前にして誰もが感じるであろう「人はなぜ表現するのか」という根源的なテーマや、作品から溢れ出すエネルギーについて、美術のみならず福祉や医療、文化や教育などの専門家や実践者に様々な切り口で作品や作者の魅力を語っていただいた。あらためてこれほど多岐にわたる分野の方が、アール・ブリュットに関心を持ち共通のテーマとして捉え、それぞれの領域で解釈しながら新たな価値を見出していることは、発見であり驚くべき事実であった。何より、分野を横断しアール・ブリュットが共通言語になっていく様子をリアルタイムにラジオを通じて伝えることができたのではないかと思う。

また、多彩なゲストをスタジオに迎えるほかに、現地レポートとして普段あまり聞くことのできない作者の声を届けられたことは、とても大きな出来事だったと考えている。現地に赴き、創作の現場

や作品を通じて人々がつながっていく場面を伝えることにより、現在起こっている、または新たに起こりつつある動きや変化を共有することができたのではないだろうか。

さらに現地レポートの特徴は、なんといっても場の空気感を伝えられることにある。人の声やその背後にある現場の音に耳を澄ませることにより、その場の雰囲気やすぐそばに感じられることがある。そしてあたかも自分もその場にいるような感覚になり、まだ見たことのない作品や出会ったことのない作者に思いを寄せ、その存在を近しく感じられるのもラジオという媒体の強みだと思う。そのことから、リスナーにはより身近にアール・ブリュットを感じていただける機会になったのではないかと思っている。

ラジオの放送された4年間で、アール・ブリュットが国内各地へ広がりつつがっていく状況や、ヨーロッパやアジアで日本のアール・ブリュットが高い評価を得て展覧会を成功させている様子を臨場感と共に届けることができた。アール・ブリュットは強い発信力を持ち、人々をつなぎ続けている。ラジオを聞いた方は、そこで得た情報を活用し能動的に新たな情報を獲得して、さらに作品や作者との出会いを見つけていただきたい。

ラジオから吹いてくる風

ラジオ局番組担当者

伊藤健（株式会社京都放送（KBS京都）ラジオ営業局営業部長）

出合いは南草津駅でした。改札前で出迎えてくれたアサダ氏はMacBook片手のおしゃれな若者。その後、紹介された北岡理事長も社会福祉事業団の理事長らしくらぬファンキーな御仁で、福祉をテーマにしたお堅いラジオ番組の打ち合わせに来た私の先入観は早くも軌道修正を求められました。この人たちとなら面白いことができそう、という嬉しい誤算から始まったラジオ番組「Glow」は、私の20年程のラジオ生活の中で、今も異色の輝きを放っています。

当初は糸賀一雄生誕100年記念事業の一環としてスタートした当番組。スタジオでアサダ氏とゲストがトークを繰り広げるといってオーソドックスなスタイルでしたが、各ジャンルの先端で活躍される方が、一貫して福祉の視点から語り続けるという切り口は、これまでになく新鮮で刺激的でした。糸賀記念事業としての半年の放送を終え、次の展開として「アール・ブリュットとラジオ」というお話をいただいたときは、そんな番組が成立するのだろうかかと一瞬怯みました。しかし、福祉施設や精神科病院のような施設でも、顔の見えないラジオだからこそ踏み込める、伝えられることがあるのではないか。これこそラジオがやるべきチャレンジではないか、というふうに気付きました。

そこからリスタートしたラジオ番組「Glow」は、新たに加わった田端リポーター、その後を受けた鈴村リポーターの体当たりの現地レポートでアール・ブリュットの声を伝える、これまでどこにもなかったラジオ番組の道を歩んでいきました。アール・ブリュットが生まれる現場で採取された作者の声。それを支える人たちの喜びや葛藤の声。福祉の現場に寄り添ってきた二人のリポーターだからこそ伝えられるブリュット（生）の声は、整理されてわかりやすい情報ばかりが重用される現代のメディアの中で、圧倒的な迫力と説得力がありました。そしてスタジオでそれを受け的確なコメントでまとめるアサダ氏が、現場とリスナーをつなぐ役割を果たしてくれました。ラジオという窓からアール・ブリュットの風をリスナーの日常に吹き込んだ4年間。この風変わりな番組が、リスナーの日常を少し豊かに、そしてメディアの世界を多様にしていくと信じています。ラジオ番組「Glow」の旅は終わりましたが、今後も折に触れPodcastsを聞き返し、社会にとつての、またメディアにとつての豊かさとは何かを考える時間を持ちたいと思います。

まとめにかえて「一対一と不特定多数の間」

田端一恵（社会福祉法人グロー（GLOW）法人本部企画事業部副部長）

滋賀県ならではの、とがった実践

ラジオ番組「Glow〜生きることが光になる〜」（以下、ラジオオグロ）は、滋賀県ならではの実践と言えるだろう。「アール・ブリュットなど、福祉から生まれる様々な表現の可能性について語り合う」この番組は、滋賀県の補助事業であった。様々な障害福祉の取り組みを全国に先駆けて行い、NOMAのような美術館運営も15年以上にわたって応援してきた県ならではの、「とがった」実践である。

ラジカセ世代と福祉職とラジオ

さて、私はラジカセ世代で、ダブルラジカセを手に入れた時のワクワク感は今も鮮明だ。寝なさいと言われて部屋へ行き、布団に入っても聴けるので、深夜までテレビは見られなくても、ラジオを聴くことは出来た。録音の機能もあるので、ラジオから流れる歌をカセットテープに録音して聞くことも出来たし、ラジオのパーソナリティふうに分の声を録音することだって出来た。録音した自分の声を聴き返して、あまりの気持ち悪さに一瞬で停止ボタンを押した

経験のある人は私だけではあるまい。

障害福祉の業界に入って20年余、障害のある人の支援を通して経験する世界の広さは、この業界に身を置く人でも想像しきれないのではないだろうか。色々な人の人生に関わらせてもらうのだから、想像しきれないのは当然と言えば当然であるが、私も想像もしてみなかった数々のことをこの仕事を通じて経験してきた。また、折に触れて感じてきたのは、福祉職である私たちの多くが、支援している人たちの魅力や、私たちの仕事の魅力を言葉にすることがあまり上手くないということだ。個性がない人はいないが、どこにも増して個性豊かな世界を、支援という形で関わった自分たちのものだけにしているのではないかとも思っていた。

そのような中、ラジオ番組による情報発信という機会が巡って来た。自分が現地レポートを担当するということになり、小学生の頃に吹き込んで聞いたあの気持ち悪さを追体験するのか、そしてそれを不特定多数の方々へ発信するのかわと思うと怖気が走った。しかし、先述のとおり障害福祉の世界を言葉で伝える必要があると思ってい

たし、何かが生まれ、行われている現場を訪れ、その場に触れることは何にも代えがたいことである。さらに、声だけだからこそ、紹介できる現場もあると考えられた。こうしてラジオオグロは、アサダさんによるゲストを招いてのスタジオトークと、現地レポートでスタートした。

一対一不特定〓体当たりの声

私の現地レポートを一言で言い表すと「体当たり」と、このドキユメントにも寄稿してくださったKBS京都の伊藤健営業部長は言う。言い得ている。現地に行き、アール・ブリュットの作者であればその作者の制作の様子を見て、御本人や周りの人に話を聞く。デザイナーであれば、そこに参加する方や職員の話の聞くというようなことは、支援現場で支援しているのと同様、それぞれの世界に迫っていくのに似たワクワク感があった。しかし、番組では最後、その日訪れた場面を総括するというのが必ず伴った。その方がどう思い、考えているかをじっくり聞く一対一の世界から、一気にクレーンで持ち上げられて大勢の前にさらされ、「はい、それがどういうことか簡潔に2分以内で述べよ」と言われるようなものである。支援現場での出来事は、日誌に記入する、ケース記録に記入するということでももちろん振り返っていたが、そこには一定、起きた出来事を咀嚼できる時間があつた。ラジオの世界ではそれが瞬時である。

その現場に広がる雰囲気や薄っぺらい言葉でなく、よりそこに見合った言葉で伝えたいと欲張るものだから、余計に戸惑い、でも言うしかない「体当たり」になっていたと思う。幸い、自分の声をラジオから聞くということに対しては、子どもの頃のような抵抗感はなくなくなっていったが（けして美声になったのではなく色んなことが受け止められる年齢になっただけである）、まとめの時間帯を聞く時は今でも落ち着かなくなる。

もう一つ、福祉の世界で培ったスキルこそがラジオの世界には合わなかったということがある。相槌である。相手の話を聞く時に、はつきり相槌をするというのは、スキルとして学んだだけでなく支援現場でも自然と強化されていくことだと思う。その調子で、当初は「うん、うん」「はい、はい。なるほど！」と取材現場で話してくれる相手の言葉に思いつき声を出して相槌を打っていた。現地レポートに同行してくれるのは、番組のディレクターである、永田和美さん、田中雅子さんが基本であるが、ディレクターの都合により、普段は現場に出ない伊藤部長が収録を担当することもあつた。その伊藤部長に何度か御指導いただいたのだ。「相槌はうなずきに替え、相手が話しているところに声を重ねないように」と。最初はとても収まりが悪くモゾモゾしたが、確かにほかのラジオ番組を聞いても人の発言にかぶせるように声を出して相槌している人はいないし、もしそうだとしたら聞きにくい。

パーソナリティ

アサダワタル（文化活動家）

音楽をはじめとした「表現」を軸に、福祉施設や復興住宅、小学校や街中で、「一人ひとりの個性」に着目したコミュニティづくりを行う。『住み開き 家から始めるコミュニティ』（筑摩書房）他著書多数。博士（学術、滋賀県立大学）。2019年度より、品川区立障害児者総合支援施設のコミュニティアートディレクター（社会福祉法人愛成会所属）に就任予定。

現地リポーター（2014年4月～2017年3月担当）

田端一恵（社会福祉法人グロー（GLOW）法人本部企画事業部副部長）

「福祉は究極のサービス業」というコピーに惹かれ、福祉の世界に入る。岩手県内で知的障害者入所施設の支援員等、いわゆる「福祉現場」での十数年の経験を経て、2009年に滋賀県社会福祉事業団（現グロー）に転職。障害福祉をベースに、さまざまな事業を担当。

現地リポーター（2017年4月～2018年3月担当）

鈴村りえ（社会福祉法人グロー（GLOW）法人本部企画事業部学芸員）

大学職員時代に子どものための造形ワークショップを担当し「表現を通じたコミュニケーション」に興味関心を持つ。その後、大学院にて美術教育と障害児教育を学び、修了後は文化事業の実施や文化施設の管理運営を行う。2016年より現職。NO-MAをはじめとした文化芸術関連の事業に携わる。

アール・ブリュットの（と）声

ラジオ番組「Glow～生きることが光になる～」ドキュメントブック

2019年3月31日発行

制作：社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～

発行責任者：北岡賢剛（社会福祉法人グロー（GLOW）理事長）

監修・構成：アサダワタル

編集：渡邊智穂、社会福祉法人グロー（GLOW）

イラスト：スケラッコ

デザイン：中崎航

写真：大西暢夫 [P13,14,39,65,66,83,84,108,131,132,152]

塩田洋 [P107]

発行所：社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～

〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦4837-2

TEL：0748-46-8100 FAX：0748-46-8228

印刷・製本：アインズ株式会社

©Glow 2019 Printed in Japan

平成30年度滋賀県障害者造形活動推進事業

生きることが光になる
glow

社会福祉法人 グロー

滋賀県社会福祉事業団と
オープンスペースれがーとが
ひとつになりました



ラジオから広がる世界

このようにラジオの世界のルールを、一部であるが教えてもらったことは、ピザ生地が熟練の職人によって上に放り投げられ、少しずつ大きくなっていくように、私の世界も広げてくれたと思っっている。そしてゲストの声はさらに私を広く丈夫な生地にしてくれた。講演を聞いても、ヒントとなる言葉はたくさん得られるが、ラジオを通じて届けられる声はそれにも勝るヒントをくれた。このことは、私が現地リポーターでお話した方と一対一の世界にいると感じたように、ゲストもアサダさんというパーソナリティと二人で話しているという感覚になり、構えずに話せたからではないかと思う。

ラジオセ主流だった時代と違って、今はカセットテープに録音していなくても、後から放送を聞くことができる。そしてラジオグローム例外ではない。テレビドラマやシリーズものの小説は見続け、読み続けると、その世界の一員に自分もなったような気になれるものであるが、ラジオグロームもその要素満載だ。固定した登場人物はアサダさんだけが、毎回替わって出てくるゲスト含めて、何だか一つの大きなストーリーのようである。聞き逃した人は、NO・MAのウェブサイトで聞いて、ラジオグロームの一人の気分を味わってみたい。きつとどんな分野にいても、ヒントになる声、自分がモヤモヤしていることに輪郭を与えてくれる声に出会えるはずだから。

これからも、はじまる

最後に、このラジオグロームは、私たちの法人名と一緒に（法人のほうは、GLOWとすべて大文字で表記という違いはある）。このタイトルで番組が始まったのは2013年10月であり、社会福祉法人グロー（GLOW）が誕生する前である。法人名がこのラジオ番組にあやかっているというのは冒頭のアサダさんの文章にもある通りだ。社会福祉法人グローのロゴマークはアルファベットを基調として、後藤哲也さんにデザインしてもらったものだが、どの文字も上部や下部に隙間があり完結していない。彩色もされていない。これは、グローという法人を、職員はもちろんのこと、施設を利用していらっしゃる方やその御家族、そして関わってくれる皆さんで線や色を足し、つくっていくと言う意味が込められている。ラジオグロームは終わったが、法人グローのロゴに込められた意味のように、今からでも色んな人によって、彩色されたり補助線が引かれたりできる可能性があると思っっている。このドキュメントブックはそのはじまりとも言えるだろう。

